

落花生とシリアル

cstnagai

零. 序章

結城順平が応接室のドアを開けると、真木宏太の拗ねた声が聞こえた。

「その代わりに、絶対にあの電柱抜いて下さいよ」

真木が身を乗り出して迫っている相手は、親子ほど歳の離れた谷口隆雄だった。不機嫌に目が据わっている真木に対し、三人掛けの革ソファを目一杯使ってふんぞり返っている谷口は、余裕の表情だった。

「ああ、抜いてやるよ」

氷だけが残ったグラスを左手でからからと回し、右手の指先ではささくれ立ったソファの茶色い革の端を掻きむしっている。

「谷口さん、ソファを壊さないで下さい」

部屋の中は、すっきりとしたアルコールの香りが満ちていた。順平の方を振り向いた二人とも、顔が紅い。テーブルの上には、サントリー響が1センチほど中身を残して置いてある。

「いいじゃないか、順ちゃん。革なんてほとんど残っていないんだ。宏太が座っているのなんて、革ソファじゃなくて白い布ソファになっているだろう。こっちのだって、もう二週間もすれば同じ状態になるよ」

「じゃあ、少なくともあと二週間はもたせて下さい」

谷口の返事は求めずに、順平は真木の隣の一人掛けソファにどさりと座り込むと、ウィスキーの角瓶を手に取り、口を直接つけて飲み始めた。

「電柱って、何の話していたんですか？」

ふてくされた顔のままの真木から目をそむけ、相変わらず上機嫌に見える谷口に向かって尋ねる。

谷口は普段寡黙で大人しい分、酒を飲むとその反動が出るのか、やけに饒舌になる。今も既に酔いが回っているようで、氷だけが残ったグラスを傾けて融けた冷水を飲むと、陽気に声を張り上げた。

「あれだよ。B棟からC棟に向かう途中に、一個だけコンクリ製の電柱があるだろ。あれの撤去のことだよ」

「順平さん、あれ抜くのはフォークリフトじゃ無理ですよ。クレーン持ってこないと、引き抜けないですよ」

順平よりも僅かに早く、谷口が口を開く。

「だからさっきから言ってんだろ。クレーンもフォークもいらなくて。あれくらい、おれが知恵を駆使して取っ払ってみせるよ」

「絶対に無理ですって。人力だけでどうにかなるもんじゃないですよ。順平さん、重機を持って来てって、赤木さんに頼んで下さいよ。ついでにでかい鉄球もお願いしてください。オレもうハンドドリルで頑張るの、嫌ですから」

「根性がないやつだな。しょうがないだろう。鉄球なんて使ったらすぐに周りにばれちまう。ダイナマイトで発破すんのと似たようなもんだ」

「ダイナマイトほどじゃないでしょう。爆破したら麓まで響くかもしれないけれど、鉄球の音なら山の下までは届かないですよ。きっと」

「ばか。意外と響くんだよ、これが。寺の鐘みたいに、辺り中にごーんごーんって音が届くもんだ。鉄球の音だって分からなくても、鐘みたいな音が聞こえたら麓のやつらが変わって思うだろ。そうしたらこの仕事も途中で終わりだ。おれは給料をもらえないし、順ちゃんも志半ばで諦めざるを得ない。下手したら、捕まっちゃうかもしれん」

「谷口さんの言うとおりに、鉄球は確かに駄目だ。悪いな、宏太くん」

いつまでも続きかねない二人の会話に入り込み、反論したそうな真木と得意げな谷口が再び言い合わないようにと、続けて言葉を出した。

「とはいっても、ずっとドリルだけで作業ができるとも思っていない。なんせ、鉄筋コンクリ4階建てが三棟だ

。この少人数で、手作業でどうにかしろとは俺も言えない。赤木さんにはもう重機の追加をお願いしている、反応はまだないけどな」

「相変わらず、信用できない人ですよ。赤木社長は」

真木のうんざりとした口調を受け流し、順平は二人にやんわりと言ってみた。

「電柱ですけど、別にあれはあのままでも構いませんよ」

二人は一瞬、呆けた表情で順平を見つめ、すぐに真面目な表情になった。

「いや、順ちゃん。今更それはないよ。おれはこの仕事を請けるとき、確かに全部壊せって言われているんだ。今になって、『電柱はそのままにしておいてください』なんて、順ちゃんは気を遣ったのかもしれないけれど、おれたちにしてみれば侮辱だ。役立たずって言われているようなもんだ」

「そうっすよ。出来そうにないからって、出来ないって決まってもいけないのに妥協しないで下さい。それに、順平さんの本心としては、何一つ残して欲しくないんでしょう？ここにあるもの、全部きれいさっぱり取っ払って欲しいんでしょう？」

二人とも、額が当たるほどまで顔を近づけ、真剣な眼差しをぶつけてくる。順平は窓の外に目をやって、二人の熱意ある視線を避けた。

街頭もない山奥だが、今夜は月が明るい。自由に伸びた雑草がその生息域をどこまでも広げており、その向こうに、白い建物が透けて見える。あちこちにひびの入った窓ガラスが、月明かりを受けてきらきらと輝いている。そのうちの一つに、あどけない表情の少女を見たような気がした。

一. 目的地(1/3)

ヒッチハイクをしていて止まってくれる運転手は、大体が気のいいおやじだ。時々若い兄さんもいるが、年齢に関係なく共通しているのは、脂汗で顔を照らせたタバコ飲みで、おしゃべり好きだということだ。

彼らは、ビジネスマナーには疎いが交通マナーにはうるさい。道路交通法では定まりのない部分にまで暗黙のルールを敷いている。しかし、それは一般車には強要できないルールである。同業者が何の愛想もなく煽ってきたうえ、滑り込んで前に割り込んだとしたら、そのような礼儀知らずな運転手は、少なくともその限界からは排除されなければならない。ところが、同じ事を、例えば免許取り立てのくせに親の車を乗り回しては粋がついている二十歳前後の子どもがやっても、トラウマになるほどの痛い目に合わせるわけにはいかないのだ。

ここ最近、高速道路の利用料金が下がったこともあり、昔に比べると格段に道が混む様になった。眠気との戦いもあるというのに、世間に疎い一般車の存在にイライラとさせられ、しかし、安全運転に努めなければならない。五年前と比較すると、トラック運転手のタバコ消費量は確実に増えているはずだ。

そんなことを思いながら真木が国道脇に佇んでいると、目の前に一台のトラックが止まった。その運転手は、わけにかっちりした印象の男だった。高校一年の夏休みにヒッチハイクで日本を縦断したことがあるが、「よければ乗っていきませんか」なんていう敬語を使う運転手には会ったことがなかった。

かしくまって助手席に上がったが、男は何も話し出さない。いや、正確に言うと「降りたいと思ったところで言ってください」と、臨機応変なタクシー運転手の接客のような台詞を聞いた。しかし、それだけだ。真木がこれからどこに行こうとしているのか、何を目的としているのか、普段何やっているのか、そんな基本的な確認すらしてこない。

タバコも吸わず、汗の蒸れた臭いしかしらない車内で、男は真剣な視線を、前方とバックミラーやサイドミラーに油断なく配っている。その目の端でちらりと真木を一瞥し、

「眠たければ、寝てもいいですよ。国道から外れる前に、起こしますから」

それだけ言って、再び運転に集中する。

悪い人間には見えない。ただの堅物、という印象だ。ここで真木が物音にも目覚めないほど熟睡したとしても、貴重品が身の回りから失われることはないだろう。しかし、真木は眠れそうになかった。男の態度に慣れない、というのも理由の一つであったが、それ以前に気が昂ぶったまま、落ち着けずにいたからである。

「あの」

沈黙に耐えられないように、真木は口を開いた。男が、厳しい視線をちらりと横にやる。

「話しかけても、大丈夫ですか」

「ええ」

怒っているような素っ気無い返事があっただけで、それ以上何も続かない。

「このトラックは、どこに向かっているんですか」

「岩手の山奥ですよ」

十分な説明をしたといわんばかりに、男は黙り込む。どんなに辛抱強く待ったとしても、それ以上言葉が続く様子はない。

「どこから出発したんですか」

「宮城県の栗原市からです」

真木は、栗原市がどこにあるか分からなかった。宮城県と言えば仙台市と塩釜市と石巻市と気仙沼市を知っているくらいだ。一時期まぐろ漁に憧れたため、全国各地の主要な漁港を覚えた。仙台市以外はそのときに覚えたのであり、恐らく真木の地元の友人らは、仙台市すら知らないかもしれない。

「すみません、ぼく、埼玉から来たんで栗原市がどこなのか分からないんです」

「そうですか」

しばらく続く言葉を待ったが、栗原市の説明が始める様子はない。諦めるように真木が口を出す。

「宮城県のどの辺りにあるんですか」

「北部の、山奥ですよ」

車内が静まり返る。

真木は不満を感じ始めた。高校を卒業して間もない子どもが、夏休みにはまだ早いこの時期に、東北の国道沿いでヒッチハイクをしているのだ。家に帰らなくてもいいのかとか、学校はどうしたとか、そういった質問があってもいいだろう。

実際、埼玉の草加から東北道を経て福島県郡山市に入り、高速を降りて国道4号線をずっと北上して福島市、宮城県仙台市を通過し、岩手県に入ってすぐの一関市のコンビニで放り出されるまでにトラックを四台ほどハシゴしたが、どの運転手も必ず真木を質問攻めにした。歳はいくつだ、どこからきた、どこへ行く、学校には行っているのか、将来何になりたいのか、兄弟構成、恋人の有無、応援している野球チーム、サッカーチーム。

真木は、それらの質問に全て答えた。道端でトラックが目の前に止まるまでの間、次はどんなプロフィールを語ろうか考えを巡らすのも楽しかった。一台目のときは、全国をヒッチハイクで旅する少年を演じた。二台目は、長距離運転手の実態を調査するフリーライター、次は遠くに住む格差のある恋人に会いに行く箱入りのボンボン、ついさっきまでは、両親の不仲を原因に家出し、祖母の元に向かう高校生だった。そして今回は、東京でミュージシャンを目指して極貧生活を送るギターマンの帰省途中、という設定でいた。

嘘話をしているときは楽しい。存在しない人物の苦勞話や自慢話を感心しながら聞いて、他人が喜怒哀楽を出しているのを見るのは面白い。騙される人間の滑稽さを嘲るよりも、話している間はまったく別の人格になれる非現実さが心地よかった。

そんな会話がこの車内では不要だということに気付くと、真木は運転手同様、むっつりと黙り込むことに決めた。

二十分ほど走ってから、初めて会った信号で止まった。反対車線沿いに、駐車場の拾いコンビニが必要以上の光を放っている。仮眠を取っているのだろうか。エンジンを落としたトラックが二台止まっている。

アイドリングストップをして、車内は無音になった。呼吸の音すら騒々しく感じ、真木は息苦しくなった。男は完全な沈黙を守っている。

せっかく育てていたミュージシャンとしての自分の背景を、男に語ろうかと思い、止めた。たった数時間しか時間を共有しない相手に、わざわざ嘘の自分を知ってもらう必要はない。売れなくて生活に困っているミュージシャンもどきなど、都会に行けば住宅街の電柱より密集している。そういった人たちの生活の苦勞を想像して語ったところで、聞き手に好奇心があればまだ楽しませるサービスになる。乗せてもらったお返しにもなるし、楽しんでもらったという自己満足にも繋がる。しかし、興味のない嘘を聞かせたところでただ虚しいだけだ。

実家を出てから一日は経っている。これまでに会った四人の運転手に対し、虚しい時間を共有させてしまった自分に嫌悪を感じた。真木は、心身ともに疲れている自分に気付いた。

「運転手さん、聞いてください」

男は無反応だった。しかし、それが否定を意味するものではないと、真木には分かった。

「オレね、死に場所を探しているんです」

そう言えば二日間近く寝ていない、と真木は気付いた。家を出てから、道沿いに立っているか、硬い座席に座っているかのどちらかだった。ふくらはぎが張っていて、足の裏がひりひりと痛む。後頭部に鉛が埋め込まれたようで、頭を支えることすら首が拒否をしている。じわじわと、まぶたが下がってきた。

「誰にも気付かれないようなところでね、死にたいんです。死体が白骨化して、朽ちて、野生動物や植物の栄養になって形がなくなるまで、見つからないところに、行きたいんです」

言葉の最後の方は、声がきちんと発されているのかもあやふやだった。もしかしたら、むにゃむにゃという寝ぼけた音しか出ていないかもしれない。それでも仕方がなかった。何しろ、眠いのだから。

そうだ、眠いから全て仕方ない。こうして本当のことを言ってしまったのも、眠さがそうさせていることだ。暴力的な眠気に勝てるものなどない。だからこそ、冬山で遭難すると、人は死ぬ。あれだって眠くならなければ助かるだろうに。

自分の思考が曖昧になっていると分かっていても、真木にはどうしようもなかった。目は完全に閉じている。「そんなところに、連れて行ってください」

最期の言葉を搾り出す。夢すら見ない、深い眠りにつけそうさ。そう思った瞬間、安堵した。思えばあれ以来、しっかりと眠った夜はない。眠ろうと思うと涙が邪魔をした。疲れ果てた頭に悲しい記憶が蘇り、かさかさに乾いた体から更に水分を搾り出させた。

こんなに安らかな眠りが再び訪れるとは思ってもしなかった。一生、過去に囚われて、先の見えない暗闇を歩く人生が死ぬまで続くと思っていた。だからこそ、真木は死のうと決めたのだ。眠りは、そんな深い悩みからのひとときの解放だった。

男が短く、何か言う。分かった、と、真木には聞こえた。

一. 目的地(2/3)

耳を突きぬく騒音に、真木は起こされた。全身がぐっしょりと汗をかいている。眩しさと騒々しさに、少しずつ意識がはっきりする。

背中や首がなんだか痛い。トラックの助手席に乗ったままでということに気付いた。周囲の明るさからすると、朝の時刻は過ぎているようだった。窓が締め切られた車内で、どおりで暑いはずだと納得した。

窓を開け、外に首を出す。すうっと涼しい風が入り込み、爽快感が広がった。新鮮な空気が体に巡るのを感じる。思考が更にクリアになる。

生き生きと成長した雑草に、目の前の視界が覆われている。上を見上げても空が続くだけだ。車の正面には、押し倒された雑草の上についたタイヤの跡が残っていて、更にその向こうに広がる荒地が、緩やかに下がっているのが分かった。どこか標高の高いところにいるようだ。運転席側に目を移したとき、窓の向こうにコンクリートの壁が見えて少し安心した。平屋の、小さな小屋が建っていて、その壁には蔦が這っている。こちら側は日当たりが悪いようだ。

硬いものを機械で削る音がする。道路工事の横を通るときに、よく聞く騒音に似ている。窓を閉め、真木は車の外に出た。自分の身長を越す太い茎の雑草が目の前に立ち並ぶ。それを掻き分けながら車体を迂回し、小屋へと辿り着いた。

職員宿舎管理棟、と、辛うじて文字が残る木の看板が掛かっている。こげたように全面が黒ずみ、よくよく目を凝らさないと読めないほどだ。この小屋が、だいぶ昔に看板通りの役目を果たさなくなったことが、安易に察知できた。

ドアには鍵が掛かっていなかった。そっと忍び込むと、籠った空気が全身を包んだ。カビ臭さよりも埃臭さよりも、タバコの臭いが勝っている。喫煙者と関わりの少ない環境で育った真木は、喉の痛みを覚え軽く咳き込んだ。左腕の袖をマスク代わりに口に当て、そのまま進む。床の泥汚れを確認し、躊躇なく土足で上がりこんだ。

小屋の中は簡単な間取りだった。

入ってすぐ、右手のドアには『事務室』というプレートが張り付いていた。ドアノブに手を掛けてみたところ、鍵が閉まっていた。廊下をはさんで反対側には、『洗面所』と『給湯室』があった。洗面所は名前のとおりトイレと洗面台があり、更に狭いシャワー室も設置してあった。給湯室には流し台と一口コンロが置いてあり、給湯器の下には皿が何枚か重ねられていた。

ここで、誰か生活しているようだ。きれいとは言いがたいが、洗面所も給湯室も、手入れがされている。食器の汚れは数十年前のものではなく、ついさっきレトルトカレーを食べたような汚れ方だった。

あの、トラック運転手だろうか。始終無表情だった男の顔を思い浮かべる。あの男が真木を、どうやら本当にどこかへと連れてきたようだ。不安が湧いてくる。もしかすると、自分はここでどうにかなってしまうのかもしれない。恐怖が隠れた不安だった。

短い廊下の突き当たりは、『応接室』だった。開けてみると、真木はその部屋の臭いに気分を悪くした。空腹の体の中心から、熱くすえたものが上がってくるのを感じ、慌てて顔を逸らした。真木はまだ酒を常飲できる年齢ではなかったため、それが、湿った環境下で少しずつ発酵したアルコールによる臭いと分からなかった。それとウィスキーと焼酎とタバコといくつかのスナック菓子が交じり合って、世の中の澱みに浸されていない少年を拒むバリケードを築いていた。じつくりと室内を見回す余裕もなく、真木は小屋の入り口へと急いだ。

草の青臭さを含んだ空気が、爽やかでおいしかった。今頃気付いたが、いい気候だ。天気もいい。ゆっくりと深呼吸を繰り返す。

かちやかちやと金属がぶつかる音が近付いてきた。真木がそちらを向くと、昨夜話したトラック運転手が工事現場の作業員のような格好で現れた。

「起きたか。もう昼だ」

トラックの中では気付かなかったが、男はいい体軀をしていた。手足は完全に作業着に覆われているが、唯一露出している顔は赤黒く焼けていた。肩幅は広く、腕は真木の腹回りよりも太く見えた。

「昼飯、一緒に食わないか」

男は言葉少なく用件を伝えると、真木を押しよけるように小屋のドアノブに手を伸ばし、返事を確認せず、突き当りの応接室の中に入って行く。真木は先ほどの臭いを思い出し、胸がむかついた。あんなところで何か食べるくらいなら、空腹を我慢した方がマシだ。

「あれ、ひょっとして新入りが来たの」

小屋の中に気を向けていた真木は、後ろから別の男がやってきたことに気付かなかった。反射的に振り向くと、頭一つ分は真木よりも高い、若い男が立っていた。二十代そこそこ、といったところだろう。言葉に詰まっている真木とは反対に、男は少しも動じる素振りを見せず、小屋の奥に向かって叫んだ。

「谷口さーん、この子、新しい作業員なのー」

「ああ。三人で飯食おう」

「そっか。じゃあ昼飯にするか」

あっさりとしたやり取りを済ませ、若い男は真木の背中を押すようにして小屋の中へと入った。またあの臭いを思い出し腰が引けたが、男はそんな真木の様子に少しも気付かず進もうとする。抗うことは許されないような気がして、恐怖を抱きつつも、再び応接室に入ることになった。

正直、さっきよりは平気だった。先に入っていた谷口が、窓を開けていたのだ。鼻から入る空気に微かに腐敗臭が混じるが、我慢できないほどではない。促されるまま、真木は入り口すぐの、革のはがれたソファに腰掛けた。

「さあて、今日は何にするかな」

若い男は一人掛けのソファにゆったりと座り込み、床に置かれた大きい段ボールをあさる谷口に呼びかけた。

「俺、今日はうどん系でお願いします」

段ボールの中には、大量のカップ麺が入っていた。注文を受けた谷口がちらりと顔を上げる。

「順ちゃん、うどんは貴重だよ。カップヌードル塩味で我慢してくれ」

「いや、まだけっこう残っているはずですよ。うどんが。もう少し頑張って探してください」

「まったく、仕方ない、ほら、あったよ」

「ありがとうございます、ご苦労さんです」

「ぼうず、塩ヌードルでいいか」

谷口の気難しい目が、真木を見据える。嫌とは言えなかった。真木が何か返事をする前に、カップヌードルが飛んできた。谷口は自分用のだろうチキンヌードルと塩ヌードルを一つずつと割り箸を三膳、表面の曇ったテーブルに乗せると、応接室から出て行き、そして、給湯ポットを持って来た。壁から伸びる延長コードに挿す。

お湯を注いでからの待ち時間に、若い男が谷口に聞く。

「で、谷口さん、この若い子、紹介してよ」

他の誰かがいるのかと周囲を見回してから、自分のことを指しているのだと真木は気付いた。

「そうだったな。坊主、自己紹介してくれ」

得体の知れない二人の男を前に、真木はおどおどとした弱気な態度になるしかなかった。促され、小さい声を絞り出す。

「真木、宏太と言います」

「宏太くんか。俺は結城順平。よろしく」

「谷口だ。谷口隆雄。よろしくな」

各々の名前を明かしたところで、谷口が率先してカップヌードルを啜り出した。釣られるように順平も蓋を

外し、湯気を息で飛ばし始めた。出遅れた形で真木も食い出す。

カップヌードルなんて、一年に一度食べるかどうか、といったところだ。真木の母親は家事をきちんとする人だったので、朝食には一汁三菜が並んだし、高校にコンビニ弁当を買って持って行ったこともなかった。部活が遅くなって帰った日も、暖かいごはんが食卓に並んだ。

体に悪いから、と母親は言っていた。だから真木はほとんどインスタント食品を食べたことがなかったし、特に食べたいと思った事もなかった。母親の手料理の方が、当然おいしいものだと信じていた。

しかし、人生で何回目かに食べたカップヌードルは、母親が用意する食事とはまた違ったおいしさがあった。敢えて表現するならば、危険な味、というのが相応しい。舌はうまいと言っている。しかし、頭のどこかで食べることに對する警報が鳴らされている。その警報は、一度限りならば許してくれそうな響きだ。しかし、二度目を許してくれるかは分からない。だから、二度目はないと自分を騙しながら食う。汁を飲みきるまで、真木は夢中で食べた。腹が落ち着いたとき、谷口と順平がこちらに好奇の目を向けていることに気付いた。

「そんなに腹減っていたのか。もう一個食うか？」

段ボールをあさりに席を立とうとしている谷口を、慌てて止めた。

「いえ、もうお腹はいっぱいです。ただオレ、インスタント食品ってほとんど食べたことなかったから。うまかったです。ご馳走さま」

「へえ。インスタント食品なんて、俺にとっては幼少時代の食事の定番みたいなものだったけどな。宏太くんは育ちがいいんだな」

そういう順平の身のこなしも、洗練されたものだった。カップうどんを持つ姿は泥に汚れた現場の男だが、顔つきや食べるときの姿勢、箸の運び、きれいな口調を聞いていると、優秀なクラスメートを思い出す。家が開業医で、有名私大の医学部しか受験しない、と言っていたインテリだ。金持ちで頭がいいからって、嫌味な奴ではなかった。ただ、少し周りから浮いていたのを本人も周りも気付いていたし、でもそれを口に出して指摘するやつもいなかった。

順平を見て、真木はそいつを思い出した。

そんな人に育ちがいいと言われる覚えはない。自分はただ、平凡な家庭に育っただけだ。

そうは言わずに俯いていると、谷口が大きな溜息をついた。

「そんだけしっかり食べるんだから、昨夜言っていたことはひょっとして冗談だったのか。本気だったらわざわざ腹の中にももの入れようなんて思わないだろ」

谷口が何を示しているのか分からず少し戸惑い、そして、はっと思い出す。全身に緊張が走り、頬が引きつった。

「あれは、本気です」

低い声を絞り出してから、歯を食いしばる。ここまでやってきた目的を忘れないように、あの惨めな思いを蘇らせる。滲んできた涙を必死で堪えた。

「谷口さん、なに。何かあったの」

命に関係する話とは思ってもせず、順平はうどんを啜りながらぼんやりと尋ねてくる。塩ヌードルを食べ終えた谷口は、チキンヌードルの蓋を開けながら順平と同じ調子で返した。

「この、宏太さ、自殺する場所を探して埼玉から遥々ここまで来たっていうんだよ。誰にも知られずに死んで、死体もすっきりきれいになくなるまで、死んだ事も知られたくないんだって。だから、あそこなんていいんじゃないかと思って」

微かに眉間に皺を寄せ、次の瞬間に順平は大きく頷いた。

「あそこ。ああ、C棟の裏の崖か。確かに、あそこなら骨がなくなるまで誰にも気付かれずに済みそうだな。なるほど。いいんじゃないかな、あそこで」

「決まりだな。じゃあ、宏太。今のうちに下見に行っておくか。気に入らなかつたら、また国道まで連れて行っ

てやる。そこでまた別のところを探すんだな」

真木は啞然としたまま二人の会話を聞いていた。死をかけて悩んでいるということを、本当に理解しているのだろうか。まるでそんな様子ではない。

昔、真木の両親が、『会社の同期が、トルコに旅行に行ってきて、お土産につてこんなものくれたんだよ』、『あら、綺麗なガラス細工ね。白鳥かしら。せっかくだから、どこかに飾ろうかしら』、『玄関はどうだ』、『ああ、玄関にしましょうか。靴箱の上に置きましょう』という会話を交わしていたが、その時の雰囲気となんら変わらない。

順平と谷口は、ほぼ同じタイミングでカップの中身を飲み干した。そして、二人揃って大きく息を吐き出す。気合を入れて立ち上がったのは谷口の方だった。

「よし、じゃあこれから崖を案内する」

「俺も行きますよ」

当然のように順平も立ち上がる。釣られて宏太も立ち上がった。しかし、その顔は少し青ざめている。

順平が応接室の窓を閉めた。密閉した空間になった途端、部屋の隅々から沸きあがっていた悪臭が立ち込める。先ほど食べたカップヌードルの臭いもそこに混ざり、カラスに荒らされた後のゴミ捨て場の臭いがした。それでも真木は、応接室から出たくない、と強く望んだ。

一. 目的地(3/3)

谷口が大股で進んでいく。その後を、順平の長い足が追う。真木は小走りに雑草を掻き分けるしかなかった。小屋から三十メートルほど歩き、不意に視界が開けた。地面に砂利が敷き詰められていて、所々からしぶとい草が長く伸びている。平らにならされた砂利がしばらく続き、視界の向こうで空と接していた。そこで勾配が急に落ちるのだろう。

「あれが、C棟だ」

谷口が右手側を指差した。その先を追っていくと、白っぽい建物が立っていた。それは公営住宅のようだった。窓の一つ一つにベランダがついていて、それらは完全にさびていた。中には手すりの一部が失われたベランダもあった。元は、コンクリート打ちっばなしの白い壁だったのだろう。数十年を経た結果、全体がこげたようにまだらに黒いシミがつき、壁には無数の細かいひびが入り一部削げ落ち、ガラスの割れた窓が増え、鉄製の非常階段は二階まで伸び、そして再び一階へと落ちている。

「もちろん、人は住んでいない」

容易に予想できることを確認するかのように、順平が解説する。真木の目が建物に釘付けになっていることに気づき、更に言葉を続けた。

「この辺りは鉱山地帯なんだよ。地面の下のあちこちに坑道が走っている。ここは日本でも特に大きいほうで、一時は鉄を年間五十万トン出していたんだ。もう、五十年も前のことだけれども。

俺らが今いるのは、その鉱山を操業していた会社の寮なんだ。さっき昼食を摂ったのが管理棟。そしてあれがC棟で、他にA棟とB棟もある。ほら、ここから見えるだろう」

次々と順平が指し示す方向に、言われるままに顔を向け、最終的には後ろを振り返っていた。重なって二つの棟が見える。A棟、B棟だろう。どちらもC棟とほぼ変わらない大きさで、変わらない様相をしている。

「ここに住んでいたのは、その会社の社員とその家族だけだ。ここからもう少し坑口に近付いたところに、出稼ぎ労働者達が寝泊りするためのバラックが並んでいたそうだ。今はもう何もなくなっているけれどね。そして逆に、ここからもう少し麓に下ったところには、鉱山労働者のために用意された町が広がっていたらしい。生活用品は何でも揃って、しかも安く提供していたそうだよ。あと、小中学校や総合病院まで用意されていて、どちらもただで利用できたそうだ。今で言う、会社の福利厚生みたいなもんだな。まあ、操業全盛期のほんのひと時だけの話だろうけれど」

「鉱山、ですか」

真木にとって、鉱山などという言葉は漫画や映画の中以外では歴史の時間の近代日本史で参考書の片隅にちらりと出てくるだけの単語だった。それはあまりにも古い存在で、その痕跡がまだ残されていることが非現実的だった。

「もうほとんど面影残っていないけれどね」

順平ががっかりしたように溜息をつく。真木よりも僅かに歳を食っただけだろう順平が、教科書に乗るくらい昔のことをすらすらと話すその様子も、大きな違和感だった。

「この建物は、どうしてこんな、廃墟のようにになっているんですか」

なんとなく思い浮かんだ疑問を口にしてみる。少しの問題も感じさせず、順平はつまらなそうに答えた。

「大した話じゃないよ。鉱山が掘りつくされて、会社はここから撤退することになった。そのとき、学校や病院があつた土地は国有地を借りていただけだから、返すときにまっ更にして返さなければならなかった。それに対して、こちらの土地は会社が所有していた土地だった。操業時は値段のあつた土地だったけれど、今となつては固定資産税も数百円程度。所有権を手放して国有地化するために更地にするよりも、ずるずると数百円ずつ払い続けた方が、どう考えて安く済んだってわけさ。そして、その会社は倒産することなく今も続いている。きっと宏太くんも聞いたことがあると思うよ」

そういつて順平が口にしたのは、CMでも聞いたことがある有名電気メーカーと同じ名称だった。思わず、声を上げて驚く。

「じゃあ、オレら今、その土地に侵入しているんですか」

悪いことをしているというよりも、訳の分からないことをしていることへの恐怖で、真木の緊張は張り詰めていた。

「その点は心配しなくていい。この一帯、俺が買い上げている。だから今は、俺の土地だ。宏太くんも、不法侵入なんかじゃないからね」

その答えに安心はせず、新たな疑問が芽生えた。

「ここを、買ったんですか」

「ああ」

「なんで」

順平の答えは遅れた。特に表情は変えずに、考え込むように口を閉ざしている。ためらうことなく谷口が代わりに話し出す。

「おれは、順ちゃんに雇われている身だ。正確に言うと、順ちゃんが仕事を依頼している会社に、臨時で雇われた作業員兼トラック運転手だ。詳しい事情はおれも知らされていないけれど、おれが社長から受けている指示は、あの三つの廃墟を全部壊して、跡形もないくらい、きれいさっぱり片付けるってことだ。時間は掛かってもいいから、他人に気付かれないようにこっそりと、とな」

「全部壊す」

意味もなく、谷口の言葉を繰り返す。順平は変わらぬ無表情のまま、深く頷いた。

「つまり、そういうことだ」

「なんで」

デジャ・ヴのような質問に、今度は不機嫌を顕にして順平が答える。

「谷口さんにも話していないことだ。ここに来て間もない君に打ち明けるわけにはいかない」

「そういうことだ。宏太も知りたいなら、おれよりも熱心に働くことだな。ああ、これから死ぬんだっけな。関係ないな」

谷口の口調はあからさまに真木の決意を馬鹿にしていた。自殺なんて口だけだろう、と面白がっている。真木にはそれが挑発にしか聞こえなかった。カッと湧いてきた怒りを抑え込み、荒々しく歩き始めた。

「そうですね、オレはこれから死ぬわけですから、知っても仕方がないことです。さあ、早くおすすめの自殺スポットに案内してください。もう、金だって一円もないんだ。これじゃあ一日だって生活してられないし、オレはもう、今日死ぬしかないんです」

C棟に向かって歩調を速める真木の後姿を眺めながら、順平と谷口は目を合わせて肩をすくめた。

遠くからはずっと続いているように見えた緩やかな下り坂だった。少し前を歩いていた谷口が急に立ち止まり、どうしたのかと思い真木がその横に並ぶと、一メートル先はただの空間だった。

「あまりぎりぎりのところまで近付くな。すぐに崩れるぞ」

吸い寄せられるように前に足を踏み出そうとした真木を、谷口が鋭い声で止める。はっと体を強張らせ、その場に足を凍り付かせた。

真木が背伸びして下の方を覗いてみる。山肌がえぐり取られ、黄褐色の地面がむき出しになっていた。そこにはささやかな雑草一本すら生えていない。今にも崩れ落ちそうな土の塊りが所々に見られる。こうして眺めている間にも、やっと目の届く底に近いところで小石や土が転げ落ちていくのが見えた気がした。

「さっきも少し言ったけれど、この辺りは一帯が鉱山地帯なんだ。気付いたか分からないけれど、この辺りはずっと、背の高い木は生えていない。腰ほどの高さの低木か、あとはしぶとい雑草ばかりだ。場所によっては砂漠みたいに点々としか緑がないところもある。鉱山開発で伐採された、というのもあるけれど、そもそも、山自体

が強い酸を持っているから、深く根を張っては成長できないんだ。表面の土壌は、あとから無害なものを持ってきて盛り上げていたり、元々酸を持っていたけれど長年雨に晒されて洗い流されたかして、無害になっているんだよ。だから、雑草みたいに表面に根を張る植物はこうやって遅く成長できるわけだ」

真木が遠くに目をやると、向こう側にも削られたような崖が見えた。側面を下から削っていったため、上面だけが広く残ったようだ。崖の淵では、僅かな厚さの土を残してその下を、徐々に崩壊している不安定な粉の塊りが、無責任に支えているだけだ。自分の足元が正にその状況だと真木は想像し、思わず後ろに数歩退いた。

「ここからは見えないけれど、この下には小さな沢が流れているんだ」

腰が引けている真木の様子に気付いているのかどうか、順平は淡々とした説明を続ける。

「酸を持っている地面を流れている沢だから、水が金属が溶けるくらい強い酸性を帯びている。だから見た目はすごく綺麗なんだ。透明度が高くてね。でも、魚も住めない沢だ」

「で、そんな沢でこの崖だから、人はまず寄り付かない。釣りをしようにも魚がいなし、山菜を採ろうにも雑草すらまともに生えていない。いつ崩れるか分からないから、レジャーで沢登りに来る事もない。この崖の下は、そういう沢になっているんだ。どうだ、死に場所としてちょうどいいだろう」

「ここから落ちれば、この高さだからほぼ間違いなく死ぬよ。そして、誰にも気付かれず見つからずに済む。万一命だけでも助かったとして、誰かが助けに来ることはまずないだろうから、どんなに悔やんでも長く持たずに死ぬだろうね」

平然と二人が言うのを聞きながら、真木は想像してみた。ここから身を投げ出した自分。まっさかさまに落ちていく自分。途中の土肌か、沢の底に打ち付けられた自分。その時点で生きている可能性はゼロだ。万一もなく、間違いなく死ぬだろう。そして、誰にも見つからずに、そのまま朽ちていく自分の体。

「怖くなっただろう」

谷口は柔らかい口調で言ったのだが、それが真木には馬鹿にしているように聞こえた。完全に怖気づいていた心に、再び火が灯る。

「いや。そんな甘い覚悟で家を出てきたんじゃない。お二人とも、ありがとうございます。確かにここは、寂しく死ぬにはうってつけの自殺スポットですよ。オレは、ここから飛び降りて死ぬことにします」

辺りが静まり返る。真木の言葉を聞いて、それを止める言葉も煽る言葉も発せられなかった。ただ、風の流れる音と、何かがからからと落ちていく音が遠くに聞こえただけだった。

真木は、二人に気付かれぬように、ゆっくりと息を吐き出した。そして、静かに深く呼吸をする。目の前の広大な空間は、その一帯だけがブラックホールに吸い込まれたようにぽっかりと開き、そして何かを更に引き寄せている。足を踏ん張っていないと、その気はなくても体が引きつけられそうだ。少しの弾みがあれば、いつ誰でも身を投げ出したくなるだろう。

真木はこっそりと深呼吸を繰り返し、それから軽く咳払いをした。

「ところで、順平さんはなぜここを壊すんですか」

不意に投げかけられた質問に、順平はびっくりした顔を見せる。

「なぜって、それは君には言わないって、言っただろう。お互いそんなに知った間でもないし、それにどうせ君はこれから死ぬんだ。知る必要はないって、自分でも言っていたじゃないか」

「確かに、さっきはそう言いました。でも逆に、どうせ死ぬなら教えてくれてもいいじゃないですか」

「別に君の好奇心を満たすために…」

「どうしても、どうしてもオレにはまだ教えられないって言うなら、順平さんが教えてくれる気になるまで、オレはここにいます」

順平の言葉を遮って、真木は堂々と言い放った。二人が、怪訝な顔で真木を見つめる。

「オレ、手伝いますよ。ここを壊すのを。だから、オレに真実を打ち明ける気になったら、いつでも呼び出してください。オレはそれを聞いた後で、ここから飛び降ります。」

あ、あまり役に立たないかもしれないのでバイト代とかは請求しませんが、毎日の食事と寝床くらいは用意してくださいね」

一方的に宣言すると、身を翻して一目散にその場から駆け出す。草の根につまづきながら、どこへというでもなく、真木は走っている。その場に残された二人は、呆然とその後ろ姿を眺めながら、しばらく無言で佇んでいた。

「どうしたんでしょうかね、あれ」

「よくは分からんが、今は死なないって言うならいいんじゃないか」

「谷口さん、あの子の面倒、見てくれますか」

「おれが拾った子どもだしな。思春期の息子だと思って可愛がってやるさ」

二人でぼんやりと真木の様子を見守る。何を目指して進んでいるのか分からないが、さっきから何度も一瞬止まって転びかけている。

「やれやれ、あんなにはしゃいで。この状況だっていうのに、若者は分からんね。下手に怪我されても困るから、今のうちに止めてくるか」

重そうに足を踏み出し、谷口がその場から離れる。その背中に向かって、順平は少し大きな声を出した。

「一応言っておきますけど、あの子がさっきここから飛び降りたとしても、俺は別に構いませんでしたからね」

順平の淡白な声にぴたりと足を止め、微かに後ろを振り向き、

「おれも、別に構いやしなかったよ」

谷口はずんずんと草むらを突き進んでいった。

二．発端

順平が谷口と会ったのは、真木がやってくるより三週間前のことだ。

現場の近隣で、順平の依頼を引き受けると答えたのは、宮城県栗原市にある個人経営の産業廃棄物処理業者のみだった。

元々、込み入った事情を抱える仕事になるということは、順平も良く理解していた。肝試しスポットとして一部の若者が無断で侵入するほど鬱蒼とした不気味さを放つ旧宿舍だが、古くからの地元住民にしてみれば、町が最も栄えた華々しい時代の思い出の一部でもある。旧鉱山会社から土地ごと買い上げたときも、『戦中には富国強兵を、戦後は高度経済成長を支えた国家財産の礎と言っても過言ではない歴史的建造物の一つなのだから大切に欲しい』と言うような希望を聞かされた。大袈裟な冗談を、と笑い飛ばそうとしたが、総務部長はにこりとも笑わず、懇願するように順平から目を離さなかった。

麓に残る町に、慎ましい規模で設置された鉱山資料館を訪れたとき、全盛期とも言える一九六〇年代に坑夫として働いていたという八十過ぎの老人が内部を案内してくれた。彼は、順平から当時の様子を尋ねられると、きらきらと目を輝かせ、曲がっていた背筋をぴんと伸ばし、息をつく暇もなく、この町が日本国力の基盤となり如何に栄えたか、今の人口の千倍もの労働者が如何に恵まれた生活を送っていたかを語り始めた。

町役場の商工課には、解体工事の正式な届出を提出に行った。知り合いの建築士に内容を見てもらい、不備のないように作成したつもりだった。

しかし、町から工事の許可は降りなかった。

理由を尋ねに役場を訪れた順平に対し、大学を卒業して間もないだろう係りの男性は、表情はにこやかながらも敵を見据えるように順平を睨みつけながら、詳しい事情は話せないことになっております、と深々と頭を下げてきた。庁舎内にいる人間全ての視線が、敵意に満ちていた。

うんざりだった。

若者も年寄りも関係なく、昔の栄華にしがみついている。当時使われた宿舍の廃墟など、今となっては栄光の虚像でしかない。朽ち果てていく様子を目にしなが、網膜に焼き付けた過去の絢爛な姿を脳裏に写しだそうとする、そんな執着を順平は憎んでいた。

本当に、下らない。

そうぼやいても、事態が進むわけではない。知り合いの建築士の伝を使いながら、そういった背景を包み隠さぬように話し、断られては他の紹介され、それを繰り返しているうちに、真つ当な業者は手札から消え去っていた。

赤木涼介という四十手前の男が経営する『赤工クリーンサービス株式会社』は、知り合いの建築士が頻繁に仕事を供にする建設業者の下請けの親戚と付き合いがある、ということで行き着いた、地獄の果てのような会社だった。会社の事務所だと指定された住所を訪れると、そこは木造二階建てアパートの一階角部屋で、表札には『赤工クリーンサービス株式会社』と手書きで書かれているだけだった。アパートの駐車場に大型商用車見当たらず、代わりに鬱陶しいくらいまでワックスで磨き上げられた白いベンツが停まっていた。

六畳一間の和室のど真ん中に机と椅子が置いてあり、他には棚もなく、必要最低限の文房具ですら見当たらなかった。そのため、机の上に置かれた固定電話にはいやでも注意を引かれた。埃の被った電話機から伸びる二本の線は、両方とも壁から離れたところで行き倒れている。

「事業所を構えるにはね、住所と電話番号が必要なんですよ」

順平の視線に気付き、赤木は面倒臭そうに言った。

「産廃処理業者として届け出ないと、仕事ができないんですよ。そして、届出の際には住所と電話番号が必要。電話番号を書かされたもんだから慌てて電話機も用意したんですけど、役所から掛かって来るわけでも、役人が確かめに来るわけでもなし。とんだ無駄をしましたよ」

留守電機能も付いていない簡素な電話機を、赤木は憎しみを込めて睨んだ。

昭和初期の雰囲気が漂う下宿アパートの中に、アルマーニのストライプスーツで着飾った男が、パイプ椅子に腰掛けて偉そうにふんぞり返っている。世の中と言うのは、こういった小さな歪みから壊れていくのかもしれない。

そして自分は今、壊れていく世界の真っ只中に、飛び込もうとしている。

赤木に気付かれないよう、諦めを込めた溜息をつく。今更引き返せないことは、順平自身がよく理解していた。例えここで踏みとどまり、崩壊から免れる安全な場所に避難したところで、誰かが喜んでくれるわけでもない。ただ、惨めな自分に気付くだけだ。

順平の覚悟が固まるのを見計らったかのように、甘い言葉が囁かれた。

「結城サン、うちはね、なんでもやりますよ。もらえるものをもらえれば」

地獄の沙汰も金次第って言うでしょう、と、赤木はにやりと笑う。目の前にあるのが獲物かどうかを見定めようとするカラスの目つきを持つ男だった。

順平が持って来た仕事の内容は、予め誰かからか聞いていたのだろう。説明を聞こうともせず、赤木は金額を出してきた。そして、この金額はあくまで基本料金です、と含みを持たせた念押しをしてきた。

「うちからそちらの現場には、一先ず作業員を一人遣りますよ。その者と一緒に、結城サンの仕事に必要な人数と日数と機材を相談してください。現場の状況が分かったらまた会いましょう。正確な金額についてはそのときに決めることとしようじゃないですか」

順平としては、赤木からの提案を断る選択肢はなかった。ここで断られたら、次が見つかることはないだろう。吐き気がするほど汚らしいとしても希望は希望なのだ。

ただ、このことは嬉しい誤算だった。真っ先に現場に送られる作業員は、赤木の手下同然の者だと思い込んでいた。少しでも金を巻き上げようと、順平を言いくるめるために派遣される者だろうと。しかし、現場で初めて会った谷口は、全くそんな空気を持っていなかった。

気難しい現場の頑固親父のようにがっしりとした体軀をしており、眉間には常に深い皺が刻まれており、細い目で鋭く周囲を見据えている。点々と白髪が混じった髪は短く刈り込まれており、まっすぐに逆立った剛毛までが、曲がらない意志を象徴する要素に思えた。

怒鳴り散らして威嚇し、相手を思い通りに動かそうとする役回りの風貌は谷口からは得られず、赤木などよりも上に立って然るべき落ち着きを感じられ、当然の如く順平は谷口を信頼しようとした。

実際に、仕事を始めると谷口は、寡黙で、愛想もなく、黙々と順平の指示に従って動く。親ほど年齢が離れた相手であるため、順平は気を遣って指示をしていたが、徐々にその必要がないことに気付いた。ただ、順平が意見を求めたときは、言葉数少なくだが明確な意思を表示し、経験や知識が豊富であることを窺わせた。

あとで分かったことだが、赤工の社員は社長である赤木のみで、仕事を依頼されると赤木が方々に人を募り、寄せ集めで作業することになっているらしい。要するに、赤木は技術を備えた開業者ではなく、汚い仕事を他へ斡旋する際に費用をピンハネする悪質な仲介人であった。

順平と谷口は、初めの一週間を使って、二人で管理棟周辺の雑草を伐採し、管理棟内部の掃除やドアの立て付けの補修をした。二週目は、電線を引っ張ってきて通電させ、管理棟の蛍光灯や電球を全て新しいものに替え、更に水栓を探し出してそれを開き、蛇口から水が得られるようにしたりと、当面の生活を送る上での基盤を整えた。

そして、谷口が真木を拾うまでの一週間で、宿舎であったA、B、Cの各棟の内部に入り、処分しなければならない家具が残っていないことを確認した。

順平と谷口の生活は、非常に静かなものだった。朝の挨拶、天気の様子、本日の作業内容の確認、室内や建物

の尺を取るときの掛け声、大きな物を動かすときの掛け声、道具を点検するときの掛け声、明日の作業内容の確認、お互いへの労いの言葉で、一日を締めくくる。三週間、それ以上の会話は無いに等しい。交わした言葉よりも、独り言の方が多いほどだ。

一つだけ、順平の記憶にひっそりとだが強烈に焼きついている出来事がある。谷口と出会って三日目の晩に、自室に籠ろうとしている順平の背後から、乱暴な呼びかけがあった。振り向くと、顔を紅くした谷口だった。二人の間に距離はあったが、濃度の強そうな洋酒の臭いがすぐに鼻腔に届いた。

電気がまだ通っていない時期であり、谷口はLEDランプを順平が眩しく感じない程度の高さにかざしていた。薄暗い中でも紅潮しているのがはっきりと分かるほど、谷口は酒を飲んだようだった。

「けっこう飲んでいますね」

「構わないだろう」

全く構わなかった。昔の職場の上司は一人晩酌を欠かさないとっていた。世の中のほとんどの五十代はそんなものだと思っている。異論は無かったため、順平は黙って肯定の意を示した。

「順ちゃん、今回の仕事だが」

谷口は順平のことを気さくに呼ぶ。ほとんど会話を交わさないよそよそしさとの違和感は拭えないが、そう呼ばれることが嫌ではなかった。

「なんで、赤工に頼んだんだ？」

「なぜって…」

適当に答えていい場面ではないことは、谷口の鋭い眼差しから感じ取っていた。

「赤工は確かに産廃処理業者の資格を持っている。しかし、解体工事の仕事を請け負える業者じゃない」

「どういうことですか」

谷口は目を見開いた。無表情だった男が初めて見せた隙のある顔だった。

「赤工は、解体工事の資格を持った業者じゃないってことだ」

答えを聞いても顔色が変わらない順平を見て、谷口は大袈裟な溜息をついた。

「ひょっとして、知らなかったのか」

「知りませんでした」

順平が初めに相談を持ちかけた建築士は、付き合いは然程深くは無いものの、真面目で誠実な信頼の置ける人物だった。こちらが無知でも法令を犯すようなことは絶対にしなかつただろうし、そういった分からないことも含めて全て相談したいと思っていたのだ。その彼が、三年前の震災復興の仕事で未だに大忙しでなければ、この仕事を赤木に頼むことにはならなかつただろうし、谷口に会うことも無かつた。

ここまで物事が転落していくことは完全に想定外だったのだ。

「普通の人には知らなくてもいいだろうが、工事を頼もうってなら、インターネットでも調べておくべきだろう。資格の無い業者に仕事を頼めば、知らなかつたとはいえ頼んだ方も罰せられる。自分の身は自分で守ってくれ」

呆れ返った口調だが、そこから先ほどの鋭い空気は見られない。

「で、こうやって違法な業者に仕事を頼もうとしていると知ったわけだ。その上で、どうする？」

谷口の言いたいことは尤もだった。

以前であれば、罰せられる覚悟をしてまでこんな馬鹿げたことを成し遂げようとは思わなかつた。しかし、既に引けない状況にまで追いやられている。

口を固く結び、じっと押し黙ったままの態度が、答えの全てだった。管理棟の外の、微かな風の流れが聞こえる。互いじっとしたまま、相手の出方窺った。

折れたのは、谷口の方だった。

「いったい、どこのどんな外道かと思っていたんだ」

独り言のように語り出す。

「赤工のような腐れた違法業者に金を払うようなやつなんて、同じように救いようのないまで堕ちたカス野郎だろうとな」

谷口の言葉の端々に、深い怒りが含まれている。それはただの正義感から湧いてくる小気味のいいものではなく、暗闇の中からじわじわと漏れ出すものだった。そんな強い怒りが、どうやら順平に向けられていたようだ。じっと耳を傾けながら、順平は微かに恐怖を感じた。

「でも、あんたはどうやら違うようだ。駄目な人間の臭いがしない。こんな作業をなんでやりたいのか分からない以外は、全く普通だ」

不意に、順平の視界が暗くなった。視線を上げると、谷口の背がこちらを向いていた。

「嫌いじゃない」

小さい声だったが、はっきりと聞き取れた。それでも順平は、え、と聞き返していた。

「そのうち事情は話してくれよ、順ちゃん」

そう言って返事はまたず、谷口は応接室へと戻っていった。

翌朝、お互い何も無かったかのように朝の挨拶を交わし、黙々と朝食を摂り、作業へと移った。谷口は相変わらず忠実に指示に従い、黙々と作業をこなす。二人の間に会話らしい会話はほとんどなく、静かな山奥は、前と変わらず静かなままだった。

電気が通り、夜でも明るく過ごせるようになると、微かにほっとした雰囲気は漂い始めた。食事時の静けさや愛想の無い指示と返答の中にも、少しずつ温かな空気が含まれるようになった。

順平と谷口は、互いのことを全く知らないまま、互いに信頼するようになっていった。

三. 親子(1/2)

真木は確かに労働力にならなかった。

辺りを飛び跳ねる真木を宥めてから仕事を再開したとき、順平は谷口に真木を任せ、一人作業に取り組みながら、二人の様子を時折観察していた。

先週のうちに建物内部を確認し、ゴミとして処分すべき家財道具が無いことは分かっている。

解体工事には、大きく分けて二種類の費用がかかる。一つは工事本体の費用、もう一つは廃棄物処分費用だ。工事本体は、建物の種類と延べ坪から概算できる。鉄筋コンクリート製だということは分かっているので、あとは各棟の大きさを、計測すればいい。

廃棄物処分費用も、基本的には同様に概算できるものなのだが、万一中に大型の家具が残されていた場合、それらの搬出にかかる費用と、家具の処分費用が計上されることになる。そのため、順平と谷口は一先ず室内を確認することにした。それが、先週の話だ。

今週の作業として、谷口は真木を連れて、建物の寸法を測ることにしたようだった。なんてことは無い作業だ。片方が巻尺の端を建物も角に合わせ、もう片方が反対の角で巻尺の値を読み取る。その繰り返しだ。それだけでは物足りないと感じたのか、途中から芝刈り機を持ち出し、建物の周辺の雑草を刈ってから採寸するようにしていた。

まず、真木が芝刈り機を使うのが初めてだということが分かった。装着の仕方から、エンジンの掛け方、持ち方、刈り方、エンジンの止め方まで、一通り説明しないと、危なっかしくて好き勝手には使わせられない。

採寸にも慣れていないことはすぐに分かった。伸ばしたときに水平に保たれているべき巻尺が傾いたままで、それを谷口が指摘しても、直し方が分からずにおろおろとするだけだった。

当然、車の免許は持っていないので、運転手として活躍してもらうわけでもいかない。

一日を通して、何をすればいいのか自分では分からず、指示を出さなければぼうっと立っているだけだった。

しかし、素直で真面目な性格なのだろう。谷口の指示をよく聞き、谷口が呼べばふらふらと駆けながら近くまでやって来て、これを運べと言われれば、肩に食い込むような重い鉄棒でも、華奢な体をよろよろとおぼつかない足取りで支えながら運んでいった。そして、谷口の手が空いたときにはすかさず、道具の使い方を教わるために寄っていった。

谷口の方も、順平に答えたとおりの面倒な素振りには少しも見せず、真木の相手をしていた。真木が所在無くそわそわしている様子が目に入れば、すぐに簡単な雑用を与えていた。疲れてぐったりしているときは、手が必要な状況でも声をかけるようなことはしなかった。そして時々、休もうとしている真木にはぱぱをかけたりのしていた。極めつけは、育ち盛りの子どもには良くないからと、料理をすと言い出したほどだ。

一日の作業を終え道具を片付けているときに、谷口が順平に言い出したのだ。麓まで食材を買いに行きたい、と。順平は取り敢えず驚いて見せた。

「野菜とか肉を買ってきて、誰が料理するんですか」

「おれがする。味はともかく、作れないわけじゃない」

「今の設備じゃお湯沸かせるくらいですよ。鍋とかフライパンとか、やかんすらここには置いてませんからね」

「それも一緒に買ってくるさ。スーパーに行けばたいがいの物は揃うだろ」

「加熱できないじゃないですか。電気は近くの電柱から引いていますが、ガスはここまで通っていませんよ。どうするんですか」

「安いホットプレートがいくらでも売っているだろ。それで不便だったら、休日にプロパンガスとコンロを買ってくるよ」

順平が徐々に呆れてくるのに対し、谷口の顔はいつまでも真剣だった。しばらく互いの目をじっと見合い、やがて順平が頷いた。

「分かりました。好きなように設備を揃えてください。経費で出しますから。その代わりに、俺の分もきちんとうまいもの作ってください」

谷口は少しも笑わず、かしこまった表情のまま、堅苦しく頭を下げた。

「ありがとう、順ちゃん。すまないね」

「きちんと、うまいもの、ですよ」

「任せておけ。これでも昔から自炊派だ」

手に持っていた芝刈り機とスコップをがたがたと地面に揃えて置き、その上に青いビニルシートを被せると、すぐさま谷口はトラックに向かった。その背中に向かって順平が叫ぶ。

「週に一回はカレーライスですからね」

それに応えるように左手をひらひらと振り、

「ああ、ハンバーグもつけてやるよ」

それだけ言って運転席へと乗り込み、慌しく発進する。

道の向こうへと消えていくトラックを見送っていると、エンジン音に引かれたのか真木がやってきた。なにやらそわそわと落ち着かない様子だ。何か伝えたいことがあるようで、ちらちらと順平の顔を伺うが、何も言い出さない。見かねて、順平の方から問う。

「どうしたんだ、宏太くん。何かあったのか」

何度か口ごもってから、

「あの、谷口さんは、どこかへ出掛けたんですか」

「ああ、買い物に行くって言って、麓の方に向かったよ。たぶん、一時間くらいで帰ってくるんじゃないかな」

「そうですか」

そしてまた、そわそわし出す。順平はその様子を黙ってじっと見ていた。その視線に気付いたのか、真木は再び口を開く。

「すみません、ここって、電話とかって、ないですよ」

「電話を掛けたいのか」

谷口に次いで、これも驚きの発言だった。目を丸くすると、気まずそうに真木は顔を逸らした。

「携帯は持っているんですけど、ここは圏外だし、そろそろ充電切れそうだし、充電器持ってきていないんで、困っていたんです。もし、電話がここにあったら、使わせてもらえないかな、と思ひまして」

「明日まで待てないか。谷口さんが、明日も麓に行くと思う。そのときにコンビニにでも行ってもらえば、充電も出来るし電波も通じるだろう。メールの確認とかもしたいだろうし、その方がいいんじゃないか」

「いえ」

真木は困ったように言葉を切った。さっきからなんだかはっきりしない様子に、順平も困惑してきた。辛抱強く続きを待っていると、やっと真木が話し出す。

「実は、親に連絡取りたいんです。たぶん、すごく心配していると思うから」

親元を離れてもいない子どもの発言として不思議はないし、当然と言えば当然の言葉だった。しかし、順平は喉の奥から気道をミシンで縫い合わされたような閉塞感を覚えた。腹の中で銅鑼が鳴り響くほどの衝撃を受けた。真木は順平の引きつった顔には気付かず、恥ずかしそうにもじもじしている。

「そうだよな、親なら心配しているよな」

「えっ」

ほとんど口を開かずに呟いたため、真木には全く聞き取れなかったようだ。言い直すことなく順平は鍵の掛かった自室に入り、数秒後に黒い携帯電話に似たものを手に戻ってきた。

「衛星電話だ。少し声が遅れて聞こえるが、他は普通の電話と変わらない。使っていいよ」

札を言って真木はそれを受け取り、その全体を好奇心に満ちた目で眺めてから、プッシュボタンを押した。

呼び出し音を聞き始めた真木に背を向け、順平はそっとその場を離れる。

「あ、もしもし。母さん？宏太だけど。うん、ごめん、いきなり出て行って。ごめんね。うん、実はさ…」

真木はこれから確実に嘘をつく。その内容に興味はなかったし、むしろ聞きたくないと思った。その嘘を聞いてしまったら、真木を憎んでしまうと確信した。背後から聞こえる声を打ち消すように、順平は足音を大きくした。

一時間と少しが経ち、太陽が沈んで月の明かりが辺りの頼りになった頃に、谷口が戻ってきた。段ボール三箱を次々とトラックから降ろし、それを三人で一箱ずつ運び込む。箱を開ける前に、谷口は真木に向かって、「宏太。おまえはこっちはいいから、道具の点検をしておけ。オイルが足りないのには補充して、泥とか汚れがあったらきちんと落としておくんだ。何か分からないことがあったら聞きに来い。暗くなるから、ヘッドランプを忘れずにな」

この場から追い払うように真木に用事を言いつける。言われた真木はかしこまった表情で足早に離れていく。それを見送ってから、二人は食材や調理用具のセッティングに取りかかった。

「谷口さん、意外と料理上手ですね」

今日の夕飯は ^{チンジャオロース}青椒牛肉だ、と手際よく料理する様子を、順平は何を手伝うでもなく眺めていた。谷口は躊躇することなく野菜と牛肉を千切りにし、焦げ付きも汚れも傷も一切ない真新しいフライパンで炒め始めた。リズムカルに手首を返し、フライパンの中で野菜と肉を躍らせている。

「一人暮らしも、そろそろ二十年になる。若い頃は食べ物なんて満腹になれば何でもいいと思っていたけど、五十にもなると体に悪いものは極力食べないようにしたいし、味にも贅沢になってくるからな」

「じゃあ、俺と二人だったときから作ってくれれば良かったじゃないですか」

「おさんどは契約に入っていなかった」

「今しているじゃないですか」

「これは宏太のためだよ」

順平への遠慮はない。何か言ってやりたかったが、谷口の楽しそうな様子を見て、言葉を飲み込んだ。生き甲斐を見つけ出した専業主婦のように生き活きとした表情になっているのだ。今までの、ただ生真面目で気難しい細やかな男、というだけではない。人生の花を咲かせた後の様子だった。

「つかぬ事を聞きますが」

順平は何気なく口を開いた。

「谷口さん、家族っているんですか」

何の悪気もなく、他意もなく、邪推もない。一人暮らしという言葉聞いて、ふと思いついた疑問を口に出しただけだったのだが、その場の空気ははっきりと肌で感じられるほど変化した。じゅーじゅーと、肉汁が煮詰まる香ばしい音が、静寂を支配する。谷口の表情は柔らかいままだったが、口は堅く閉ざされている。何の言葉も返ってこないが、それが一つの答えになっていた。

自らの軽口を悔やみながら、順平は何も言えずに谷口の様子を伺った。谷口は、一見料理に集中しているだけのようにも見えた。肉に熱が行き渡りレアな部分がないか、野菜は硬すぎないか、水分はもう少し飛ばすべきか、そんなことを見定めようと、タイミングを逃すまいと見極めている最中のように、フライパンの中に視線が固定されたままで、微かにも動く様子がない。順平は、黙っているしかなかった。

谷口は二、三回フライパンの中身を躍らせてから、何事でもないように、

「色々と話すのは、食事の時にしようじゃないか。今日は、宏太の歓迎会だ。酒も飲んで、お互いに少し自分を紹介し合おう」

「そうですね、飲みますか」

順平はそっと安堵した。張り詰めた空気がやっと緩み出す。小屋の外を流れる風の音や、虫のきれいな音色が

飛び交う様子が形を現す。異次元から元の世界に戻ってきてこれたようだった。

三. 親子(2/2)

三人は酒を飲み、他愛のない会話で盛り上がった。真木は今までほとんど酒を飲んだことがないせいか、ビールを一缶も開けないうちに顔を真っ赤にさせ、噛みそうな舌つ足らずな口調になり、最近人気上昇中の若手女優をさかんに誉めている。それに対し谷口は、誰もが知る大女優の若かりし頃の純朴な美しさを語っている。手の届きようのない女の話に華を咲かせる二人の様子を、順平は静かに見つめていた。特に、谷口がこれほど話す男だと知らなかったため、ついつい好奇心に満ちた目で観察することに集中していた。

ウィスキー瓶を傾け、とろりとした甘さを楽しみ、焼けるような刺激を喉に覚える度に酔いが薄れていくようで、この山奥の小屋で酒盛りを続ける三人の様子を、第三者的に見つめるようになっていた。

「ところで宏太、おまえ、今いくつだ」

「十八です。今年で十九になります」

「ってことは、高校は出ているのか。思ったよりは大人だな」

「今年の春に卒業したばかりだったんです。今は浪人生ですね。今年の大学受験、全部ダメで終わりました」

「おまえ、まさか受験に失敗したのが苦で死ぬって言っているんじゃないよな」

「そんなことで死ぬわけじゃないですか。そりゃ、だいぶ落ち込みはしましたけれど。それが理由だったら、結果が分かった三月の時点でもう死んでいますよ」

「そうか、ならいいんだ。そんなことで子どもに死なれたら、親にしてみりゃ自分を責めるしかないからな。それは辛いだろ」

そういった直後、谷口の目が真木から離れ、ちらりと下を向く。口は笑った形のままだが、目の奥に順平は絶望を感じた。それに全く気付いていない振りをして、順平は淡々と、

「宏太くんの理由は、さっぱり検討つかないね。学校でのいじめが原因、と言うのが一番良くありそうな話だけれど、浪人生ならそれも無さそうだな。」

「さっき、親を安心させるためにわざわざ電話かけたくらいだから、親子関係に問題が、というわけでもなさそうだな。益々分からない」

「それを言うなら、オレだって順平さんが何でここを壊したいのか全然分かりませんよ」

素っ気無い様子で真木は残りのビールに口をつけ、微かに顔を歪める。まだ慣れない味を我慢して飲んでいるのがよく分かる。お互いに深く掘り下げたくない話題であるため、二人はそれきり黙りこんだ。そんな中、谷口がぼんやりと呟く。

「そうか、宏太は親御さんとはうまくやっているのか。それは良かった」

誰に聞かそうというでもない、擦れた独り言のようだった。朝の挨拶とか、板の間や椅子の軋みと同じように、生活に溶け込んだ雑音の一種のように耳に入ってきた言葉だったので、順平も自然とそれに反応した。

「そう言えば谷口さんにはお子さんいらっしゃるんですか」

質問を投げかけてから、しまった、と思った。そして、気付かぬ間にアルコールに侵されていたことを実感した。普段ならば、他人が触れて欲しくない部分には極力近付かないようにしていた。そしてそれが、順平自身もそうであるように、家族の問題であるならば、よほど親しい相手からでも踏み入って欲しくない領域であるはずだ。

谷口は弱々しく微笑んで、軽く溜息を吐く。その様子は、思い出したくない過去に苦しむわけではなく、諦めだけが漂っていた。

「昔は三人家族だった。女房と子どもがいたんだ」

缶に残っていたビールを、ぐっと傾けて一気に流し込む。喉が二、三回、大きく鳴った。

「でも、今は違う」

谷口はそう言う直前に顔を伏せた。そのため、順平からはどんな表情をしていたのか、確認できなかった。

ただ、余計な口出しを出来ない緊張感を得た。

「つまり、そういうことさ」

顔を上げたときには、見慣れた顔つきのままだった。丸顔に伸び始めた坊主頭。穏やかで、真摯な細い目。赤黒く日に焼けた肌に、しわが細かく刻まれている。それらはこれからどんどんと深くなっていくのだろう。一体、どんな苦勞が谷口をふけさせているのか。それを確認する図々しさを、順平は持っていなかった。

束の間、部屋に流れた重い空気を振り払うように、谷口は満面の笑みを造り、虚ろな目をしてふわふわと左右に揺れている真木の肩を抱き寄せ、陽気な声を上げた。

「ここじゃ、おまえがおれの息子代わりだ。明日からもしっかりと躰けてやるからな、覚悟しろよ」

理解しているのかどうか、真木はぼんやりと嬉しそうな顔をしていた。

酒の場の異常に友好的な雰囲気、谷口に調子の良いことを言わせたのだと、順平は思っていた。過去に何か事件があり、谷口と彼の子どもの縁が薄いものになったということが本当だったとしても、実の子どもの代理として、出会って間もない真木を可愛がれるものだろうか。それは否だと順平は思っていた。現在でも、不可能だと思っている。実の子どもですらまともに愛せない親が意外と多いというのに、真木だけが全くの他人からも子どものように愛されるとしたら、それは理不尽に不公平な世の中だと言うことだ。

しかしながら、毎朝毎晩、真木のために食事を作る谷口の様子は、本当に嬉しそうだった。順平だって、歳から言えば谷口の子供と言ってもおかしくない年齢だ。真木と十歳も離れていない。だが、谷口は最初から順平に対しては、一線を引いていた。供に仕事を始めてそろそろ一ヶ月が経つ。互いにだいた打撃解けた接し方になってきたが、互いをどこか敬遠しているのを、互いに察している。その原因は、順平と谷口の関係が仕事の発注者と受注者という立場によるものだったり、順平の冷静すぎる感情表現だったり、谷口の生真面目に上下関係を重んずるポリシーだったりするのだろう。

順平自身、自分が他人に甘えられない性格だということは認識していた。真木に備わった天性の懐っこさを真似することはできないし、無理して真似たところでそれを受け入れられない自分に気付いている。

ただ、すんなりと谷口に可愛がれるようになった真木の性質が、羨ましかった。

毎日が、規則正しく単調に過ぎていく。

朝六時半に谷口が起き、すぐに朝食の準備をする。真木が来るまでは順平共々七時に起きていたのだが、今では七時に間に合うようにまかない飯を作り出す。

七時になると、順平が鍵の掛かった部屋から出てくる。出てくるとすぐに、また鍵をかける。その鍵はクリスチャンの十字架のように、常に順平の首から下がっている。

順平が応接室に移動し、カーテンと窓を開け放つと、一気に室内に差し込む強烈な光によって、真木が目覚めます。と言っても寝起きは悪いようで、明かりから逃れるためにカビ臭い掛け布団の奥深くまで潜り込み、しばらくじっとして、じめじめとした布団の不快感に我慢できなくなり、這い出してくる、と言った状況だ。

そして、三人で谷口の手料理を掻き込み、谷口が食器を片付けている間に他の二人が身支度や作業に使う道具を準備し、八時までには作業を開始できる状態にしておく。

正午まで作業をし、一時間の昼休みに三人でカップ麺を食べ、下らない話をし、午後一時から作業に戻る。そして、途中軽い休憩も入れながら、夕方五時まで動き回ることになる。

五時になると谷口は夕食の準備に取りかかり、順平と真木とで道具の手入れや廃材の片づけを行う。谷口は夕食に手を掛ける主義のようで、調理時間が一時間内に収まったことがない。片づけが終了してからシャワーを浴びて、さっぱりとした体で食卓につくのが、若者二人の最近のこだわりだ。ちなみに言うと、作りあがった料理を順平が器によそったりと準備している間に谷口もシャワーを済ませてくるため、夕食時には三人ともリフレッシュしているわけだ。そのため、毎晩酒盛りが進むのも仕方がない。とはいっても、飲み始める時間が早い

ので、十時には部屋を真っ暗にし、各々寢床に就いている。順平は、鍵のついた部屋に、鍵をかけて寝ている。谷口と真木は、応接室の片隅に布団を並べ、時には革の剥がれたソファの上でそのまま眠りこけ、好きなように部屋を使っている。そしてまた、一日の始まりである朝がやってくる。

月曜日から土曜日までは、例外なく同様に生活している。しかし、日曜日は異なる。順平は毎日同じ時間に起きるので、日曜も七時には鍵の掛かった部屋から出てきていた。朝食が用意されていないことは室内の乾いた臭いで分かる。外に出ると、早朝の青空の下、布団をトラックの扉にかけて干している谷口が呆れた口調で愚痴る。

「いい若者が、せっかくの休日の半分を無駄にしちまっている」

どうやら真木はまだ眠ったままのようだ。口ではうるさく言いながらも、休日だからと谷口が気を遣って、部屋を暗いままにしてやったようだ。そのせいか、なかなか表に姿を現さない。何か重い病気でも患っているのかと不安になるほど熟睡している。

「あのかびた布団でよく寝ていられる。これでもし天日干しのカラッとした布団に包まれたら、三日は起きて来ないんじゃないか」

埃を軽く叩き落とし、

「だからおれは、あいつの布団は干さない」

空いているスペースに洗濯物を掛けながら、年頃の子どもの母親のように文句を繰り返している。

天気がいい。そう気付いて順平も自室から布団を持ち出し、もう片方空いていた扉を占領させてもらうことにした。それから二人で管理棟内の一週間分の掃除を済ませ、それから各自適当に朝食を摂った。

谷口は食後間も無く外へと出て行った。二人分の布団を取りこむとトラックに乗り込み、どこへ行くとも言わずに走り出す。そうやって姿を消している他は、何かのついでに買って来たミステリー小説を夢中になって読んでいることが多い。

真木は結局、昼過ぎにやっと起き出してきた。天然パーマの掛かった髪が、自由奔放にあちこちへと伸びている。空腹を感じながらも三十分ほどぼうっとし、谷口がご飯を用意してくれたり順平がお湯を沸かしてくれたりする気配がないことを察すると、諦めてやっと自分で電気ポットのスイッチを入れる。そして、カーテンの閉ざされた暗く湿気の籠った部屋でカップ麺を食べ終わると、室内で筋トレを始めてみたり、外へ出てランニングをしたり、谷口が読み終わった小説を読んだり、昼寝をしたりと怠惰に過ごす。

順平は、専ら鍵のついた部屋に鍵をかけて籠っているが、食事とトイレ、風呂以外にもその部屋から出てきては、ふらっとどこかへと消えていく。運転できる車もないため、その辺りを散歩しているのだろう、と他の二人は勝手に想像し、深く尋ねたことはない。

「順平さんの部屋の中って、何があるんですか」

軽い好奇心から真木が尋ねたことがある。朝食時に、何の前触れもなくふわりと浮いてきた儂い疑問だった。「鍵をかけるのは貴重なものがあるか、他人には見られたくないものがあるかのどちらかだ。貴重なものがあることを他人に漏らすのは防犯上感心できる行為ではないし、見られたくないものがあるならばそれがあるということを他人に話す事も躊躇われるだろう。だから、俺はその問いには答えない」

寝起きでまだ頭がぼんやりしていた上に、元々探りを入れるつもりでもなかった真木は、順平に返事を聞いて面倒になり、それ以上聞こうとはしなかった。黙って食事に集中していた谷口も、興味を抱いた様子はなかった。また、黙々とした朝食が再開された。

四. 根源(1/3)

真木が家を出てから一ヶ月が経とうとしていた。

訳も分からないまま谷口の指示に従い、右往左往走り回っていた初めの頃とは違い、採寸の手際も良くなったし、芝も自発的に刈れるようになった。道具の名前と機能を覚え、谷口が口にする前に適した道具を持ってこれるようになった。

日々の肉体労働に加え、二人に隠れてこっそりしている筋トレの甲斐あって、腕や肩回りを中心に筋肉が盛り上がりつつあった。一ヶ月前は支えられずに危うく大惨事を招くところだったドリルの制御も、今では鼻歌まじりでこなせる。

谷口の手料理は母親並みには遠いものの、自分で作った夜食よりは遥かに素晴らしい出来栄で、きちんと家庭の味がした。自分が朝っぱらからご飯をお替りするようになるとは思っても寄らなかった。

勉強は、全く出来ていない。そういった道具は全て家に置いてきた。母親には初めの晩に、『東大生の友達がマンツーマンで教えてくれるから泊り込みで集中して勉強したい』と嘘をついた。いくらでもボロが出る嘘だった。しかし、勉強という言葉を出せば両親は取り敢えず黙る。家の中で一人になりたいときや静かにしたいとき、買い物につき合わされそうなきや掃除を手伝いたくないとき、子どもが持つ唯一の武器として、常に『勉強』を装備してきた。

週に一回は順平の衛星電話を借りて母親に電話している。この一ヶ月間、そしてこれからも、息子は勉学に励んでいると信じ続けるだろう。そう思うと胸は痛むが、かと言って今更正直に全てを告白し、家に戻って毎日十二時間以上机に向かう気にはなれなかった。そうやってじっとしていると、辛い記憶が蘇り、ノートをただ涙で濡らすことにしかならないだろう。今だって、谷口の寝息を聞きながら音も無く泣くことがある。

今年の受験も確実に駄目だろう。両親が落胆を隠しながら自分を慰める様子が安易に想像できる。文句の一つでも言ってくればまだ気は楽かもしれない。志望校のレベルを落とせと言われてればそうするし、確実に受かることを狙う。

しかし、二人ともそうは言わない。『行きたいところへ行けるように努力しろ』、『妥協したり、諦めるのには未だ早い』、そういつて応援してくれる。両親は息子の将来に夢や期待を抱いているようだ。

十八年生きれば、自分が平凡なのか非凡なのかくらい分かる。ある朝起きたらいきなり武道の達人になっていた。前世の記憶が甦って天文学の発展に貢献する、なんてことが万が一にもないと、諦めは付いている。そして、それくらいの奇跡が起きない限りは、平凡から逸せないことも覚悟できている。

だが、この一ヶ月の生活は物語の中と同じだった。現実とはだいぶ遠い世界が、同じ時の速度で動いていて、順平も谷口もこちらの世界の住民で、真木がただ一人、何かの弾みに迷い込んでしまったと落ち着かなくなるときがある。そういったときに母親と電話で話すと、自分が居るべき世界とまだ繋がっていると安心できた。いつかは元の世界に戻らないといけない。いつまでも夢の国に迷い込んでも居られない。ただ、まだもう少しの間、ここに居させて欲しい。無意識のうちに自分がそう願っていると、最近受け入れるようになった。

その日は朝から少し雰囲気が違うことを、真木はうっすらと感じていた。

時折、順平と谷口が難しい顔をして会話していることがあるが、そういったところには入っていかないようにしているので、日頃から二人が何で頭を悩ませているのか分からない。ただ、面倒なことであることは確かだろうからと、尚更近付かないように自分から逃げていた。

それにしても今朝の食卓は重苦しい。

他二人から細かい棘が発し出されていて、辺り一面にちくちくと飛び散っている。特に谷口から出ている棘は縫い針のように太くて鋭く、彼が作った朝食までもが、一口食べるたびに喉や食道に引っ掛かってうまく胃まで落ちていかない。素朴に甘い玉子焼きも、じゃがいもが溶けかかった味噌汁も、キャベツの歯ごたえがいい野菜

炒めも、谷口のメニューの中でどれも真木が好きなものばかりだというのに、味がいつもより鈍く伝わってくる。

「順ちゃん、今日のことだが」

谷口の声は普段よりも一段と低く聞こえ、真木は思わず体を大きく震わせた。谷口が低い声を出すのは、真木が何かしようもない失態を犯して怒られるときくらいだった。そして、このときの谷口の声は、真木が戯れにプロパンガスとチャッカマンとで即席火炎放射機を作り、辺りの雑草を焼き払おうとしたときの叱責よりも低く重い声だった。

反射的に背筋を伸ばして顔を強張らせた真木を、二人は見ていなかった。平然と食事を続ける順平を睨むように見つめながら、谷口は言い難そうに口を開く。

「今日の、うちの社長との打ち合わせなんだが、やっぱりおれも同席しないといけないか」

飲み始めた味噌汁の器をぐっと傾けて全て飲み干してから、そっとテーブルに置く。

「別に、無理強いはいませんが、必要な重機や道具に詳しいのは谷口さんの方ですから。『必要なものリスト』でも作って俺に渡して、それで言い足りないことない、十分だっていうなら、そうしてくれても構いませんし」

「おれがそんなマメなことできないって分かって言っているんだろう」

恨めしそうな谷口の視線を、涼しい顔で受け止めつつ、順平は残っていた白米の最後を口に入れた。

「別に、他意はありませんよ。そうしてくれば、谷口さん抜きでも打ち合わせくらいやっておきます。それに、リスト作りなどはやってみれば意外と面倒でもないことです。確かに、重機の大きさとか型番とか必須の機能とか、調達する上で重要な情報を漏れなく書き込むのはたいへんかもしれませんが」

「あの」

文句を言いそうになっている谷口を遮り、真木は口を出した。

「社長と打ち合わせって、誰かここに来るんですか」

二人はしばらく黙って真木を見つめていたが、やがて順平が弾けたように目を大きくした。

「そうだ、宏太くんは知らないんだって」

「ああ、そうか。そう言えば宏太はおれが道の途中で拾ったんだもん。社長のこと、知る訳ないよな」

二人で仕切りに、そうだそうだと言いつつ合っている。実際のところ、真木がここに来てからまだ一ヶ月足らずなのだが、真木は『見習い一年目』といった従順さでてきぱきと良く動くし、谷口は『面倒見のいい親方』のようにアメとムチで真木の相手をしている。そこから一步離れている順平から見ると、危うさは残るものの、リズムの良いコンビネーションが形成されていると分かった。

「いやな、順ちゃんがここの解体を依頼した赤工クリーンサービスって会社が、おれの今の雇い主なんだけど、その社長の赤木っていう人、見ての通り、現場の作業はおれに丸投げしている。でも一応責任者でもあるわけだし、時々現場の様子を見に来るわけだ」

「あと、ここで使っている道具や重機は、谷口さんのトラック以外は全部赤工さんから借りているものばかりなんだ。他にも何か必要になったら、取り敢えず社長の赤木さんに、用意できるか相談することになっている。進捗や、費用のことについてもね。だから、時々打ち合わせに来てもらうことになっているんだよ」

「で、それが今日の午後一時ってわけだ」

谷口の顔が途端に不機嫌になる。

「ひょっとして、谷口さんはその社長のこと、好きじゃないんですか」

「好きじゃない、じゃなくて、嫌いなんだ」

真木はびっくりした。社会に出たことのない若者の勝手な想像の中では、同じ会社の人間ならば連帯感や仲間意識が芽生え、自然と友好的になるものだった。ましてや、社長というトップのことは、神の如く崇めて当然なのが社会だと思っていた。

谷口は臨時雇いだと言っていたから、その影響なのかもしれない。

真木は勝手に疑問を宥めることにした。雇用状態によって、仲間意識や敬意は生まれないこともあるのだと、谷口の態度を納得することにしたのだ。

「でも谷口さん、一応自分の雇い主なんだから、少なくとも挨拶くらいはしないとイケないでしょう。そうしたら結局顔は合わせないとイケないんだから、打ち合わせに参加しても大差ないじゃない。一時間もかからないだろうしさ」

「おれは、あいつと同じ部屋の空気を吸っているのも嫌なんだ」

苦々しい表情のまま、少しの迷いも遠慮もなく、谷口が言い切る。その様子を見て真木は、こっそりと順平に尋ねた。

「そんなに、赤木さんって人、ひどい人なんですか」

その質問に、順平は珍しく困った顔をした。

「まあ、いい人ではないかな」

「あいつは屑だよ。順ちゃんも知っているだろう。陰で気を遣うこともない。屑だってはっきり言ってやれ」

「宏太くん、赤木ってやつは屑だよ」

「順平さんがそこまで言うとは…相当な人なんですね」

谷口も順平も、口に出さなかった気持ちを吐き出したことですっきりしたのか、気付けば、応接室に飛び交っていた棘は消え去っていた。順平の表情は平常のままだが、谷口は素直にいらつきを示している。真木は赤木についてももっとよく知りたかったが、谷口の尋常じゃなく怒れている様子を見てみると、とてもじゃないが具体的なエピソードを聞きだせる様子ではないことくらい、安易に察せた。しかし、気性の穏やかなこの二人に、ここまで否定されるほどの人物に対する好奇心というか、怖いもの見たさというのは強くなる一方だった。

「オレも、打ち合わせに参加していいかな」

思い切って順平に申し出る。真木の声に谷口は視線を向けたが、すぐに逸らし、残っていた食事を口に掻き込むと挨拶もなく席を立ち、部屋から出て行ってしまった。黙ったまま、順平がその姿を見送る。

「別にいいよ」

谷口が去っていったのを確認してから、何事もなかったかのような普段どおりの口調で、あっさりと、順平は許可を出した。

「宏太くんも赤木さんと度々顔を合わせることになると思うから、今のうちに挨拶はしておいた方がいいだろうしね。あとは俺たちの会話を聞いているだけになると思うけど、きっとその方がよく、赤木さんがどんな人か分かると思うよ」

「オレが楽しみにしているの、ばれましたか？」

おどけるように頭を掻く真木に対し、順平は柔らかい口調で淡々と答える。

「実際、あれほど救いようのない人はあまりいないからね。善人にしろ悪人にしろ、何かしら感心するところがあるものだけど、あの人にはそれが全くないから驚くと思うよ」

「益々楽しみにになりました」

「でもね」

口調も表情も変えないまま、しかし、順平は真木の目を強く見つめた。

「谷口さんの、あの人に対する嫌悪は異様なんだ。必要以上に嫌っているように感じる。もしかしたら、何か特別な事情があるのかもしれない。正直赤木さんはどうでもいいけれど、谷口さんの気分を損ねたり、心を傷つけるようなことにまで手を出さないように、気を付けて欲しいんだ」

そんな大げさな、と一蹴したかったが、順平の目は不気味なほど力強く、そして真木の瞳から離れようとしな。勢いに押される形で、真木は何度も頷いた。順平は念を押すようにしばらく視線を逸らさずに居たが、飽きたかのように自分の手元に注意を戻し、まだ残っている朝食の片付けに取りかかった。

うっかり開けたのが実はパンドラの箱だったのではないかと、真木は自分の無責任な好奇心を、少し責めた。

四. 根源(2/3)

相変わらず張り詰めた空気の中、午前中の時間は真木にとっては長く感じられたろうが、谷口にはあっという間だった。昼の十二時四十五分で、世界が静止してくれればどんなに幸せなことだろうか、といかなるときも単調に進む時間の流れを恨んだ。そして、約束の時刻の十三時を四十分弱過ぎたときに、小石や雑草を蹴散らしながら近付いてくる車の音を聞きつけ、やはり単調にしか進まない時の流れを憎んだ。

応接室の窓から、近付いてくる車を盗み見た真木は、「すげー、白のベンツだ」と、決して感心していない口調で呟き、「なるほど、趣味がちょっと分かりました」と一人納得していた。

順平が、出迎えに立ち上がる。午前中のうちに、応接室に置いてあった二人分の寝具や着替えと、三人分の食糧は、全て谷口のトラックの荷台に移動させたため、室内は片付いたというよりも殺風景に広がった。その部屋の入り口付近で、二人は並んで客人を待った。

ばたばたと、大地に恨みでもあるかのように一步一步に力が入った足音が聞こえてきて、谷口は自分の心が一気に閉ざされるのを感じた。全身がけだるく、人生に光はない、生きていても何の意味もないと絶望に覆われていく自分の存在を確認した。そして、ドアが開いた瞬間からは、息をすることが苦痛でしかなかった。

「いやあ、道が混んでいてね、遅れてしまった」

その人物は、開口一番、悪びれることなく嘘をついた。

赤工クリーンサービスの事務所があるのは宮城県の北西部。国道4号線に近く、ここに来るためにはひたすら国道を北上し、盛岡付近で県道に入り、今度は西にひたすら進む。そして、八幡平へと誘導する看板を辿っていけば、麓の町に到着する。あとは、登山客用に用意された駐車場には向かわない道路を登っていけば、二十分程度でここに着く。国道4号は貨物トラックが多く走るが、気候が恵まれない冬季でなければ渋滞することはまずない。県道に入る直前の、盛岡市近郊も車が混みあうが、比較的、というだけで、日曜日のショッピングセンターには程遠い混み様だ。

つまり、赤木が今日来た道のりは、ナビゲーションが示す到着予定時刻を二十分は縮められる閑散とした地帯であった。

真木はともかく、順平も谷口もそのことは知っているし、二人が知っていることを赤木も知っているはずである。その上で、遅刻したことに対する一言の謝罪もなく、簡単にばれる嘘で自らを正当化しようとする。

「時間も押していることだし、さっさと終わらせよう。わたしも忙しいんでね」

極めつけはこれである。

嗚然として赤木を見つめる真木の顔があまりにも無防備に呆れているのが分かり、谷口の気は少し紛れた。今すぐにでも殴りかかりたくなる衝動が収まったことに安堵する。

谷口が赤木に出会ったのは、ほんの二ヶ月前、この現場で働き始める約一ヶ月前だ。その頃谷口は仕事を探していた。初めて赤木を見たときに、なんて不健康そうな男だ、と感じた。その実感は、赤木に会う度に強くなっている。

赤木は、上背があるひょろりとした男だ。おそらく谷口よりも十は年下だろうが、もっと若いと言われればそのような気もするし、逆に還暦間近と言われればそれを信じてしまう。やつれたように肉が削げ落ちている頬を見ると貧相そのものなのだが、ネイビーを基調としたストライプのスーツと中に着ている淡いピンクのシャツ、血のように染まったダークレッドのネクタイは全てアルマーニ、時計はロレックス、靴は特注品、という成金のいでたちだ。小脇に抱えたヴィトンのセカンドバッグをセットにすると、真つ当な職業に就いているようには見えない。小脇に抱えている新聞は、競馬新聞以外にありえないと思わせられる。脱色を重ねて薄い茶色にまで色の落ちた髪は、散り際のいちょうの葉そのものだ。そんな卑しい身なりをしつつ、度のきつい眼鏡の奥では、細い目が常に注意深く辺りを窺っている。それは、残飯を狙うカラスのように抜け目なく、他を出し抜くかを計算している目つきだ。

心身ともに病んでいる。赤木を見ると、谷口は自然とそう思っていた。

赤木から突然の電話があったとき、谷口もちょうど仕事を探していた。別の工事現場での仕事が終わり、手持ち無沙汰になっていたのだ。

同業者の伝で、谷口を知った、と赤木は言った。「赤エクリンサービスの社長の赤木だけど、谷口さん、仕事欲しいでしょ」と、挨拶もそこそこに赤木は切り出した。この口の利き方だけでも、谷口は赤木に反感を持った。仕事を頼むのではなく、仕事を与えてやっている、という高圧的な発注者が持つ異常な考えを持ち合わせていることを示していた。

正直、谷口は金には困っていない。その日雇いの仕事が尽きたとしても、生きていくのに困らない蓄えはあった。そのため、義理のない人間からの仕事など、請ける必要は皆無だった。しかし、事情があった。谷口は仕事があろうとなかろうと、常に廃棄物処理業者での働き口を探していた。そのため、名前の知れた優良企業から電話帳にも載っていない事情を抱えた業者まで、幅広く自らセールスし、いつでも仕事が舞い込むよう状況を整えていた。赤木は谷口が張り巡らしたネットワークにかかった魚だったのだ。

生来、谷口は真面目であった。規則や決まりごとやマナーを遵守しようと気を配り、他人の迷惑を避けるように努めてきた。横柄に振舞う人間に対しては、公共の視線でもって可否を判断し、例え相手が見ず知らずの屈強な男でも、振る舞いを注意する勇気を備えていた。それでいて自己のルールを他人に押し付けることもなく、他人の失態には厳しくない、優しさを持っていた。

赤木のような欠陥を持った人間などいくらでもいるし、これまでも会い、供に仕事をしてきたこともあった。体外は相手が雇い主になることが多く、不快にさせられ、振り回されて苦勞することも多々あった。

それでも、そういった問題児たちでも一欠けらくらいは可愛げを見つけることが出来た。幼い頃の貧乏苦勞話であったり、埋蔵金を信じて止まない子どもらしさであったり、女性に弱かったり、子どもに甘かったり、と。

しかし、赤木に対してはそれが全く見出せないでいる。弱く、愚かで、だらしないところの全てが、谷口の持つ倫理観と逆を行っているのだ。

赤木に対して自分が持つ反感が、『廃棄物処理業者』という肩書きから来るものだと、谷口は自覚している。それは自覚したところで対処のしようのない偏見だ。しかし、それを別にしても、赤木に対しては同情も共感も親近感も持てずにいた。

順平が席を促す前に、赤木は一番皮の部分が残っているソファに腰掛け、「コーヒーは、砂糖抜きで」と誰の顔も見ずに言った。

ここは喫茶店じゃない、と真木が怒るより早く、順平が穏やかな口調で、「すみませんね、赤木さん。見ての通り、お湯を沸かせるものもここにはないですよ。近くの沢から汲んで来たぬるめの水で良ければお出ししますが、いかがですか？」

そういつて警戒心のない笑顔を見せる順平に対し、谷口は深く感心していた。若くして、ここまで感情を押し殺し、そして相手をいなせるというのは珍しい。動揺を顕にして「それではけっこう」と赤木が答える様は、谷口にとって愉快なものだった。

「社長、今日の打ち合わせですが」

「ああ、費用の話だな」

順平が社長、と口にした瞬間、赤木は得意げにふんぞり返り、なんとか順平を見下す姿勢をとった。「重機や道具の貸し出し費用については、この前話したとおりだよ。もし、追加で必要な重機があるならまた別途相談だけだね」

「分かっています。今日は、前回詰められなかった解体費用と廃棄物の処理費用について詰めましょう。この一ヶ月の間に、谷口さんと一緒に現場の状況はほぼ把握しました。概算ではありますが、三人工で解体に必要な期間が五ヶ月、産廃の総重量としては八三〇トン程度が見込まれます」

「三人工？」

赤木の目がさっと動き、真木の姿を捉えた瞬間に、ざらりと光った。

「困るねえ、結城サン。ここの解体はうちに任せただろう？勝手によそから作業員を連れて来られて事故でも起こされたとしたら、うちの責任になっちゃうじゃないの。人の斡旋はわたしに任せてよ」

にやにやと卑屈な笑みが張り付くその顔を、谷口は殴り飛ばしたくなった。

順平は谷口が尋ねたことのほとんどに答えてくれる。赤木が谷口の給料をどれほどピンハネしているのかと思ひ、順平が赤木に支払うことになっている谷口の人件費を聞いてみたところ、あっさりとなんて答えた。

ざっくりと計算すると、谷口が赤木から支払われる基本給の三倍の人件費を、順平は赤木に支払っていた。このことを知ったときは、金に汚く手段を選ばない赤木に対する嫌悪感よりも、あっさりとなんて破格の給金を支払うと約束を交わした順平に対し怒りを覚えた。

思い出しても拳が震えるほど怒ってしまうというのに、順平が平気な顔をし、「なるほど」と頷いたときは、一瞬自分がどこにいるのか見失うほど、頭が沸騰した。

「では、相談ですが、社長。二人工でここの解体工事を、御社にお願いするとなると、いくらくらいになりますかね？ざっとで構いませんので」

「二人工？結城サン、さっきは三人工って言っていたじゃないの」

「あれは自分を入れた数です。でも、御社に全て任せるとなったら、自分が作業を手伝うのもおかしい話になるでしょう。現場監督も責任者も、御社から出して頂かないと。ただし、依頼主である俺の許可なしに現場には入らせませんが」

赤木は微かに怯んだが、すぐに持ち直して値踏みするように順平の目を見つめながら、

「そうだねえ。そんなに難しい条件を出されちゃうと、結構お金はかかっちゃうよ。こんなに広い現場で、しかも廃棄物の量も多いとき。まあ、ざっと安めに見積もっても、三億はかかるかな」

「それは無理です」

素早くはつきりと、しかしにこやかに順平は答えた。

「三億なんて大金、俺には用意できません。全てを御社に頼むのは無理です。だから、従来の通り、機材や作業する方を派遣して頂き、且つ産廃に関わる部分は全てお任せする、という方法を取らせてください」

赤木の顔があからさまに引きつる。どんな流れになるかと見守っていると、思わぬ方面に攻撃の目が向いた。

「おい、そこの若いの」

真木は反応しなかった。野次馬の如く集まってきた全くの部外者のように、ちょっとした好奇心から事の成り行きを眺めてただけで、テレビの出演者が視聴者に呼びかけているのを、ぼんやりと認識したようだった。

ただ、一拍置いて順平や谷口が一齐に目を向けたものだから、白昼夢から不意に呼び戻された。

「な、なんですか」

おどおどとした態度は、赤木が最も好むものだ。自分が優位に立っていると勘違いできるらしい。人間としてすら認められない奴隷に命を下す口調で、

「お前はいくらもらっている。今よりもっと高く雇って欲しいだろう」

困惑した表情しか返そうとしない真木をフォローして、順平が口を挟む。

「社長、この子は雇っているわけではないんです」

赤木の見下した視線も、谷口の怒りのオーラも気にする様子はなく、

「彼は、ここにボランティアで来ているんです」

「ボランティア？」

問の抜けた赤木の声に、谷口も真木も釣られそうになる。怪訝そうに眉を歪ませながら、赤木の口は閉じることを忘れたようだった。

「そうです。無償で作業をしてもらっています。

真木くん、と言いましてね、友人の大学時代の後輩なんです。将来、建設関係の仕事に就きたく、今のうち

から現場の作業を経験しておきたい、と言う、熱心な若者なんですよ。しかし、かといって建設現場の作業を素人に手伝わせるわけにはいかないでしょう。しかし、解体の現場ならば、簡単な作業の手伝いならさせられると考えましてね。友人への義理、というのがありますが、自分はこういう勉強熱心な若者をつい応援したくなってしまうのです」

順平は軽く一息つき、相変わらず閉じない口を見つめながら、

「この話を持っていったとき社長は確か、機材や人手の貸し出しと産廃処理は引き受けるけれどそれ以上の責任を取るにはもっと金を出してもらわないと無理だ、と仰っていました。残念ながら、こちらからは社長が希望するだけの金額を払うことができそうになかったので、諦めて予算の範囲内で収まるように自分で工夫することにしたんです」

四. 根源(3/3)

順平の言葉に赤木が一瞬悔しそうな顔を見せたとき、谷口は胸の高鳴りを覚え、心の中で順平に拍手を送った。しかし、赤木がすぐさまぎらぎらとした鋭い睨みを利かせながら笑みを浮かべたため、嵐の前の波打ち際のような不安を覚えた。

「予算、ね。一億や二億くらいならぼんと出せるだろうに」

この場に居る誰もが辛うじて聞き取れるくらいの擦れた声を、搾り出す。

「どういうことです」

怪訝な顔をする順平には更に深い笑みだけを返し、

「そう言えば、ここに居る皆サンの中で関東方面出身はいるのかな」

誰かに言うわけでもなく、一人宣言するように大きな声を出し、真木が控え目に手を上げたことに気付いたのかどうか分からないが、堂々と語り出した。

「今から三ヶ月ほど前だったと思う。神奈川県の川崎市で強盗事件があつてね。犯行の手口と被害額の大きさから、全国ニュースにもなったとは思う」

そんな事件は、日課のように毎日聞いている。赤木がどの事件を指しているのか、少なくとも谷口には察せられなかった。

「手口は大胆不敵だった。銀行の現金輸送車が赤信号で停車中、後ろから来た大型貨物トラックに突っ込まれた。警備員二人のうち、一人は即死。もう一人は命は助かったものの重体。トラックの助手席側が切り取られたようになっていて、輸送車側も車体が完全に避けていた。大きな事故だった」

不必要に長い間を取り、赤木は三人の顔を見渡した。順平に目が止まったとき、にやりと笑う。

「当然、トラックの運転手は現行逮捕だ。運転手自身、左足の骨折や頸椎の捻挫で動けなくなっていたからな、人が死んだ事故だ。罪も重い」

赤木の口から、罪、などという言葉が出てくることに、谷口は全身のざわめきを覚えた。蕁麻疹が出そうな違和感だ、右の拳を握り締めながらも耐える。

「こんな交通事故なら、日常茶飯事に起こっている。全国ニュースに取り上げられるほどのことでもない。だが、一番の問題は人が死んだことじゃなく、輸送車に積んであった現金がごっそりとなくなったことだった。被害額は五億円」

「五億?!」

真木が素直な叫び声をあげる。満足そうに赤木は頷き、

「そう、かなりの大金だ。持ち去った犯人はまだ捕まっていない。負傷した警備員の話によると、若い男二人組みだったそうだ」

小脇に抱えていた新聞を、机の上に放り投げる。想像に反してそれは全国紙だった。社会面がめくられている。

「実は今日の朝刊で事件が少し進展した。

警察は当然、トラック運転手も共犯だと考えた。想定以上に大きな事故になってしまい、逃げ遅れただけだと。現金を持ち去った二人組みの素性について、これまでずっと追求してきた。しかし、無実と断定されたよ。強盗に関しては、な」

社会面の小さな一覧を指先でとんとんと叩き、

「事故の原因は、トラック運転手の一時意識喪失によるものだった。よく聞くだらう。睡眠時無呼吸症候群、だよ。運転中に一瞬意識が途絶え、気付いたときは事故を起こしていた。その相手が偶然現金輸送車だった。それにしても、だ」

身を乗り出し、順平の顔を覗きこむ。

「わたしはね、自分のこと善人だとは思っていませんがね。でも、目の前に死人と、死に掛けた怪我人が二人いるというのに、堂々と火事場泥棒をやったのけるこの犯人たちは、いったいどれほど根性の据わった悪人かと思うと恐ろしいね、結城サン」

「本当にそうですね。よほどの悪人でしょう」

表情をぴくりとも変えず、淡々とした相槌が順平から返ってくると、赤木は満足そうに溜息をついた。

「何かこの事件で進展があったら、情報をお流ししますよ。こんな山奥では、人目を避けるのには便利かもしれませんが、新聞屋もこないでしょうから」

「お気遣い、ありがとうございます」

真顔を保つ順平の本心は、どんなに頑張っても谷口には図れなかった。

赤木はすぐに帰っていった。現金輸送車強盗事件のことを伝えることが第一の目的だったかのように見えた。仕事の契約金については大した詰めは出来ていない。はっきりしたことは、このままの話で事が進むと、赤木が手にする事が出来るのは、せいぜい産廃処分の手数料と機材の賃貸料、そして谷口の人件費のピンハネ分くらいということだ。どんなに多目に見積もっても、～千万と言ったところか。

赤木が、その程度の儲けで引き下がるとは思えない。ただでさえ、この現場は工事無届というリスクを抱えているのだ。依頼主を強請り、生きるか死ぬかの瀬戸際までしゃぶり尽くそうとすればできないわけではない。可能性があるならば、赤木なら必ず行動を起こす。

赤木を見送った後、順平は自室に閉じこもった。がちゃりと鍵が閉まる音が、廊下を伝って応接室に取り残された二人の耳にまで届く。今日の赤木との打ち合わせ内容をまとめる、と言っていた。部屋に入る直前にちらりと見えた順平の横顔は、無表情というより緊張で強張っているように見えた。

机の上に残された新聞を、真木が手にする。事件の内容は、ほんの四センチ四方程度に収められている。世間の話題の中心からは当に外されているということだ。

「あの赤木って人、まるで順平さんがこの強盗犯の一人だって言いたいみたいでしたね」

鍵のかかった扉を見つめながら、真木が不満そうに愚痴る。

「まるで、じゃない。そう言っていたんだ」

「順平さんはそんなことしませんよ」

おれもそう思う、谷口はそう言おうとしたが口を止め、曖昧な返事をした。人それぞれの正義がある。本人は常に正しいと信じて行ったとしても、それが犯罪になるときもある。法律という境界線は、個人の正義を許してはくれない。善意の塊りのような人間が犯罪者になることも有り得るし、他人を虫けら同然に扱っていても偉人と称えられることもある。人の善し悪しの尺度は規律と一致しないのだ。

「たとえば順平さんが火事場泥棒していたとしても、確かに五億は大金だけど、こういうことする人よりは全然悪人じゃないですよ」

憤慨が収まらないらしく、真木が社会面の別の記事を谷口に突きつけてきた。

「『山中でコンクリート詰めの遺体発見』。しかも、手足を縛って生きたままコンクリ詰めにされた模様、です。まともな人間の出来ることじゃない」

「どこの事件だ」

老眼が進んできた目に対し、真木は記事を近づけすぎていた。谷口は目を見開くが、暗さも相まってなかなか読み取れない。

「ええと、関西ですね。兵庫県って書いてあります」

記事を見つめなおし、世間話の延長のように真木が言った。

関西。遠いところの話だ。谷口は興味を失った。

「そんな話もよく聞く世の中じゃないか」

真木と目を合わせないように、応接室から出て行った。

五. 着手(1/4)

小学校時代の友人と中二の夏休みに偶然再会したとき、順平はテニスのラケットを肩から掛けて自転車に乗り、部活の練習へ向かっている途中だったが、相手はスクーターの後ろに跨り、同じように二人乗りのスクーター二台と、エンジンをふかして住宅街を並んで走っていた。

話しかけたのは、相手からだったはずだ。そういうタイプの連中と、順平は関わり合わないように気を付けていたから、じろじろと見て友人の姿を見つけたわけがない。蛇行して走る三台のスクーターが前方から近付いてくると見つけると、視線をまっすぐ前に固定し、自転車のペースを上げ、さっさとすれ違おうとした。しかし、その中の一人が自分を指差し、前で運転する仲間何か囁いて、やがてそのスクーターが順平の進路を妨げるように止まった。

順平は身構えていた。部活へ行くのに財布は持っていかない。母親が用意した弁当と水筒があれば、現金は必要ない。払うものが何もないのだから、確実に殴られるだろう。どういう態度で立ち向かえば、一番被害を少なく抑えられるか。ぐるぐると同じところしか回らない頭を使おうと焦りばかり募っていた。

こちらを指差していた一人がスクーターから降り、馬鹿にしたような笑みを浮かべながら、歩み寄ってくる。「順ちゃん、ひさしぶりじゃん」

身長は順平より十センチほど高く、長く伸ばして逆立てた髪は白に近い金髪になるまで脱色されていて、両耳には大ぶりのピアスがぶら下がっていて、肌にはにきびが広がり、暑さも気にせずだぼだぼのジーンズを履き、がらがらに声が低くなっていた彼は、小学校時代の面影がほとんどなかった。

知り合いだろうかと思いを探ろうとして、すぐに諦めた。この手の連中との関わりを作った覚えはない。覚えがないのだから思い出しようがない。黙ったまま、相手の動向を見守ることにした。

「あれ、覚えていないかなあ」

相手は少し寂しそうな顔をした。しかし、へらへらと気のない笑い顔はそのままだ。気を抜くまいと、奥歯を噛み締める。

「俺だよ、龍一。工藤龍一だよ。六年三組で一緒だったろ？」

工藤龍一。堤防を乗り越えて記憶が溢れかえる。供に校庭を駆け回っていた頃の面影は全く見つけられなかったが、記憶の中のやんちゃな少年と、目の前のヤンキーとが自然と重なっていった。

「龍、なのか？」

恐る恐る順平が尋ねると、龍一は満面の笑みを浮かべた。

「よかった、忘れられたかと思ったよ。一緒に秘密基地まで作った仲なのになあ」

順平の頭の中には、次々と昔の思い出が甦ってきた。秘密基地は、確かに作った。小学校四年生だったと思う。順平と龍一、他にも五人ほど仲間がいたかもしれない。言い出したのは龍一だった。龍一は、何かしでかすときの発案者だった。子ども心ながらも、面白そうで新しそうなことを次々と口にする龍一に対し、少なくともは憧れを持ったものだ。

そして順平は、龍一が口にしたことを形にするための手段を考える、仲間のブレンだった。基地を構えるのに最適な場所として裏山の木の上を選定し、仲間の希望を元に『会議室』『仮眠室』『武器庫』『隠れ部屋』を備えた間取りを作成した。段ボールやビニルシートを持ち寄って基地を建てる際は、順平が指揮を執った。

結局、出来上がった二週間後には町内会の会長の手によって基地は撤去され、順平たちは木で作ったナイフや弓矢、槍、パチンコまでも同時に失うことになった。放課後、秘密基地があるべき木の下に立ち、細かい枝の先と真っ青な空を見上げたときに得た喪失感は、順平たちを少し大人にさせたに違いない。

「これからどっか行くのか？」

あの頃とは異なる外見だったが、龍一の人懐っこく緩んだ笑顔は昔を思い出させる。順平は、背伸びしていたあの頃の、すました口調に戻っていた。

「部活だよ。夏休みも毎日練習があるんだ」

「何部？」

「テニス。ソフトテニス」

背負ったラケットを龍一に見せる。

「夏休み明けに大会があるんだ。俺、ダブルスで出ることになっているから」

「順ちゃんは、相変わらずすごいなあ。運動も勉強も出来るんだからなあ」

きらきらした目をする龍一に、順平は少し身じろいだ。

「運動は龍の方がずっと出来ただろ。走るのだって早いし、サッカーでもバスケでもキャプテンだったじゃないか」

「何もかもさぼりまくっているからな、見ての通り」

恥ずかしそうに龍一は俯く。

「学校行かないとき、走らないしサッカーもバスケもしないんだわ。もちろん、勉強も。だから、きっと今はどれも全部ダメだよ」

尤もなことだと思った。納得した上で、順平は反応を返さないことに決めた。軽々しく深入りしていいことではないと弁えていたからだ。

龍一の後ろで止まっていたスクーターの1台が、不意に大きくエンジンをふかす。赤い髪をした男が、詰まらなさそうにこちらを睨んでいる。龍一は慌てて右手を上げ、

「止めて悪かったな、順ちゃん。また今度、ゆっくり話そう」

振り返らずに仲間の元へと戻り、赤髪の後ろに跨る。龍一が腰を下ろすとすぐさま発進し、他の二台もそれに続く。閑静な住宅街の中を、無遠慮なエンジン音が重なり合って、徐々に遠ざかっていった。

龍一との再会を思い出したのは、真木の言葉がきっかけだった。

「日本中の暇な男子中高生が集まって手伝ってくれればいいですよ。力持て余しているから、暇したらろくなことしないんだから。カツアゲとかケンカで憂さ晴らしするくらいなら、斧とか鍬とかハンマーとか与えて野に放した方が役に立つし、遥かに健康的であること間違いないって」

いつだったか、龍一も似たようなことを言っていた記憶がある。その言葉を自らが大切に受け止めていたのか、龍一は建築関係の道を歩んでいる。ゆくゆくは、家業である農業を継ぐような事も言っていた。それまでに何度遊び歩く気なのかは分からないが。

解体工事を開始してから、五日が過ぎた。A棟から着手しているのだが、ほとんど進んでいない。その原因はいくつもある。作業要員が三名のみと手薄であること、手元にある使える道具がドリルとハンドクラッシャーの二つだけだということ、足場材が不足しているため、工事場所がずれる度に足場を組み直す必要があるということ、赤木に大型重機と足場材の追加を頼んでいるが、反応がまだないということ。

確かに、この場に昔の龍一みたいなのが五十人も集まれば、崩れかけた建物なんて、色んな無茶をしながらも一週間程度で倒してくれるだろう。大黒柱に群がるシロアリの如く、宿舍の壁にへばりつき、ハンマーやドリルでコンクリートを崩していく子ども達の姿を想像してみた。誉めたり煽ったりして競争心を掻き立てれば、大型重機を超える破壊力を発揮するに違いない。それくらいのポテンシャルが備わった年頃だ。

しかし、実際にこの場にいるのは、自分の限界を知っている順平と、限界を知ろうとしない真木と、限界まで頑張れない谷口だ。この三人に想像以上の働きを期待することが間違っている。

一日の作業を終えてから、順平は赤木に電話を掛けた。事務所に置かれた電話線の繋がっていない固定電話の番号ではなく、赤木の携帯電話にだ。七回コールが鳴って、留守電に繋がる。

「結城です。メールもしましたが、工事の件でお願いがあります。折り返しお願いします」

もう、四日連続で同じ言葉を吹き込んでいる。

クレーンやショベルカーがあれば、宿舎の解体は呆気ないほどスムーズに進むはずだ。谷口が運転免許を持っているため、装置さえ届けば何も憂うことはない。順平も真木も、谷口が重機を操る様子を眺め、歓声を上げていればいいのだ。

赤木へのメールは、谷口が食糧を買出しに行ったついでに頼んでおいた。クレーンとショベルカー、ブルドーザーが欲しいと伝えた。しかし、その返事もない。準備するために奔走してくれている可能性もあるが、まずそうではないことは、順平に限らず三人とも予想できていた。

作業が滞ることによって、徐々に三人のやる気と言うか緊張感も削がれていった。小さい機械で少しずつ崩していったらいいものの、赤木から重機が届けば今までの地道な努力など全て、語るほどでもないささやかな成果にしかならないことは承知している。それならば、毎日こつこつと働かなくても重機を待って、重機にまとめてやらせればいい。

そんな投げ遣りな態度は生活にも反映され、今週の夜は毎晩、谷口の大酒に付き合ってきた。真木も少しずつ酒の味に慣れてきたようで、順平に代わって谷口のいい呑み相手になっている。

今日だって、順平が自室に鍵を掛けて野暮用を済ませている間に二人とも出来上がっていて、なぜか電柱を撤去する話になっている。

確かに、順平の希望はこの場所を更地にすることだ。基礎の土台も取り去ってしまいたいし、今暮らしている管理棟も、最終的には根こそぎ無くして欲しい。だが、作業が膠着している現時点での優先順位をつけると、電柱の撤去は高くない。だいぶ下の方に位置している。

酔っ払い二人の雑談を何とはなしに聞きながら、順平はじっと窓の外を眺めていた。ガラスに映る自分の姿の向こうに、五十年前の華々しい時代の景色が浮かんできた。

五. 着手(2/4)

ここがまだ有望な鉱山地帯で、地上の楽園、と呼ばれていた時代、全国から日雇い労働者が集まり、懐を温めては去っていった。そういった者の多くは、普段は農業や漁業に携わっているもので、本業が落ち着く冬季に小遣い稼ぎに来たり、本業での収入が芳しくなかった年に生活費を得るために一時的に来ていた。多くは単身赴任者であったため、日雇い労働者向けに用意された宿は、四畳一間のバラックだった。冬には隙間風が寝ている頭に当たり、翌朝髪の毛が凍っていることが珍しくなかった。皆、家族を養うために、布団を被って耐え凌ぎ、毎日の重労働に勤しんだ。

そんな中、家族連れで渡り歩く者もいた。『渡り鳥』と呼ばれる者たちだ。定職に就かなく、定住もしない、その日暮らしの生活を送る父親らが、当時、最も確実にまとまった金を得られる鉱山に集まった。鉱山の景気がよいうちはずっと居座り、稼げるだけ稼ぎ、より歩合の良い仕事を見つけると次へ移り住む。隣同士で生活をしていても、いつ出て行ったのか分からないほど行動が早く、そして出入りが激しかった。

順平の父親は、そんな移民の子として育った。そして順平の母親は、そんな彼らを哀れんだり蔑んだりする立場である、鉱山会社の社員の家に生まれた。母親は、ここの宿舎で育ったのだ。

「お父さんはね、とにかく賢かったのよ」

母親の誇らしげな顔は、今でも忘れない。

「学校の先生の中にも意地悪な人がいてね、『渡り鳥の子どもは、何語が通じるのか？日本語分かるのか？』って、授業中に言うの。確かに、日雇いで来ていた家庭の子は、勉強ができない子がほとんどだった。転校ばかり繰り返して、きちんと勉強する時間がないの。中には、歳を誤魔化して働いている子もいたのよ。父親は昼間から飲んだくれて賭け事をしているから、自分が働かないといけない、って言って」

順平の母親は、恵まれた立場から恵まれない立場を哀れむ性格の人だった。

「親次第で、本当に苦勞する子どもがいるのよね。お父さんのお父さん、つまりあなたのお祖父ちゃんは、そういう人ではなかったけれど。だから、お父さんはきちんと学校に来ていたし、誕生日には本を買ってもらったこともあったそうよ。お母さん、本読むの好きしょ？お家にたくさん本を持っていたから、お父さん、うちに通うようになって。うちには本棚だけが並んでいる部屋があったんだけど、お父さんがうちに来ると、真っ暗になって文字が見えなくなるまで、二人でずっと本を読んでいたわ。一言も話さないのよ」

順平が子どもの頃も、たくさんの本を買い与えられた。誕生日やクリスマスには、世界名作劇場や日本昔話のハードカバーシリーズが、一気に全巻揃ったものだった。

「うちには色んな本が揃っていたけれど、お父さんはいつだって一番難しい本を選んで読んでいたわ。経済とか政治とか、宗教、思想、外国文学。お母さんなんて、何度読もうとしても五ページも読まないで眠っちゃうの。何が書いてあるかまったく分からなくて。そんな本を、中学生のお父さんはすらすら読んじゃうんだから。

授業で先生に当てられても、お父さんはさらっと答えるの。しどろもどろになったり、もごもご言って誤魔化したりしたことは一度もなかった。同じクラスに、会社の専務の子が居て、その子は大学生の家庭教師をつけて勉強していたんだけど、成績が一番いいのは学校の授業だけで勉強しているお父さんだったのよ」

母親の、父親自慢はいつまでも続いた。賢いだけでなく、父親は運動もできて、格好よく、そしてそのことを自慢しない謙虚な人だったそうだ。クラス内に留まらず、学年中、学校中の女の子が父親を追いかけていたそうだ。当時のことをうっとり話す母親の表情は、何歳になっても中学生のままだった。

幼い順平をじっと座らせ、抱いている思い出を全て吐き出すと、必ず同じ言葉で締めくくる。

「順ちゃんは、本当にお父さんに似ているわ。あなたはお母さんの一番の宝物よ」

順平がテストで百点を取ってきても、運動会のかけっこで一等になっても、読書感想文で大賞を受賞しても、母親が褒めるのは父親だった。

翌日、地道な解体作業を二人に任せ、順平はC棟の二階に来ていた。

母親のことを思い出してしまった。この作業を終えるまでは考えないようにしようと決めていたのだが、厄介なものほどうっかり心に隙間を作ると簡単に姿を現す。

C棟二階の角部屋が、母親の生家だと決めている。この場所が一番、日雇い労働者たちのバラックに近い。しかし、二階の高さでは斜面の影になってちらりとも見えない。このもどかしさが、両親の現実の距離を表している。

宿舎の他の部屋にも共通して言えることだが、室内には何一つ残されていなく、がらんとして寒さを感じる。黄ばんだ壁に落書きを消したような跡があり、人の気配は残っているが、それも風化してきている。

こうやって、過去の痕跡は消えていく。形のない思い出だけが頑丈に補修され、その過程で美しく鮮明なものへと変えられていくのだろう。理想的な虚像が出来上がれば、辛い現実を見る必要はなくなる。どちらが真実かは自分で選べばいいのだ。

渡り鳥に育てられると、望まずとも渡り鳥として成長する。そして、渡り鳥に宿り木は必要だが、家は不要だった。

中学生の頃、母親が父親をアイドルのように見ていたのとは少し異なる憧れを、父親は母親に対し持っていたのだろう。母親には故郷があった。母親の故郷はこの鉱山だ。今は住民が一人も残らず去ってしまった廃墟だが、生まれ育った故郷はここだと、母親は迷いなく言える。そして、父親にはそれができない。

人生の起点が故郷という土地ではなく、渡り歩くことそのものだと父親が気付いたとき、すでに息子がいた。ヒトとしての自我もまだ芽生えていない赤ん坊だった。

子どもが父親を認識する前に姿を消したことが、精一杯の誠意だったのかもしれない。本当の父親の記憶が欠片もなければ、新しい父親代わりが現れたとき、比較的受け入れやすくなるだろう。ただ、順平の母親はそんな意図を汲み取ることはなかった。

服の裏ポケットに隠し持っているタバコを取り出し、火を点ける。工藤龍一と会うようになって間もなく、順平も吸うようになった。ただし、吸うのは龍一と二人だけのときか、今のように一人きりのときか、どちらかだけだ。当然、母親の前では吸わない。父親が酒もタバコものまなかったため、母親の前ではどちらも避けている。どんな噂で母親の耳に届くか分からないので、人前ではどちらにも手はつけない。未だにその癖は抜けていない。

ただ、母親が生まれ育ったと思われるこの部屋で一服することは、無意識のうちの反抗なのかもしれない。

順平に反抗期はなかった。ずっと優等生として扱われたのは、そのためかもしれない。親と喧嘩し、殴られて家を飛び出した龍一の愚痴を、土手に並んで座って聞きながら、本当は羨ましく思っていた。

五. 着手(3/4)

「俺は悪くない」

龍一の右のこめかみが腫れ上がり、その下が青っぽくなっている。他校生と喧嘩したことで両親が学校に呼び出されたようだ。友人が噂しているのを聞いた。

顔や手に擦り傷を作り、学ランの袖や裾が少しほつれているのは喧嘩のせいだろう。しかし、一番目立つこめかみのあざは、父親が殴ったものだった。

「喧嘩吹っかけてきたのはあっちだ。二中のやつらに、最近調子乗っている、って言われたから、昔からこの調子だ、って言ったら手え出してきた。俺は痛いのが嫌いだ。殴られるくらいなら殴り返す。相手が殴る気がなくなるまで、殴り続ける。痛いのが嫌なのは誰だって同じだろう？」

雑草をぶちぶちとむしり取りながら、

「たかがガキの喧嘩だろう？交通事故に遭ったみたいに大騒ぎしやがって。骨が折れたわけでもないんだぜ。じっとしてりゃあそのうち治るんだ。自分が売った喧嘩に負けたからって、大人に泣きつくのはルール違反だろ」

「お前、さっきから二中のやつらに対して怒っているのか？」

龍一は答えない。不機嫌な顔で対岸を見つめている。

「親父さん、すごく怒ったんだな」

学内での噂を聞いた順平は、放課後の部活の練習を休み、龍一の家へと向かった。二中の三年生五人に対し、龍一は一人だったようだ。教師たちもなにやら騒がしかったので、てっきり龍一が大怪我を負わされたと思い込んだのだ。順平がインターフォンを押そうとした瞬間、稲妻のように鋭い怒声に追われるように、龍一が飛び出してきた。

「親父は確かに怒っていた。お袋もカンカンだった。でも、二人とも正しい」

遠くを見つめたままだが、龍一の横顔は少し誇らしげに見えた。

「親父に言われたよ。こんな下らないことに親を巻き込むなって。おまえの要領が悪いからこんな騒ぎになったんだって。めちゃくちゃ言うけど、俺は親父は正しいと思う」

龍一の言葉に賛同すべきか迷った順平は、結局無言のまま聞き流すことにした。

「別に、二中のやつらもどうでもいいよ。俺、散々殴ってやったからな。それなのに俺が更に恨んだら、さすがに可哀相だろう」

じゃあ、いったいなんでそんなに機嫌が悪いのか。順平が問おうと口を開く直前に、龍一が非難するような視線を投げかけてきた。

「ちょっと前に、中間テストがあっただろ」

急な話題に面を食らい、戸惑いながらも頷く。

「俺、三五七人中、三五五位だった。五教科の合計点が、三点だ」

これにも無言で答えるしかなかった。哀れな結果に気を遣ったのではない。人知を超える凄惨な点数に呆然として、言葉が出なかったのだ。どんな過ちを犯せば、そんな結果になるのだろうか。

「国語の相川先生が、今回のテストは名前に一点ついているから、名前書くだけでいいから出席しろって言った。だから、名前だけ書いて、提出して、あとはブッチした。

社会のテストはな、実はけっこう好きなんだ。地図とか昔の人の絵とか出てくるだろ。見ているだけで面白いから、出席するようにしているんだ。そうしたら、おだのぶながの絵があっただ。俺、おだのぶながは尊敬しているからな。解答欄全部に『おだのぶなが』って書いたら、一問合っていた。すごいだろ」

「ああ、すごいな」

龍一が何を話したいのか掴めず、曖昧に調子を合わせるしかできない。

無理に明るい口調にしていることは分かった。龍一は嘘がつけないタイプの人間だ。すぐに態度に表れる。や

り場の無い思いを押し込め、顔だけは笑っている。

「順ちゃんが何位だったか、当ててみせようか。四位だろ。合計点が四八七点。いつもより調子悪かったらしいな」

順平は息を飲んだ。テストの点数は公開されない。自分から言いふらさなければ、結果を知っているのは本人と教師たちだけだ。龍一が何に対して怒っているのかを悟った。

「順ちゃんはきっと、高校は一高に行くんだろ。そんで東大に入って、医者か弁護士か政治家になるんだろ」

「龍、誰に何を言われたんだ」

龍一は黙り、また草をむしり始めた。手元の地面に土が現れると、その表面をしばらく撫でていた。

「学年主任の、大川に呼び出された。喧嘩のことでまず怒られた」

手元を見つめながら、順平と目を合わせようとしなない。

「『お前みたいな屑と友達だと思われると、結城の進路の邪魔になる』って言われた」

「下らないな。あいつの言うことなんか無視すればいい」

「でも、俺と一緒に居ると順ちゃんの内心点が下がって、高校の推薦受けられなくなるって…」

「推薦入試は受けるつもりはない。あれは面接しないといけないからな。俺は面接が嫌いなんだ。それに、普通のテストで俺なら十分受かる」

偽りは一つもなかった。例え、成績を下げられるような嫌がらせを受けたとしても、合格点に達せばいいだけのことだ。何の心配もない。

「龍、言っておくけど、俺はお前が思っている以上に頭いいからな。たとえ毎日お前とこうして一時間でも二時間でも話していたからといって、俺の進路に影響は出ない」

「でも、今回の中間テストで四位だったんだろ。いつもは一位か二位だって大川が…」

「二日目の朝、トイレに行きそびれた。一時限目の数学の間、ずっと腹が痛かったんだ」

「本当？」

「ああ、嘘じゃない。次のテストからはまた一位を取るよ」

龍一の表情が、徐々に和らいでくる。怒っていたのではなく、順平のことをずっと心配していたのだ。手についた土を払い、その手を頭の後ろで組んで、どさりと寝転がる。

「そうだよな、順ちゃんはすっげえ頭いいもんな。俺が足引っ張ったくらいじゃびくともしないよな」

龍一は満足げにため息をつき、しばらく空を眺めていた。順平も、その視線を追って赤く染まりつつある空を見上げる。鳥の群れが、沈む太陽を追いかけて通り過ぎる。

「順ちゃんは、なんでそんなに勉強頑張るんだ？」

呟かれた問いかけに、すぐには答えなかった。本当のことを言うのは、少し恥ずかしい気がしたからだ。しかし、龍一に対してそんなことを考えるのも馬鹿らしいと気付いた。

「父親を、超えたいんだ」

もっと小さい頃は違った。ただ、母親が褒めてくれるのが嬉しくて、勉強も運動も図画工作も頑張った。成長するにつれて純粋な気持ちは捨かれて来て、今ある感情は妬みのようなものだ。

「そういえば、順ちゃん、小学校のときに苗字変わっていたっけ」

さして興味を示さない龍一の態度が、順平を安心させた。

「あの人は、母親の二人目の旦那だ。弟の父親はあの人だけど、俺の父親は違う。ずいぶん昔、俺が赤ん坊の頃に行方不明になった」

「そうなんだ」

「ああ」

「母ちゃん、忙しいな」

「ああ」

的確な指摘だ。確かに順平の母親は落ち着きがない。自分で次々と問題を作り出しては、苦勞の絶えない道を歩んでいる。

「俺がいい成績取ってくるのも、先生に褒められるのも、昔から女子にモテまくるのも、父親の血を継いでいるからだって言うんだ。それは違う。俺がそれだけ努力しているからだ。そのことを母親が気付くように、父親には絶対に出来ないことをやってやるって決めた。だから俺は昔から、なんでも出来るようになるために、なんでも頑張ることにした」

涼しい風が川に沿って吹き抜ける。龍一がちぎった雑草が舞い上がり、順平の目の前を通り過ぎていく。それらを目で追った。ばらばらに散らばりながら高く昇り、やがて見えなくなった。

「たんぼぼみたいにさ、俺も父親みたいに、そのうちどっかに飛んでいくのかな」

小さい頃から漠然と抱き続けている不安が、無意識の内に出てきた。家の中では絶対に口に出せなかった。まさにこの瞬間、家族と居る時以上に心が落ち着いている自分に気づく。

風の残りが柔らかく通り過ぎていくのを待ってから、龍一が体を起こした。

「茨城県の落花生生産量は、千葉県に次いで全国二位なんだ。知ってた？」

「そうなのか？」

「ああ、俺んちでも作っている。昔からおやつと言えばピーナッツだった。こんなににきびができたのもそのせいだ。たぶん」

「思春期だからだろ」

龍一は残念そうに頬を撫でている。

「落花生はさ、花が地面に落ちて、その地面の中で実になるんだ。受粉すると、花の下にある子房が地面に向かって伸びて、地面に刺さって、地面の中でさやが出来て、落花生になるんだ」

「へえ。知らなかった。面白い植物だな」

「だから、絶対に元の株の傍にしかできない。親の足元に生まれ、そこで育つんだ。俺だったら、たんぼぼの方がいいな」

龍一は農家の長男だ。小学校の頃から、将来は農民だから勉強は必要ない、と言ってどんな点数を取っても平然としていた。ばつが目立つ答案用紙を持ち帰っても、両親は何も言わないようだ。親としても、農作業をよく手伝い、体が丈夫であれば他に望むことは何もないようだった。

自分は生まれながらの農夫だと、いつも自嘲気味に言っていたが、そう言う龍一の胸はいつだって得意げに張られていたのを、順平は覚えている。

少し思い直してから、龍一に答える。

「そうだな、たんぼぼも悪くはないな」

辺りが暗くなり、風が少しずつ強くなってきた。二人は立ち上がり、帰路についた。

五. 着手(4/4)

「順ちゃん、ちょっといいか」

夜、自室に入る直前に、谷口に呼び止められた。鍵を差し込もうとしていた手を止める。

「どうしました？」

何も言わずに、谷口は両手を差し出す。掌が向けられる。

硬くなった皮に、赤みを帯びたまめが並んでいる。

「おれはこんなもんで済んでいるけど、宏太のは酷い」

順平を睨みつけていた視線をちらっと横へ逸らし、

「まあ、あいつがきちんとグローブつけないの悪いんだが」

小声で言い添える。

「とにかく、このままの調子で、全て手作業で済ませようと思っているなら、それはやめてくれ。時間がかかるだけじゃなく、おれらへの負担も大きい。三人しかいないんだから、特にだ」

反論の必要はない。谷口の言うとおりで、このままの作業を延々と続けることが現実的ではないことは、作業開始二日目で気づいた。

「一日も早く、重機を取り入れるべきだ。確かに、ただでさえ目立つ上に音も大きくなるから、地元の連中にバレやすくなるリスクはある。でも、今のままでもけっこうな音が出ているし、工事が長引くほどやっぱりバレる危険も高まる」

順平は頷く。

「順ちゃんは、まだ赤木の野郎に少しは期待しているのかもしれない。でも、注文したものが来るどころか、連絡も返ってこない。おれも麓に下るたびにメールを確認しているけれど、音沙汰なしだ」

谷口の目に、口調に、力がこもる。

「もう、あいつは終わりだと思った方がいい」

谷口の言うことはよく分かる。赤木の対応の悪さは覚悟していた以上だ。もしかしたら、前金を持ち逃げされているのかもしれない。そんな不安が日に日に増している。

「しかし、ですね。頼んでいる以上、黙って色々やってしまうわけにも行かないでしょう。例えば、これから俺の伝で重機を手配して、現場に持ち込んだとします。でも、もしかしたら社長も既に手続きを進めていて、少し時間を食っているだけなのかもしれない。重機が二台被っても、俺ら三人じゃ使いこなせない。

それに、俺が無断で勝手に何かすると、あの人絶対に文句つけてきますよね。因縁付けられて面倒なことになるのは御免です」

「他に伝はあるんだな」

ざらりと谷口の目が光った。順平が言ったほかの部分には全て無視されたようだった。

「まあ、正直、ないわけではないです」

ただ、それは本当に切り札だった。使わずに済ませたい手段だったから、結果として赤木のような輩に頼むことになったのだ。赤木に可能性がまだあるならば、それに賭けたいというのが本音だった。

「じゃあ、すぐにその伝に連絡を取ってくれ。どんな伝か知らんが、今から頼めば遅くとも一週間後には重機でさくさく解体始められるだろう」

「今、ですか」

「今すぐだ」

躊躇わずにはいられなかった。頼まないと決めていた相手だ。向こうもそのつもりだろう。そんな相手への連絡を、この短時間のうちに決断しろと言われても、抵抗を感じて当然だ。

返す言葉に詰まり、視線を泳がせている順平の腕を、谷口はがっしりと掴んだ。痛いくらいの力に顔が歪む。

「心配するな。何も問題は起こらない」

その言葉に、少しの迷いもなかった。さっきからずっと、谷口は真剣な顔をしている。爆弾のスイッチを正義の名の元に押そうとするテロリストのような危険を、目の奥に見つけた気がして、順平は恐怖を覚えた。

「そんな自信満々に言われましても。なんでそんなにはっきり大丈夫だと言い切れるんですか」

「おれがなんとかする」

「なんとかって」

「どうにかするから、任せてくれ」

強い眼差しは少しも揺らぐことがなかった。

赤木を信用していないのは順平も同じだ。関わらないで済むようになるならば、それを望む。谷口が任せろと言うならば、それに頼りたくなるのもごく自然の心境だ。谷口の心の底に、何か恐ろしいものが隠されていて、それが今の強い意思の原動力になっていると分かっても、強く抗えない気分になってきた。

リスクは二つある。順平自身が抱えるものと、谷口から漂ってくるもの。どちらも身を刺すほどの危ない香りがする。

それを感じながらも、結局順平は頷いた。

「分かりました。重機、今すぐに連絡します。超特急で用意するように伝えますから」

「ありがとう、悪いな」

順平の言葉に満足したのか、谷口の視線は少し柔らかくなった。背を向け、立ち去る間に、「あとは任せてくれ」と固い声で言い残し、暗闇の先へと消えていった。

順平はしばらく谷口が去っていった先を眺めていた。体中に緊張感が満ちている。一日の作業で体は疲れ果てているはずなのに、思考がぎらぎらと醒めていく。

自室に入る。カーテンから漏れる月明かりに目が慣れ、物の位置関係が確認できるようになると、ごちゃごちゃした机の上から衛星電話を取り上げた。

番号は記憶してある。途中までプッシュし、切り、再びボタンに指を当て、離す。

いつかは必ず連絡することになっていた。しかし、それはこんなに早い時期ではなかった。もっと事態が落ち着いた、一年後辺りを想定していた。そういう約束を交わした訳ではないが、順平はそれがちょうどいいと思っていた。

ゆっくりと、親指で番号をたどる。耳にはコール音と、自分の心音が混ざり合って届いた。三回目で相手が出る。瞬間、全身が強ばった。うまく声が出せない。小さく咳払いをする。

「俺だ」

短い一言で、相手はすぐに気づいた。順平からの電話を知っていたかのように、リラックスした声が返ってきた。

六. 疑心(1/2)

翌朝、油断なく順平を見つめている自分に気付き、真木は慌てて目を逸した。

順平さんは、真面目でいい人だ。

自身に言い聞かせるように、心の中でその言葉を繰り返す。

実際に、真木は順平を尊敬していた。それほど歳が離れていないことは、音楽について話したときに分かった。中学、高校時代に流行ったアーティストが被ったのだ。六歳以上は歳は離れていない、ということだ。六年後に自分も同じように落ち着いた人間に成長しているとは思えない。

「何か用か？宏太くん？」

不思議そうな顔で順平に尋ねられ、はっと我に返る。無意識の内に、また睨みつけていたらしい。慌てて愛想笑いを浮かべ、手を振って誤魔化す。首をかしげながら、順平は自分の味噌汁を飲み干した。

順平さんは絶対に道を外すようなことはしない。

三人分の食器を洗っている時、谷口が後ろからそっと近づいてきた。

「どうした、水が出しっぱなしだぞ。節水しろ」

気づけば、スポンジだけを握って両手を水にさらしていた。手に当たる冷たさが伝わってくる。

「すみません」

蛇口に手をかけながら、頭に浮かんでいた想像を振り払う。

しかし、何度振り払っても、順平の声と、その生々しい会話は消え去ってくれない。

「宏太」

ほんの束の間だというのに、谷口が傍にいたことも意識から抜けていた。これは重症だ。どんなに理性で押し込もうとしても、このままでは抑えきれない。真木は観念した。

「谷口さん、話があるんです」

キョロキョロと辺りを見回し、

「順平さんには聞かれないように」

真木の強ばった顔が急に近づいてきたので、思わず谷口は身を逸した。

「ど、どうしたんだ。いきなり。順ちゃんなら今日もまた、C棟を見てくるって行って部屋を出て行ったが」

「ちょうどいい」

それなら、小声になる必要もない。安堵し、そしてまた緊張を顔に走らせる。真木は、単刀直入にいった。

「順平さん、強盗とかしていませんよね」

それは、あまりにも唐突だった。谷口は理解が追いつかず、ただ呆然と真木を見つめている。対照的に、一言目を発したことで緊張の糸が切れたのか、真木は怒涛の如く胸の内を発し出した。

「オレ、昨日の夜、トイレに起きたときに順平さんが電話で話しているの聞いちゃったんです。谷口さんが応接室に戻ってきたのと入れ違いでオレは出て行ったんですけど、順平さんの部屋から細く光が漏れていて、でもきちんとドアは閉まっていたから、どうしても隙間ができてしまうんだと思いますけど、それは古いから仕方ないかなって。

で、光が漏れるくらいだから、声も聞こえちゃったんですよ。全然、立ち聞きなんかしていないです。一瞬たりとも、順平さんの部屋の前で足を止めるようなことはしていません。ただ、うるさくしちや悪いと思って足音をできるだけ立てないように歩いたら、ばっちり声が聞こえたんです。歩きながらでも、自然と耳に入ってきたんですよ、たぶん、電話しているようでしたけれど。順平さんもそんな大声を出すタイプの人じゃないから、本当にここの壁が薄いか、ドアの隙間が意外と広いのでしょうか。

順平さんの、あれは絶対に共犯者との会話ですよ。全国に手配とか、ほとぼり冷めるまで連絡しないと、こ

こなら人目を避けられるとか、配分はどうするとか」

「宏太、落ち着け。声が大きい」

「絶対に強盗犯の会話です！」

真木の声で、管理棟の薄い壁がびりびりと振動する。谷口は咄嗟に耳を塞いだ。周りの空気を波が走り去るのを待ってから、肩で息をしている真木の顔を覗き込む。

「おい、大丈夫か」

真木は完全に放心していた。谷口の問いかけにも無反応だ。

「昨日の夜、お前が聞いたことを、ゆっくりと話してみろ。いいか、ゆっくりと、一つずつだ」

穏やかな口調で諭される。こういうときの谷口は本当にうまい。真木は正常な判断が難しいくらい気が抜けていたため、谷口の言われるがままに頷くしかなかった。

「順ちゃんは、誰と電話していたんだ？」

「それはわかりませんが、きっと強盗の共犯者だと」

「強盗は今はいい。誰と話しているのかは、分からなかったんだな。名前を呼んだりもしていなかったと」

「はい、そうです」

抗う気は全く失せていた。谷口の操り人形と化している。

「会話を全部聞いていたのか？」

「いえ、途中からだと思います」

「なんて言っているのを初めに聞いたんだ」

「『ここは人目がなくてちょうどいい』って言っていました」

「なるほど。それから？」

「ええとですね…」

落ち着きを取り戻した真木は、昨夜の記憶を辿り始めた。

解体作業が始まってから、今までの比じゃないくらいの体力を使うようになった。あのハンドクラッシャーというものは重い。今まで持ち上げたことのあるものの中で、一番重い。がっしりとした谷口は軽々と持つし、細身である順平でもしっかりと持っているが、とにかく真木にとっては重い。これでも軽いほうだ、と谷口に言われようとも、重いものは重い。持ち上げるのがやっとならぬというのに、スイッチを入れるとそれが大きく振動するのだ。使いこなせるわけがない。支えているだけでやっとならぬ。

ハンドクラッシャーを五分動かし、十分休憩し、というのを繰り返していた。根気が足りない、とはっぱをかけてきた谷口も、真木が本当に辛そうな顔をしているのに気付いて、何も言わなくなった。持ち上げることすらできなくなると、まだ扱いやすいダイヤモンドコアドリルで穴を開けるという作業を命じてくれた。

解体作業一日目で、十本の指の付け根に、真っ赤なまめが並んだ。

こうなると、五分間も支えていられない。歯を食いしばって耐えてみたが、自然と涙が溢れてくる。

真木の小休止の間隔が短くなったのを、今日、ついに谷口に咎められ、そして、両手の状態がばれた。

谷口の辛そうな顔が忘れられない。

夜、寝るときに、谷口が順平の部屋に向かった。きっと自分のことについてだろう、と真木は感づいた。過保護な親のようだ。気恥しく思ったが、限界を迎えていることは否めないし、このままの状況で作業を続けても、自分はただ邪魔なだけだ。谷口の背中を黙って見送ることにした。

疲労によって、布団に入ると間もなく深い眠りについた。

どれくらい眠ったかは分からないが、どうやら谷口が寝付いてすぐに目が覚めたのだと、あとで知った。なんとなく落ち着かない気がして、念のためトイレに行こうと起き出し、廊下に出たときに、順平の部屋から漏れる光に気づいた。何か声も聞こえる。

こんな遅くにどこに電話しているのだろうか。ぼんやりと、深い興味はなく思いながら、そのままトイレに入ろうとしたときだった。

「ここは人目が少ない。ここにいれば見つからないだろう」

ドア越しとは思えないほど、はっきりと言葉が聞き取れた。驚いて振り向くが、さっきと変わらずドアは閉まっている。無防備に発された声は、真夜中の静けさに乗って三十年前に建てられた薄い壁をあっさりを越えたようだ。

「大丈夫、まだバレていないはずだ」

気付けば真木は、順平の会話に集中していた。じっと耳を傾けると声に含まれるかすかな緊張や投げやりな態度まで伝わってきて、順平がどんな表情なのか想像できた。

「お前に連絡するのは時期尚早だって思っているよ。まだ、世間のほとぼりも冷めていないからな」

真木はなぜだかこの時に、数日前にきた赤木が持ってきた新聞記事を思い出していた。五億円強盗事件。重傷者が横たわっているのに目もくれず、現金を持ち去った若い男が二人。赤木は、順平がそのうちの一人だと思っているらしい。順平さんはそんな人じゃない、と憤慨した気持ちは、今でも湧いてくることがある。

順平を信頼しているはずなのに、なぜ自分はこんなことを考えているのか。罪悪感を抱きつつも、少しずつ暗雲に支配されていく心の奥がみえた。

「ああ、手配済みだよ。日本全国に伝わっている」

指名手配のことだ。新聞にも載っていた。強盗犯二人に関するあまりにも少ない特徴を記した手配書が、全国に出回っているはずだ。順平はどうやら共犯者にそのことを知らせているようだ。

「配分？俺は特にこだわらない。目的を達せられればあとはお前に任せるよ。ああ、恨みもしないさ」

真木は口を出したくなった。五億円もの大金だ。しかも二人なのだから、ざっくりと半分に分ければいい。それが一番遺恨が残らないだろうし、半分になったとしても一般人には馴染みのない大金であることに変わりはない。ここは山分けだろう。もどかしさを発散できるはずもなく、言葉を飲み込む。

「分かった、現場で待つ。急がせて悪いな」

電話が切れたようだった。しばらくじっとしていると、ドアの隙間から漏れていた光が消え、廊下は完全に闇に包まれた。

トイレに行く気は失せていた。手探りで、物音を立てないように足を忍ばせ、真木は応接室へと戻る。布団に潜り込んでからも胸の鼓動に邪魔されて、しばらく目が冴えていた。

現場というのは、このことだろうか。もしくは、強盗が行われた川崎のことだろうか。他に二人だけの秘密の場所があるのかもしれない。それほど遠くない未来に、指名手配犯二人がどこかで合流する。順平が気にしていたように、それはまだ早い気がする。

それにしても、なぜ、順平さんが。

自分は大きなショックを受けているのだと、少しずつ分かってきた。同時に、怒りに近い、どろどろとした黒く嫌な気持ちが湧いてくる。信用を裏切られること。それは今、真木が最も憎んでいることだ。誰であっても、それは許されることではないし、憎まれて当然の行為である。

懐かしくもある心の闇が浮き上がってきたとき、目から頬を伝って涙が流れた。布団の端で、慌てて拭う。

鼓動はなかなか収まりそうになかった。

六. 疑心(2/2)

真木の話をしている間、谷口はずっと無表情だった。元々表情豊かではないので、何を思っているのかは図れない。全く興味を抱いていないようにも見えるし、非常事態に備える覚悟を固めているようにも見える。

緊張を高めながら真木が反応を待っていると、ようやく谷口が一言だけ答えた。

「決め手はないな」

「え？」

「どうとでも取れる会話だ。強盗犯だって言い切れはしない」

「でも…」

真木は食い下がった。時が経つにつれ、自分の中の疑惑は膨らんでいくばかりなのだ。

「順平さん、結構若いですよ？ 大学卒業して間もないと思います。それなら大して給料ももらっていないはずですよ。それなら、この工事費はどうやって用意したんでしょう？」

自分の部屋だって、あんなに頻繁に鍵をかける必要ないじゃないですか。トイレに出るたびににかけているんですよ。たった三十秒扉を外すだけなのに。そんなに神経質にならなくてもいいじゃないですか」

「証拠は何もない」

谷口は少しも動じていなかった。思わず真木が身じろぐ。真木にとっては、順平が強盗犯だったという結論以外に辿り着くゴールはないのだ。それを否定されると、行き先を見失ってしまう。

「言わなくても分かっていると思うけどよ、お前は順ちゃんが死にかけた人を横目に金を奪って逃げるような人でなしだって信じているのか？」

答えられなかった。本音で答えるならば、ノーだ。順平がそんな非情なことをするとは思えない。まだ一ヶ月程度しか共に生活をしていないが、それくらいの判断はできる。

しかし、真木の心には壁が作られていた。すなわち、人を信用するということが、どれだけ愚かなことか。それは順平とは全く関係のない経緯で作られた壁だったが、真木にとっては自分の経験だけで作り上げた唯一の教訓でもあった。だから、それを無下にするわけにもいかない。黙り込むことで、谷口への返事とした。

「…まあ、いい。ただ、もっと言うのだ、宏太。もし、順ちゃんが強盗犯だったとしよう。人命を見捨てて、五億円を持ち去った犯人の一人だとしよう。それが真実だってはっきりしたとして、お前はどのようなつもりなんだ？」

「どうするって…」

「通報するのか？ 出頭を進めるのか？ それとも口止め料をせびろうとでも思っているのか？」

「口止め料なんて…思っていませんよ、そんなことは少しも」

「じゃあどうする？」

「それは…」

答えは、すぐには出てこなかった。そこまで考えていなかったのが本音だ。そして、考えるよう迫られると、自分の意見というよりも、教科書に書いてあるような言葉しか出てこない。

「順平さんはいい人だと思います。でも、もしも本当に強盗犯だとしたら、それを見逃す訳にはいきません。自首を進めますし、説得して無理ならば通報するべきだと思います」

「どんな事情を抱えていたとしてもか？」

さっきから、谷口は答えに詰まることばかり聞いてくる。この十八年間の人生、自分も周囲も平坦な道を歩んできた。犯罪者と触れ合う機会は皆無だ。犯罪に対する意識としては、大人から言い聞かせられた考え以上のものを自分の中で育てることはなく、これまで過ごしてきた。だから、真木の答えはやはりつまらないものになった。

「どんな理由にせよ、罪は罪です。犯罪を認めるわけにはいきません。やむを得ない事情があったとしても、犯

罪ではなくもっと別の解決法を探るべきです」

言いながら、昔観たサスペンス・ドラマの一シーンを思い出す。追い詰められて人を殺してしまった女性が、人情派刑事の説得を受け、自殺から免れるというラストの場面だ。事情も気持ちも分かるけれど、罪は生きて償わなければならない、そう言っていた。テレビではいつでもそうだ。犯罪を見逃すようなことはしない。例外はなかった。だから真木も決められたとおりの台詞を言うしかなかった。

谷口は、しばらくじっと真木を眺めていた。呆れているように見え、真木は少し気恥しくなった。自分の言葉で話していないことは確実にばれている。

「若いな」

溜息のように吐き出された言葉は、真木にとどめを刺した。

「でも、お前が正しいよ、宏太。そう考えるべきだ。世の中のみんながみんな、そう考え、自分にそう言い聞かせていれば、無用な悲しみは生まれずに済む。つまらない葛藤をする必要もない」

意外にも、谷口は優しい口調で真木を支持している。馬鹿にされることを覚悟して体を強ばらせていたため、真木は声が出てこなかった。

「お前にはずっと、その感覚のまま大人になって欲しいもんだ」

どこか諦めが込められた、期待の言葉だった。

谷口との会話を頭の中で反復しながら、真木はその日の作業に取り組んでいた。相変わらず、ドリルとハンドクラッシャーを交互に使う辛い作業になった。手のひらの痛みを騙しながら、それでも足場が届く範囲の壁の破碎は続いた。

昼休みに入る際に、順平が申し訳なさそうな顔で、二人に謝ってきた。

「重機だけれど、たぶん十日の間には来ると思うんだ。早くても一週間はかかりそうだとされました。導入は予定よりも遅れてしまって、二人には無理な作業をさせてしまって申し訳なかったです。

重機が来れば工事の進行もかなり改善されるから、今ある道具を使って体に負担をかけてまで、作業を進めてもらう必要はありません。ここまで頑張ってもらった分、解体工事はしばらく休んでもらおうと思います」

それを聞いて、台風一過のような晴天が真木の中に広がった。日に日に苦痛になってくる作業への取り組みを気鬱に思う必要もない。手に持ったドリルを投げ出して、万歳したくなった。

「そうか、これで工事の目処はつきそうだな」

谷口も安堵しているようだ。少し表情が柔らかい。

「手配できた重機の種類と数を教えてくれないか」

「油圧ショベルが一台です。もちろん、アタッチメントは一通りついてくるはずですが。あまり効率的ではないですが、一台でコンクリートの破碎も鉄骨の切断も、産廃の積み込みもやってもらうつもりです。搬出には谷口さんのトラックを使わせてください」

「一台か。かなりヘビーユーズすることになるな」

「そうなんです、二台手配したところで、操作できるのは谷口さん一人ですから。結局機械を遊ばせてしまうことになります」

「それもそうだな。でも、産廃の搬出の時だけでも、オペレーターはもう一人欲しいところだ。おれがトラックを運転している間、何もできなくなるからな」

「なるほど。ちょっと、確認してみます」

二人が何を話しているのかよく分からなかったが、取り敢えず今までよりはずっと好調に作業が進むことになりそうだ。真木の気分は一気に浮き上がった。

「まあそんなわけで、重機が現場に届くまで仕事はお休みにしますよ。俺はここに残っていますので、二人ともどうぞ麓に下るなり一時帰宅するなり、お任せしますから。宏太くんも、いづらか渡すから一度家に帰っても

いいんじゃないか」

「というか、この際、いい加減帰ったらどうなんだ。一ヶ月も子どもが家に帰って来ないと、いくら連絡が付いているからといっても親は不安だろうよ」

二人の言うことは尤もだった。真木自身、うっすらとだが、両親のことを気にはしていた。作業の忙しさを理由に、気がかりなことには気付かない振りをしてきただけだ。不意に見せられた現実、想像以上に重荷となつてのしかかってくる。

「まあ、別に無理に帰れとは言わないけれど」

真木の沈んだ表情を見て、順平は甘いことを言ったが、谷口は少しも許してくれそうにない厳しい目で睨んでいる。何が何でも真木を家に帰そうと決めている顔だ。

「…電柱を抜きましょう」

真木の先手は効いた。しばらくの間を置いてから、二人が声を揃える。

「は？」

「電柱ですよ。B棟とC棟の間に建っている、一本だけコンクリート製のあれです」

「それは分かるんだが、なんでだ？」

「何言っているんですか、谷口さん」

真木は精一杯、憤慨してみせた。

「あれを人力で抜いて見せるって言ったの、谷口さんですよ。順平さんは別に放っておいていいって言いましたが、谷口さんは、ここをきれいさっぱり片付けるのが依頼された仕事なんだから、電柱もまとめて取り払ってやるって言っていましたよね？」

谷口は、救いを求めるように順平を見つめた。重々しく順平が頷く。

「確かに、谷口さんはそう仰っていました」

「順ちゃん…」

恨めしい視線を投げかけられても少しも気にせず、順平は谷口を見据えた。

「俺は本当に、別にあの電柱があのままあっても構いませんよ。あれくらいなら邪魔になりませんし。でも、少し前に谷口さんと宏太くんが『あの電柱を絶対に抜く』と意気込んでいたのは確かです。はっきりと覚えています。谷口さんは酔っ払っていたのかもしれませんが」

「お、おれだって覚えている」

谷口の目が泳いだ。もちろん、二人がそれを見逃すはずはない。敢えてそのことには触れずに、真木は谷口に詰め寄る。

「じゃあ、あの電柱抜きましょうよ。谷口さん、人力で抜くって言っていたし、重機が届かない今が良いタイミングじゃないですか。オレも手伝ってあげますから」

「宏太、お前は家に…」

「ひょっとして谷口さん、オレとの賭けのこと、覚えていないんですか？」

急に泣きそうな顔を作ってみせると、困り果てた顔をした谷口の後ろで、笑いを堪えている順平の姿が目に入ったが、見ない振りをして目を潤ませる。

「谷口さんが電柱を抜く前にオレが家に帰っちゃったら、あの賭けは成立しないじゃないですか。どっちが勝っても男同士の約束なんだから文句はなしだ、ってあんなに熱く言っていたのに。それをこんなにあっさり破る気なんですか？」

泣き出し兼ねない真木の態度に、いよいよ谷口は慌て出した。

「分かった、分かったよ。あれが片付くまでは、帰れとは言わない。一緒にあの電柱を抜こうじゃないか」

小さくガッツポーズをしたのを、順平には見られたようだった。

意に反して電柱に集中することになったにも関わらず、『重機を使わずに電柱を引き抜く』という課題を掲げられた途端、谷口は真剣にその方法を考え始めた。昼食を済ませるとすぐ、腕を組んで難しい顔になった。

「人力でってなると、やはり掘るしかないな」

独り言のように呟きながら、恐らくものすごい速さで頭を回転させているのだろう。虚空を鋭く見つめたまま、視線が動かない。

「掘るって、どれくらい掘るんですかね？」

順平も少し興味があるようだ。カップ麺のスープを飲み干し、谷口に向かって身を乗り出す。

「地上部分が六メートル程度だから、一・五から二メートルは埋設されているだろうな」

「人一人分くらいですか」

真木が想像していたよりもずっと深く、電柱は地中に潜っているらしい。

「それくらいなら、三人で頑張れば、一週間くらいで掘れそうですね」

「簡単に言うな」

谷口が呆れながら真木を睨む。

「何百キロって重さの変圧器を頭に乗っけても倒れないように、埋設箇所の地質はしっかりしているだろうし、土質が弱かったらコンクリートで補強されている。おれらがスコップを持ってきて、さくさく掘れるほど甘くはない」

真木は叱られたかのようにしゅんとなった。

「それに、ただ掘って倒せばいいわけでもない。掘削作業中に倒れられたとして、それが誰かの上に倒れてきたら大惨事だ。十分掘り下げるまでは、倒れないようにどうにか支えていないといけない」

「近くに支持できるようなもの、ありませんからね。ちょっと距離はありますが、B棟とC棟の二、三階部分の壁にダイヤモンドドリルで孔を開けて、そこにワイヤーを通すのはどうです」

「できないことはないだろうが、距離が、な。それぞれ十メートルは離れているから、建物への負荷が大きい気がする。あ、でも、壁の中の鉄筋をうまく通せば強度は保てるかもな」

「ワイヤー、ちょっと麓の土建屋でもらってくる必要がありますね。谷口さんのトラックに積んであるのだけじゃ、長さ足りないでしょう」

「そうだな。明日、明後日にでも買出しついでに寄ってみるか。なに、どうせ二、三日じゃ倒れるほど深いところまでは到達せんよ」

「掘削も、人力だけで行うんですか。岩盤を掘り抜いて立てていたらかなり厳しいですよ」

「そうだな…ドリルは使ってもいいよな、宏太」

二人の会話について行けず、口出しもできずにおろおろと聞いていたため、不意に同意を求められた真木は思わず頷いていた。

「よし、岩盤が出てきたらドリルで頑張ろう」

「それでも結構辛いですけどね」

苦笑いを交わしながらも、二人とも楽しそうだ。ついさっきまでは、少しも乗り気でなかったというのに。ちょっとした疎外感を味わいながらも、この生活がしばらく続くことに真木は安堵していた。

七. 実行(1/4)

地面は思っていた以上に固い。人は未来につながる希望を抱いたとき、あらゆる事態を楽観視してしまうようだ。だるくなった腕を気力で振り下ろしながら、順平は大きな後悔に襲われていた。

この現場の責任者は順平だ。真木がこんなことを言い出したときに、不要だとはっきり言えばよかったのだ。ちらりと真木を盗み見ると、順平同様ぐったりしている。数時間前の発言を、恨んでいるに違いない。谷口は相変わらず無表情だが、うんざり、といった雰囲気漂ってきている。

表面は、ただの茶色い土に見えた。それも十分固かったが、鍬を振りおろせば突き刺さった。十センチ程度の薄い層で、有り余る体力の前では饅頭の薄皮の如く軟弱なものでしかなかった。

その下の三十センチほどの砂利は、掘りにくいが比較的柔らかく、スコップを刺せばその分地面が低くなり、掘っているという実感が湧いて作業もはかどった。

しかし、更に下の粘土層が関門だった。

きめ細かい粒子が隙間なく密集し、押し固められている。頭上から剣スコップを振り下ろしても、二センチくらいしか刺さらない。表面を少しずつ削るようにしか掘り進めなく、一時間で十センチも下がらなかった。

地表面から五十センチほど掘ったところで、辺りがすっかり暗くなっていることに気付き、本日の作業は終了となった。

疲労に支配された体を引きずるように歩きながら、管理棟に向かう。

「でも、半日で五十センチまで掘り下げましたから。単純に考えると、あと一日半で二メートルに到達しますよ」

若者はさすがに回復が早いようだ。努めて明るい声を出した真木に対し、大人二人は世の中の厳しさを滔々と語るしかなかった。まず論じたのは谷口だった。

「一日半じゃない。単純計算でも、あと七日と半日だ」

「え？」

「今日掘り始めたのは五十センチ四方の面積だ。その部分だけを二メートル掘り下げても、電柱は抜けない」

真木は理解できていないようだった。

「地中部が二メートルだとする。倒すためには、その二メートルの通り道を作らないといけない。単純に計算すると、五十センチ四方を二メートル掘るのに二日かかる。掘削にかかるのは、その四倍の八日だ」

「そして、物事は単純には進まない」

谷口の言葉にショックを受け、青ざめているところを、順平が追い打ちをかける。

「もしもこのまま粘土層が続けば、一日一メートル深掘削の速度は半分未満になる。更に、岩盤層が出てきたらもっと時間が費やされる」

「でも、もしかしたら今の粘土層の下はまた砂利になっているかもしれませんよ」

希望を捨てまいと熱意を奮う真木の姿勢が、少し鬱陶しく感じた。完膚なきまでに打ちのめしてやりたくなる

。

「深くなるにつれ、スコップだけでは土を外に掻き出せなくなる。ある程度まとめてから上に持ち上げる、という工程が入り、そちらに労働力を割くとすると、掘削速度はやはり遅くなる」

真木は黙り込んだ。反論はないようだ。

「まあ、気長にやれってことだ」

二人とも同感だったが、言葉として返す気力も枯れ果てていた。

順平が自室に入ろうと鍵を差し込んだとき、背後の気配に気付き振り返ると、闇にとけかかった谷口が立っていた。昨夜も同じ光景を目にした気がする。デジャヴを覚えながらも問いかける。

「どうしました？」

シャワーを浴びてさっぱりし、少しは元気を取り戻したが、全身を襲う疲労は簡単に取れそうになかった。一刻も早く寝床につき、泥のように眠りたい一心だったため、谷口の訪問は少々煩わしかった。

「赤木が…明日、社長が来るそうだ」

余計な情報は一切付けず、谷口はその一言だけを報告した。

「今更、ですか」

もう重機の手配は済んでいる。今となって赤木に何か頼ろうとするならば、せいぜいコンクリートの破片や切断された鉄筋などの産廃処分だろう。それについては仕事を依頼した時点で話してあったため、今になって打ち合わせをするまでもないことだ。

「来られても、特に話すことはないですよ」

「社長は、あるそうだ」

谷口言葉には何か含みがあった。いつもにも増して眼光が鋭く、そこからは憎悪が感じられた。それを放っておくことは出来なかった。

「どういうことです」

「あいつは、順ちゃんのことを強盗犯だと思い込んでいる。現金輸送車から五億円を奪い取った犯人だと」

この前赤木がここに来たときに、疑惑を向けられていることには気付いていた。何を根拠に、と相手にはしなかったが、気にはなっていた。

改めてその件で話したいということは、順平を更に追い詰められるだけの情報を新たに入手した、ということなのだろうか。

「この際だから言うしておく」

谷口の声はどこまでも重い。耳に入る度に心の重石が増えていき、いつか自分では支えきれなくなって、奈落の底へと落ちていくのではないかと恐ろしくなる。

「おれは、あいつから順ちゃんの監視を命じられていた。あいつの魂胆は単純だ。順ちゃんが強盗犯だっていう証拠を掴めば、四億くらいまでなら脅し取れるんじゃないか、そんな期待をしている」

「まあ、五億円の強盗犯だったら、それくらい払うかもしれませんね」

軽口を返したつもりだが、もしかしたら強ばった不自然な声になっていたかもしれない。下手に口は開かない方がいい。

そんな心配をよそに、谷口は少しも姿勢を崩さずに、淡々と続ける。

「おれは、順ちゃんは警察に捕まるようなことをするやつじゃないと思っている」

頷きもせず、ただ聞き流す。

「それに、正直どっちでもいいんだ。おれには関係ない。順ちゃんが黒だろうと白だろうとな」

頷きそうになるのを堪え、無反応を貫く。

「明日の赤木の対応、おれに任せてくれないか」

「谷口さんに？」

意外な提案に、思わず聞き返していた。

「ああ。順ちゃんに会わせる前にちょっと話したいことがある、と伝えておく。それだけ言えば、きっと勝手に勘違いしてくれるだろう。あいつはお気楽なやつだからな」

「別に、俺は構いませんが」

「心配するな、順ちゃんや宏太を悪いようにはしない。二人はこっそりとおれたちの会話を聞いていてくれ」

「それは、聞いていた方がいいんですか？」

谷口は、上を向いてしばらく考える素振りを見せた。そして、突然胸の支えが取れたような、晴れ晴れとした笑みを浮かべた。

その笑顔を観た瞬間、順平は吹雪の真っ只中に放り込まれたように全身が凍りついた。何か、嫌な予感がした。不相応な場面で見せられた笑顔。それがあまりにも清々しく、一点の曇りも迷いもないものだったのだ。あらゆる闇を吹き飛ばす、あまりに眩しい笑みだった。

「ああ、是非、聞いていてくれ」

順平は、何も言えなかった。

白のベンツが砂利をはじき飛ばしながら乱暴に停まるところを、順平と真木はトラックの二台に伏せた状態でのぞき見ていた。アルマーニのストライプスーツを身につけた赤木が、誰の視線を意識してか、横柄に肩をいからせて降りたつ。

初めて赤木に会ったときから、あのスーツ以外の何かを着ている姿を見たことがない。そう気付いてしまうと、赤木に対して憐れみの心が生まれてきて、順平は不思議な気持ちになった。ベンツ、アルマーニ、ロレックスの腕時計。持ちうる防具という防具を全て身につけた上で挑んでいる相手が、順平のような青二才なのだ。

五億円という大金を奪った強盗を捕まえることは、彼にとって一世一遇の好機に違いない。

残念ながらそれも空振りに終わる。そう思うと、順平の中で急激に赤木に対する憐憫の情が溢れ出してきた。

隣で伏せている真木が、真面目な顔で囁く。

「あの人、あの服しか持っていないんですかね」

その無慈悲な言葉に、順平は益々悲しくなった。

七. 実行(2/4)

応接室の窓が開け放たれ、そこから声が漏れてくる。

「ずいぶん変なところにトラックを止めているな。風通しが悪い。移動したらどうなんだ」

「廃材の運搬の関係で、ここにあった方が便利なんですよ」

愛想なく谷口が答えると、赤木はあっさりと興味をなくしたようで、ただ鼻を鳴らしただけだった。

「それで、結城はどこにいるんだ」

カラスと同じ眼差しで辺りを伺い、赤木は獲物を探す。

「今、もう一人若いのと一緒に建物の中に入っていますよ」

そう言って谷口が適当な方向を指差すと、納得したように頷き、

「じゃあ、戻ってこないうちに話を済ませよう。お前の話を聞こうじゃないか。どんな証拠を掴んだんだ？」

革が剥がれたソファに貧相な体を投げ出し、赤木は精一杯胸を張った。その向かいのソファに静かに座り、谷口は赤木の目を見据えた。

「決定的な証拠ですよ」

真木が身を起こしそうになるのを、順平が制する。

「決定的？」

気のない素振りを見せてはいるが、踵を小刻みに床に打ち付けたり、目が忙しく左右したりと、落ち着きの無い様子だ。

「どんな証拠なんだ」

赤木の声は少し裏返った。

ここで谷口は、じっと見据えていた視線を赤木から外し、窓の外を眺めた。不自然に止められたトラックの荷台が、外の景色を遮っている。フレームの角にできた、あるかないか分からないくらい隙間から、順平たちは室内の様子をのぞき見ていた。しかし、応接室からは隙間の向こうに見開かれた眼が揃っていることは確認できないはずだ。そのため、谷口と目が合ったような気がしたとき、順平は思わず身構えた。

「社長は、どうして結城順平が強盗犯だと思ったんですか」

「なに？」

「自分はいつと二ヶ月近く共に生活しています。正直、犯罪に手を染めるような人間には見えません」

谷口の言葉を鼻で笑い飛ばし、

「無限の金が目の前に広がったら、言葉だけの道徳観なんてわらの小屋よりもあっさりと吹き飛ぶもんだ。どんなにお利口さんで礼儀正しく育ったとしても、欲望を人並みに持っていれば関係ないさ」

谷口は何も答えない。じっと、窓の外を見つめている。

「お前の目に結城がどう見えているかは分からないが、東大出身のエリートのお坊ちゃんも、お金が大好きなただの人間だってわけだ。自分の会社がどんなに儲けていても、苦勞せずに手にする大金の方の魅力には囚われちゃったんだな」

順平は舌打ちを堪えた。視界の済で、真木が自分を凝視しているのに気付いたが、無視した。有り難いことに、谷口は赤木の話に全く反応しない。興味のない姿勢を貫いている。赤木もそれを感じたようで、つまらなそうにため息をつくのと、ソファの背に身を投げた。

「シリアルナンバーだよ」

ようやく、谷口が視線を赤木に戻す。

「今回の仕事を請ける際に、手付金として結城から五百万を現金で受け取っている。仕事柄、その内のいくらかを上納しないとイケない。

ウエには顔が広くて博識なお方が多くてな。納めた翌日には電話でお叱りを受けた。やばい金を回すなど」

「やばい金？」

「ああ。札の一枚一枚に番号振ってあるだろう。あれは金を管理しているシリアルナンバーなんだ。何時、どれだけ作られたうちの何枚目だったのが、あれを見れば分かる。新札が銀行に出回るときに記録されているんだ。だから、例の五億円強盗事件の被害金だって、既に手配をかけられているんだ。この番号の金を見かけたらご注意を、ってな」

「その、盗まれた金が結城からの手付金に入っていたってことですか」

「そういうことだ。事件が起きてから約一ヵ月後に結城から例の金を受け取っている。実は結城は白で、例の金が巡り巡って結城の元に届いただけ、という可能性もあるが…まあ、時期を考えるとその可能性は低いだろう」
スーツの裏ポケットからタバコを取り出し、火をつける。谷口が少し嫌な顔をしたが、当然気づくはずもない。

「ただ、可能性は低くてもそう言って逃げられることも確かだ。実際、ウエはこの件で動こうとはしていない。しつぽを掴めばいくらでもゆすり取れる話だったのに、乗ってこないからな。もっと決定的な証拠が必要なんだ」

「なるほど」

吐き出された煙を手で振り払い、赤木を睨みつけ、

「おれが掴んだ決定的な証拠は、金そのものです」

谷口の単調な言葉に、赤木は目を見開き、身を乗り出してきた。

「さっき、社長が言っていましたよね。金のシリアルナンバーから、その金の出処が分かるって。

結城は、ある場所にかかなりの大金を隠し持っています。どれくらいの金額か想像つかないけど、とにかく大金でした」

「それはどこだ」

生涯の敵を見るように谷口を睨みつける。鋭い目つきにも、谷口は少しも動じず、

「C棟の二階の角部屋です。結城は作業がないときは、おれらの目を避けてこっそりそこに行っています。そして、その部屋の床下に隠してある現金を少しずつ持ち出して使っているようです」

谷口の話はほぼ嘘だった。順平はあの部屋に現金など隠していない。しかし、あの部屋を度々訪れていることは事実であり、それを谷口に知られていたとは思ってもいなかった。

「そうか、じゃあ早速そこへ案内しろ」

期待と疑心が混ざっているのか、赤木の口調や表情は、焦っていらついているようだった。癖なのか、激しく貧乏ゆすりをしている。荒い息づかいが窓の外まで聞こえてきそうだった。

谷口はゆっくりと頷いて体を起こそうとし、何か思い出したかのように動きを止める。赤木がそれを気にしないはずはない。異常な動揺を見せる。

「な、なんだ。何か、あるのか」

「社長」

優しいくらいに落ち着いた谷口の声が、室内をきれいに通り過ぎる。

順平は気付き始めていた。普段見せている頑固おやじのような雰囲気が消えた時の谷口は、とんでもない内心を外に出そうとしている。

「その前に、ちょっと案内したいところがあるんです」

「なんだ、それは。どこだ」

この場面が、二人の格の違いをはっきりと表していた。哀れなくらい落ち着きを失っている赤木は、誰がどう優しく見ても、ずる賢く生きられなければ堕ちていく他はない、既に追い詰まった人生だ。谷口の抱える大きな覚悟に照準を合わされた今、逃れようなどなかったのだ。

「社長は、本業の方で場所を探していると思うんです」

「場所だと？」

「ええ。誰にも見つけられずにこっそりと、しかも無限に捨てられる秘境のような場所ですよ」

順平も真木も、何のことだかぴんと来ない。しかし、赤木はあからさまに表情を明るくした。

「絶対に見つからない安全な場所がここにはあるんです。そこにまず案内しますよ。先に金に手を付けると、少々忙しくなるでしょう。それだと、例の場所を案内する機会がなくなるかもしれない。だからまず、場所の方へ行きます。その場所を覚えて頂いてから、例の金の元へ案内します。結城を相手に厄介なことになっても、その場所は死体ですら見つからない安全なところですから」

谷口がどこを指しているか、荷台にいる二人は理解した。真木が死に場所として選んだ崖のことだ。

順平だけが、谷口が普段と違った営業マンのような丁寧な口調に変わっていることに気づいていた。谷口の言われるがままに体を起こし、応接室を出ていく赤木も、荷台から降りてトラックの影へと移動している真木も、きっとまだ谷口の意図を掴めていない。

ただの想像だ。しかし、順平はこれから起こることへの覚悟を決めた。

谷口は、絶え間なく生えてくる雑草の上を、ずんずんと進んだ。一張羅のスーツが汚れないかと心配している赤木は、どうしても歩みが遅くなった。徐々に遠くなる背中に焦りを感じながらも、足元の雑草がうっかりスーツに傷をつけないか気が気でなく、どうしてもそちらに目が行ってしまう。

そのため、後ろからこっそりついてくる二人に気を遣うほどの余裕はなかった。雑草は生い茂ってはいるが、大の男二人が身を隠せるほど密集はしていない。赤木が興味深く辺りを見回さないことを願ってはいたが、今のところその様子はない。

谷口が、気付かれぬ程度に速度を落とす。赤木との距離が徐々に縮まっていく。あと二、三步で追いつく間際に、谷口はいきなり立ち止まった。そして、さっと右に移動する。勢い付いていた赤木は、危うく谷口を追い越しそうになり、足を止めて息を飲んだ。

自分の足の五センチ先は崖だった。はじき飛ばした小さな石が、音もなく崖から飛び出し、ひっそりと沈み、やがて見えなくなる。赤木の顔から血の気が引いた。

「すごいところでしょう」

なにごともないかのように、谷口が囁く。笑顔すら見せている。引きつった顔で、赤木は何度も頷き、無理矢理笑顔を作ってみせた。

「あ、ああ。すごいな、これは」

そっと下を見て、赤木はすぐに目を逸した。目が回りそうな高さだ。

順平は、二人より五十メートルほど離れたところで足を止め、身を沈めた。真木もそれに倣う。この距離では谷口と赤木の声は聞こえない。だが、これ以上近づくと気付かれ兼ねない。

「この下を流れる川は、死の川なんです」

真木がここに来た日にしたのと同じ話を、赤木にもする。

「水の酸が強くてね、魚が住めないのも、動物も寄り付かない。このとおり急峻な地形だから、人間だって入ろうとしない。誰にも知られることのない渓谷です」

「素晴らしい」

目の前の恐怖に慣れたようで、赤木は生き生きとした笑顔で谷口を褒め称えた。

「ここは確かに仕事をするのにちょうどいい。楽園のような場所だ。誰にも知られずに、しかも無限に捨てられる。全国の産廃を集めたって、この深い谷は埋められないだろう。よく見つけてくれたよ。これでどんどん、産廃を受け入れられる。よし、帰ったら早速営業を開始…」

赤木の台詞が途絶えた。きっと、大きな衝撃だったに違いない。谷口の右足が細い腰の真ん中を押し、体を反らせながら、ゆっくりと前方に倒れる。谷口は、蹴り出した反動で後ろに倒れ込み、尻餅をついた。背後から、

何かを叫びながら駆け寄る気配を感じる。獣の咆哮のような耳障りな音が長く続き、徐々に遠ざかっていく。やがて、よそ風に消え入りそうなほどの小さく、硬いものが折れる音が聞こえた。

七. 実行(3/4)

「谷口さん！」

へたりこんだままの谷口の元に、順平が駆け寄る。谷口は、口を固く結び、崖の縁をじっと睨みつけていた。順平がもう一度名前を呼ぶ。谷口は微動だにしない。

「谷口さん」

三回目の呼びかけで、ようやく、谷口の顔が動いた。ゆっくりと、順平のほうに顔を向ける。目が大きく見開かれ、真っ赤に充血していた。少し、潤んでいるようにも見えた。唇が微かに震えている。

かける言葉が見つからず、順平はただ谷口の目を見つめた。

そっと目を逸したのは谷口の方だった。その場に座ったまま胡座をかき、大きく長く息を吐く。細く残った息の終わりは、やはり少し震えていた。横顔は泣きそうであり、笑っているようでもあった。

「やっぱり、何度やっても、慣れるもんじゃない」

声は掠れていた。

「これで、八人目なんだ。方法はみんな違うけど、毎回、腰が抜ける」

「谷口さん」

順平の声も、搾りかすのようにカラカラだった。

「あいつが、あんな顔しなかったら、今日はやらなかった。あんな風に、嬉しそうに笑わなかったらな」

どうすればいいか分からず、順平は微かに頷いた。

「いつだって、迷っているんだ。本当に、やっていいのかって。決心して、絶対に今日やろうと決めて、準備万端で、計画通りに進んでも、やろうとすると体が固まる。こんな奴にも、身内がいたらって思うと、心までも止まる」

「谷口さん、部屋に戻りませんか」

谷口が、順平を見上げる。今まで見たことのない、弱々しい、気の毒な表情を谷口は見せた。

「戻りましょう、立てますか」

順平は、少しでもこの場から離れたかった。一メートルもない先は、奈落の底だ。ここにずっといると、谷口までそこに吸い込まれてしまうような気がして、それが怖かった。

「行きましょう、谷口さん」

谷口の腕を自分の肩に回し、体を抱える。がっしりとして重い体は、なかなか持ち上がらない。本当に腰が抜けてしまったのか、それとも立ち上がる意志がないのか。谷口は抵抗もしないが、自分から動こうともしない。順平がいくら膝に力を入れても、体はびくりとも動かない。

「谷口さん、立ってください」

そう言いながら真木が谷口の体に腕を回してきた。驚いたように谷口が体を震わせる。

驚いたのは、順平も同じだった。谷口が赤木を突き落とした瞬間、真木は赤木が上げた悲鳴以上に大きく叫んでいた。赤木の声が聞こえなくなっても、真木の叫びは続いた。気に狂れるかもしれない、と微かな恐怖を感じながらも、順平は真木を放置し、谷口の元へと向かった。

「ちゃんと説明してください。オレ、このままじゃどうしたらいいか分からないです」

真木の表情は、谷口の体が影になって順平からは確認できない。しかし、口調を聞く限り、ずいぶんとしっかりしているようだ。

「部屋に戻りましょう」

真木の口調は強さを秘めていた。静かな声だが、逆らいがたい。谷口の肩が持ち上がる。自力で体を起こそうとしているようだ。慌てて体を支え直し、順平は膝に力を入れた。今度はあっさりと、体を起こすことができた

誰からともなく、足を踏み出す。覚束無い足取りではあったが、谷口も自ら足を踏み出していた。少しずつ歩を早めながら、三人は管理棟へと向かった。

管理棟に着く頃には、谷口は支えなしでも歩けるほどに回復した。応接室に入ると、自ら奥のソファに身を投げける。満身創痍の疲れを抱き込んでいるかのように、体が重そうに見えた。

寄り添うように真木が隣に腰掛ける。順平は、インスタントコーヒーを作って、谷口の前に置いた。

「ありがとう」

落ち着いた声だった。一息ついてから、谷口はそれに口を付ける。すするように口に含み、飲み下しては軽く溜め息を吐き出す。それを五分ほど繰り返している間、順平も真木も谷口をじっと見守っていた。

大きな溜息と共に、谷口はカップを置いた。そしてまた、息を吐き出す。室内が静まり返る。また長く息を吐きだし、ようやく谷口は声を出した。

「事情は話すよ。納得してくれとか、理解してくれとかは言わない。どう考えるかはお任せだ」

「当然です」

無言で頷いた順平とは対照的に、真木は怒っているように冷たく言い捨てた。その後も何か言いたそうに口をもごもごさせている。

ソファに深くもたれ、天井を見上げ、

「どこから話したらいいものなのか…」

もう二十年近く経つ。正確には、十八年八ヶ月と三日だ。あの日のことは、決して忘れることはない…」

そうして谷口は昔のことを語り始めた。

おれは今でこそ独り身だが、昔は三人家族だったんだ。女房と、息子が一人。優って名前だ。優しくて思いやりのある子に育てて欲しいって、女房がつけた名前だ。

その頃おれは、普通のサラリーマンだった。営業をしていたんだよ。体型もこんなしっかりはしていなくて、むしろ貧相だったね。ここに来た頃の宏太よりもひよろひよろだったかもな。運動は、接待のために覚えさせられたゴルフくらいだったからな。企業を相手に、主に事務用品を売っていたんだ。総合商社だから、客から求められればなんでも売ったね。一番大きいものだと、そうだな、別荘かな？蔵王って、二人とも名前くらいは聞いたことあるだろう？あそこは避暑地だから、別荘も多いんだ。そこに一つ別荘が欲しい、と総合病院の医院長に頼まれて、あの時はたいへんだったなあ。なかなか気に入ってくれないんだよ。でも、新築するほど欲しい訳じゃないって言うんだ。中古の別荘で、しかも眺めがよくて間取りがいいのなんて、そんなに売れ残るはずがない。嫌がらせを受けている気分だったね。でも、最終的には注文とは全く違う物件に一目ぼれして、えらく上機嫌になってまとまったんだよ。まあ、なかなか腕のいい営業マンだったんだ。昔はね。

それがあったから、女房が妊娠したときもその病院で全部面倒見てくれてね。頼めばすぐに往診に来てくれたし、入院時は一番いい個室を用意してくれた。しかもそれがサービスだよ。かえって申し訳なかったくらいだ。優の検診や予防接種も、サービスしてもらった。

優が生まれてからは、本当に幸せの絶頂にいたよ。元々、恵まれた人生だったんだ。仕事は確かに忙しいけれど、楽しかったしやりがいもあったし、同僚も上司もいい人たちばかりだった。女房も、おれにはもったいないくらいよく気が付く優しい女だった。そこに優の誕生だ。幸せだった。本当に、幸せだった。

それからしばらくは毎日が楽しくて仕方なかった。朝、目覚める度に素晴らしい一日が始まったって思ったし、夜寝るときは明日が楽しみで仕方がなかった。赤ん坊っていうのはすごいもんだよな。毎日、少しずつ成長しているのが、目に見えて分かるんだ。体が大きくなるっていう意味もあるけれど、なんというか、どんどん人間になっていくんだ。おっぱいを飲むのも、泣くのもうまくなるし、握力だって付いていく。話しかければ反応するようになって、面白い顔を見せてやると笑うようになる。親バカなもんでさ。子どもが何かするたびに、うち

の子は特別だ、天才だって思うんだ。本当だよ。今でもそう思っている。絶対に、優は天才になったはずだって。

死んだんだよ。まだ二歳だった。正確に言うと、二歳と二ヶ月と十三日目の日にな。

なあ、二歳の子どもなんて、虫も殺せないくらい儂いものだ。人を傷つけるとか、傷つけられるとかも知らないような歳だ。何の因果で、その子は死なないといけないんだ？悔い改めるような罪なんて何もないだろう？それが優の運命だったと言うならば、そんな運命を優に課したやつは、史上に残る連続殺人鬼よりも残虐な狂人だ。

十一月のことだ。三人で初めてするドライブだった。おれの仕事が忙しくて、紅葉狩には連れていけなかったんだ。でも、せっかく晴れの休日だったから、出掛けようって、おれが言い出した。女房は、疲れているだろうから無理なくていいって言ったんだ。家でゆっくりしてって。優はまだ何も分かっていなかったから、外に出たいなんて言わない。おれが、三人でドライブしようって言ったんだ。もう紅葉も終わっているのに、晴れていても寒い時期だったのに、無理を言って二人を連れ出したんだ。

仙台から、北に向かった。寒いついていうのに、北に向かったんだ。北にある温泉郷を目指したんだ。優は温泉に入れないのにな。

行き先も道順も、おれが全部決めた。まっすぐな県道を走っていけばすぐ着くのに、蛇行した道の悪い林道に入ってしまったのもおれだ。

二つ目の峠に入ったときに、写真を撮ろうと思ったんだ。せっかく山の中に来たんだから、自然をバックに女房と優を撮っておこうと思ったんだ。そこで、本道から枝分かれして伸びていた砂利道に入ってしまった。先に何かがあるかは分からなかったけれど、それほど古くない轍がついていたから、入っても問題ないと思ったんだ。

女房が真っ先に、斜面に置かれたブラウン管テレビを見つけた。あっ、て叫ぶもんだから、つい車を止めて覗いてみた。驚いたね。斜面一面に、ゴミが積み重なっているんだ。パソコンのモニターとか、冷蔵庫とか洗濯機とか、タンスやベッドのスプリングまであった。嫌な光景だったな。そこで、すぐに引き返すべきだったんだ。それなのに、おれは先に進んだ。

砂利道は、何が先にあった訳でもなくいきなり途絶えた。先をじっと見ても、ただ木や草が密集していて、車で進むのは無理だってことは分かった。

おれはそのとき意地になっていた。なんでだろうな。何がなんでも思い出を作りたかったんだと思う。久々の、親子三人での時間だったんだ。だから、車を降りて、一人で先を見てくると言ったんだ。女房はもう戻ろうと言ったよ。温泉に行こうって。でも、おれは聞かなかった。車の中に女房と優を置いて、一人で茂みの中を進んだ。

結局、しばらく進んでも何もなかったよ。どんどん茂ってきて、前に進むのもたいへんになって、ようやく諦めた。でも、後ろを振り向いても、茂みしか見えない。さすがに焦ったよ。迷って戻れなかったらどうしようってね。でも、そんな心配はいらなかった。戻り始めてすぐに、前の方で爆音が鳴った。信じられないくらい大きい音だった。風圧で体が後ろに倒れたほどだ。落ち葉や木の枝が前から飛んで来て、視界が遮られた。動けないまま、しばらくへたり込んでいて…

ただ事じゃないって気付いて、そこからは記憶が曖昧なんだ。どうやって車の元に戻ったのか。迷わずに戻れたのか。車の助手席側が大きく凹んでいて、煙が上がっていて、小さい火が転々と燃えていて。

近づいて、く、くるまのなかを覗き込んで、長い髪の毛と、小さい、小さい手が…

七. 実行(4/4)

谷口は頭を抱え込み、体を震わせた。苦しそうな息遣いが狭い室内に響く。真木が、目を腫らして声もなく泣いていた。順平も、鼻の奥がつんとし、頭が熱くなっていた。かける言葉もなく、小刻みに震えている谷口を見つめる。

何度も息を飲み、喉を鳴らしては息を吐きだし、また、息を飲む。

「気付けば、病院のベッドだった。煙を吸って、倒れていたらしい。背中全面に軽い火傷を負ってが、おれは生きていた。

翌日、警察が来た。何をしにあそこに行ったか聞かれた。そのまま話したら、それ以上何も言われなかった。何も教えてくれなかった。おれも、聞けなかった。

全部、気付けば終わっていたよ。親戚が、おれの代わりに進めてくれた。会社の方も、おれが退院してからも、どんなに休んでも何も言わなかった。辞めるときも、何も言われなかったよ。今思うと、おれの周りはみんな優しくったんだな。変に色々言うよりも、ずっと、優しい…」

やっと谷口が顔を上げる。真っ赤な顔に、真っ赤な目。頬が濡れている。滲んだ目で見つめられたとき、順平の胸が大きく痛んだ。

「爆発の原因は、山の中に不法に廃棄されたゴミの山だ。あの場所はだいぶ前から色んなものが捨てられているから、誰が捨てたどのゴミが原因かなんて分からない。でも、だからおれは、赤木みたいな、産廃を不法に処分しているやつが大嫌いだ。この世からいなくなればいいと思っている」

自嘲するかのよう、小さく笑い、

「というか、この世から完全に消し去ろうとしてきた」

深く聞くまでもなく、その言葉の意味は分かった。

「さて…そろそろ、自分から語るのは勘弁させてもらおう。これ以上話そうとすると、余計な記憶まで浮かんでくる。辛くなるだけだ。何か聞きたいことがあるなら答える。でも、おれの昔話は一先ず終わりだ」

「最初から殺す目的で、赤木の下で働き始めたんですか」

迷いながらも、順平は尋ねた。大したことではないが、確認しておきたいことがある。谷口が許す限り、知っておきたいことだ。

「ああ、そうだ。産廃の不法処理をしているやつを情報を集め、そいつに近づく。黒だとはっきりしたら、実行する。そうやってきた。赤木も同じだ」

吹っ切れたようにあっさりとした返事が戻ってきた。恐る恐る、気になっていたことを口にする。

「俺と会って間もないころ、谷口さん、俺に聞いてきましたよね？赤木が違法に解体工事を請け負っていることを、知っているのかって。あの時、もし、俺が知っているって答えていたら、俺のことも殺していましたか」

「殺せたかは分からないが、殺す対象にはなっていた」

なるほど、と言いながら安堵した自分に、順平はこっそりと驚いていた。命拾っていたことに安心したのだ。どうやらまだ、生きていたいようだ。そのことに自分でも気づかなかった。

「それで」

順平が黙ったのを待って、真木が口を開いた。他の二人が一斉にそちらに注目する。真木の目はまだ赤く腫れていた。声がかががらに過れている。でもしっかりと顔つきだ。

「谷口さんは、これから、どうするんですか」

真木の真剣な言葉を、視線を受け、谷口は辛そうに顔を歪ませた。堪えられず、自ら視線を外す。足元に目をやり、言い躊躇っている。

「そうだな…事情はどうであれ、おれは犯罪者だ。強盗なんて生やさしいものじゃない。八人も殺している連続殺人犯だ。許されるものじゃない…」

消え入りそうなくらい、心細い声だ。

「だが、罪を償う、という気持ちにもなれない。あいつらは、死んで当然の存在だ。間違っただけをやったとは思っていない。だから、とてもじゃないが自首する気にはなれない。順ちゃん」

疲れ果てた弱々しい笑みを浮かべて、谷口が順平を見る。

「通報してくれ。逃げはしない」

突然の要望に、順平は戸惑った。困り顔を隠そうとせず、答える。

「別に俺、通報する気はありませんが」

「順ちゃん」

谷口は、子どもを諭すような優しい声を出した。

「おれは大罪を犯したんだ。それを知りながら黙認するのも、また罪だ。今まで築いてきた真つ当な人生を、こんな詰まらない男をかばって崩すようなことはしないでくれ」

「いや、別に真つ当な人生でもありませんし、かばっている訳でもないですし。

ただ、今谷口さんがいなくなったら、この現場が中途半端で滞ってしまいますから」

完全に自分の都合でしかない言葉を聞いて、谷口は呆気に取られた顔をした。

「順平さんらしいや…」

真木も、呆れたように呟く。

「いや、でもだ、やはりこんな犯罪者を見逃す訳にはいかないだろう。確かに現場は一時的にストップしてしまうが、おれの代わりならいくらでもいる。少し探せばすぐに解決できるだろう」

谷口は必死の様相で訴えてくる。益々困った顔になり、順平は小さく唸った。

「でも、逆に赤木みたいなやつのおかげで、工期が延びるのも癪ですから。

というか、谷口さん、ひょっとして俺に通報して欲しいんですか？」

順平の言葉に、はっとした顔をする。真木も同感だったようで、小さく頷いている。谷口は自らの心を振り返ってみた。

「そうだな、ああ、そうだ。きつともう、疲れたんだな。こんなことを続けるのが」

「もう、やらなければいいじゃないですか」

きつい口調を真木が浴びせる。それに対し、谷口は首を振って答えた。

「いつだって、止めようとしてきたさ。人を殺したいと思う時なんてない。でもな」

途端に、谷口の顔から恐ろしいほどの憎しみが溢れ出す。

「恨みとか悲しみとかっていうのは、感情である前に記憶なんだ。感情は落ち着く。どうでもいいことなら、記憶も薄れる。しかし、あんなことは…忘れようとしても忘れられない。辛いとか悲しいとかって記憶は、きつかけもなく、ふとした瞬間に浮かんでくるんだ。消え去ることはない…

一度大きな記憶が蘇ると、心が全部黒く染まる。駄目だって思って、どんどん湧いてくる怒りを抑えようとしても、逃げ場はどこにもないんだ。気付けば、次の獲物を探している。殺す計画を立てて、それを実行している時だけが、冷静でいられるんだ」

生唾を飲み込む音が聞こえた。真木が強ばった顔で谷口を見つめている。少し、青ざめているようだ。

「おれは、本当の殺人鬼なんだよ。またいずれ、誰かを殺す。だから、もう止めて欲しいんだ」

「谷口さん」

分かりました、順平はそう言おうとした。その一瞬先に、真木が鋭く声を上げる。

「ダメです」

今まで聞いた事がないほど強い真木の口調に驚き、二人が揃って振り向く。真木は怒ったように怖い顔をしている。

「約束でしょう、谷口さん。電柱を抜いてください」

「宏太…」

谷口は困って頭をかく。

「悪いな、その、約束は守れそうもない。もう、それどころの話じゃないだろう」

「オレの命がかかった約束ですよ」

真木は少しも譲らなかった。鋭く谷口を睨みつける目から、涙が一筋流れる。

「オレが死のうとしている理由、教えてください。彼女に振られたんです。オレが大学に落ちて、彼女は受かって。大学の先輩を好きになったって言われて、振られたんです。オレは本当に好きで、一生彼女と一緒にいると信じていたのに」

静寂が、室内に訪れる。誰も何も言わない。順平も谷口も、口を開けたまま塞げずにいた。唾然としたまま、言葉も出せない。

「どうです、驚いたでしょう？」

涙をこぼしながら、必死の形相で真木は訴えている。握り締めた拳から、血管がはち切れんばかりに浮き出す。

「宏太…」

呆れ顔ながらも、非常に言い辛そうに、それでも谷口はきちんと真木を戒めた。

「辛いのは分からないでもないがな…そんなことで子どもに死なれた日にゃあ、親御さん泣きたくても泣けないぞ…」

「分かっていますよ、それくらいのこと」

真木は強気だった。顎から雫が滴るほど、目からはとめどなく涙が溢れかえっているが、口調は強かった。谷口は、辛抱強く穏やかな姿勢を保った。

「それにな、宏太、ちょっと前に話しただろう。お前、罪は罪、事情はどうあれ罪は許されるべきじゃない、そう言っていたじゃないか。綺麗事だって世の中は言うかもしれないけれど、おれはそれが真つ当だと思うし、守られるべき考えだと思っている。少なくとも、お前にはずっとそういう正しい考えを持っていて欲しいんだ」

「でもね、谷口さんは酔っ払っていて覚えていないかもしれませんが、男同士の約束を、オレとしたんですよ」

真木は少しも譲らない。谷口の言葉を全て聞き流し、すかさず反論する。

「約束の内容は、こうです。谷口さんが電柱を抜いたら、オレは自殺を諦める。谷口さんが電柱を諦めたら、オレは自殺する。

だから、もし谷口さんが電柱を見捨てて罪を償うって言うなら、オレはあの崖から飛び降ります。死ぬ理由として下らないと、二人とも思っているでしょう。でも、男同士の約束ですから。オレは死にますよ、絶対に」

「そんな約束を…」

谷口は何も言い返せなかった。きっと、そういう約束を真木としたのだろう。そう言われると、そんな記憶がうっすらと蘇ってくる。半分どころか、完全に酒の場の冗談でしかなかったのだろう。しかし、こうやって事実として主張されると、軽々しくなかったことには出来ない。だから、黙り込むしかなかった。

「もし、どうしても谷口さんが、警察に捕まって裁判にかけられて刑務所に入りたいて言うなら、それは電柱を抜いてからにして下さい」

完全に、真木の勢いが勝っていた。言い負かされて押し黙るしかない谷口の様子を見て、順平は思わず笑ってしまった。

「じゃあ、電柱ついでにこの現場も終わらせて欲しいですね。八人殺していたら、まあ死刑も十分ありえますし、逃れてもけっこう長いこと入っているでしょう。それに比べたら、あとほんの数ヶ月で終わる現場に付き合うくらい、大したことじゃないですよ」

「二人揃って、勝手なことばかり言って…」

恨めしそうに若者二人を睨みつけていたが、

「一番勝手なのは、谷口さんでしょう」

ばっさりと真木に言い切られ、しょんぼりと小さくなる。

「じゃあ、作業に取り掛かりましょうか」

順平は事務的な口調で二人を促した。

八. 重機(1/2)

昨日に引き続き、固い地面に鍬や剣スコップを振り下ろすという過酷な作業を、三人とも一言も発さずに取り組んだ。あれだけのことがあった直後だ。場は一先ず収まったかのように見えたが、各々が胸にする思いは簡単なものじゃない。どんな会話を振っていいのかも掴めず、互いになんとはない気を遣った結果、沈黙を守り続けることになった。作業の切り上げどころも見失い、気が付けばすっかり日が落ちる時刻になっていた。

夕食は、真木が自ら進んで作ることにした。もちろん、谷口に気を遣ったのだ。当然だが、人を殺すという感覚が真木には理解できない。根拠のない想像から、刃物を持つのは辛いのでは、と思った。料理など、学校の授業を含め、人生で五回ほどしかしたことがない。包丁を手にした瞬間、この数年間味わったことのない不思議な恐怖を感じた。人参を一本切り終えた段階で、肩が張って痛みを覚えた。

「宏太くん、手伝おうか」

順平が肩越しに、真木の手付きを見ていることにも気づいていなかった。少し、体の緊張が解ける。

「是非、お願いします」

プレッシャーと空腹の増幅に襲われていたため、真木は少しの迷いもなく順平の申し出を受け入れた。

真木が肉を炒めている間、順平が野菜を切る。今夜のメニューはカレーライスだ。真木が作れる唯一のメニューだった。次々と野菜が切られ、鍋に放り込まれていく。順平の横顔を盗み見たが、特別得意げにしているわけでもない。

順平さんは、やっぱりすごい。

真木はこっそりと、順平への憧れを強めていた。

少々肉が焦げたカレーライスを、谷口は旨そうに食べてくれた。おかわりをしたほどだった。

「宏太は料理がうまいな」

何度もそう言っただけは、がつがつと口に放り込んでいく。順平が手を貸したことは誰も言い出さなかったし、言うまでもなく谷口はそのことを知っていた。それでも、真木を褒めることを止めようとしなかった。

この夜から、真木は勉強を始めた。巻き込まれたのは、またもや順平だった。

「順平さん、東大出身なんですよ」

「まあ、そうだけど…」

赤木がちらりと口にしていたことを、真木はしっかりと聞いていて、覚えていたのだ。勉強なんてほとんど覚えていない、専門は文系だから、と順平は逃れようとしたが、真木のしつこさに諦め、夜に一時間の約束で家庭教師を引き受けた。これで、母親に伝えていた『東大生の友達に教わっている』という嘘が、少し事実に近い。

性格なのだろう。面倒臭そうにしていた順平だが、いざ勉強を教えるとなると、真木が理解するまでみっちり教え込んだ。分かった振りして真木が聞き流そうとするのを敏感に気づき、真木が半泣きになるまで問い詰めた。一時間、という約束の時間も、簡単にすぎることとなった。

朗報が飛び込んできたのは、真木が食事を作るようになって四日目の朝だった。巨大オムレツを作ろうと卵一パック分を叩き割っている最中、部屋の鍵が開く音がし、そちらを振り返った。電話を片手に持った順平が、抑揚のない表情のまま、

「明日、重機が届くことになった」

あまりに普段と変わらない調子だったため、

「ふーん、そうですか」

真木は一度、順平の言葉を聞き流した。卵の片手割りに挑戦していたため、それどころじゃなかったのだ。

十個目の卵をボウルの縁に叩きつけると、殻の隙間からとろりとした黄身が流れ出る。片手割り、今日は修得

できず。がっくりと肩を落とす。殻がボウルの中に入らなくなっただけ、少しは進歩している。そう思い、気を取り戻し、菜箸で軽快に卵を混ぜ始めた。

「午前中にはここに到着するそうだ。今日も電柱掘るのは止めておこうか」

「え、なんでです？今日は掘らないんですか？」

「明日来るなら作業を進めなくても、あまり進捗に影響しないだろう」

「明日、何か来るんですか？」

「今のところ、クレーンとショベルカーとブルドーザーが来ることになっている。電柱を抜くのなら、クレーンだけで済むだろう。他に必要なものが出たら、また頼まれてくれるはずだ」

ここでようやく、真木は順平との会話に追いついた。手を止め、勢い良く順平を振り向く。

「ついに、来るんですか?!」

「ああ、明日の午前にはな。それより宏太くん、その卵の量は多過ぎるんじゃないか」

「ちょっと順平さん、もっと盛り上げて言って下さいよ。オレ、リアクションしそびれちゃったじゃないですか」

油の張ったフライパンにボウルの卵を全て流し込むと、真木は体ごと順平の方を向いて、

「じゃあ、今日が記念すべき最後の手作業になるんですね」

両手を強く握り締めながら、目を輝かせている。

「オレ、締めに相応しい働きしますから！」

「いやいや、どうせ人力で頑張っても大して進まないから、重機が来るまで仕事は休みにしてもいいんじゃないかと思ってるんだ。…卵、きちんと見ていないと焦げるからな、目を離さない方が」

「何言っているんですか。最後だからこそ、しみじみと手仕事をしましょうよ。明日になれば重機が届いてさくさく仕事が進むっていうのに、手のひらのマメを潰してツルハシを振り下ろす、っていう無駄な努力をするからこそ、文明の利器の有り難味が分かるんじゃないですか」

「宏太くん、取り敢えずフライパンを見て」

「なんだ、焦げ臭くないか」

応接室のドアを叩くように開け、谷口が慌てて出てきた。そして、真木の手元に目を止めると、その目をかっくと見開き、真木をはじき飛ばさん勢いで突進してきた。

「バカヤロウ、煙上がってんじゃないか！」

火を止めると真木から菜箸をひったくり、焦げ付いた上側を素早く皿に開けると、力任せに鍋底を削り始める。廊下にはだいぶ煙が立ち込めていたが、それに全く気付いていないようで、真木はのんびりと谷口に情報を伝える。

「あ、谷口さん。明日の午前に重機が届くそうですよ」

「焦げは熱くて油が馴染んでいるうちに落とせ！冷めるとこびりつくぞ！」

全身の力を菜箸を持った手に込めて、目にも止まらぬ速さでその手を前後に動かす。黒い焦げカスが、菜箸の先端が触れた途端、鍋底から弾かれ、シンクや壁へと飛び出していく。

谷口から熱いオーラを感じた二人は、言葉もなくその様子を見守るしかなかった。

管理棟を一大危機から救うことに全力を投じ、どうやら危機が去ったらしいと分かり、谷口はようやく真木の言葉を受け止めた。

「なに？重機が？」

鍋底を削る右手の動きは休めず、目を怒らせたまま谷口が振り向く。あまりの形相に、他の二人は思わず身を震わせて息を飲んだ。

「本当なのか、順ちゃん」

既に光り輝く底面が現れている鍋底を徹底的に磨きながら、谷口はいつもどおりの気難しい顔に戻った。

「ええ、俺の古い友人が持って来てくれることになっています」

「そうか…」

手の動きは止めず、谷口は暗い廊下の天井をちらりと見上げ、寂しそうに呟く。

「じゃあ、剣スコップで地面と向き合うのも、今日で終ってわけか…」

「そうなんですよねぇ…」

しんみりと感傷に浸っている二人を眺めながら、順平は背中に負い被さるずっしりとした疲れを感じていた。今日はもう、部屋に閉じこもって色々と所用を済ませる心づもりだったのだ。この空気では、疲れた肉体を酷使してまでも、しなくてもいい無駄な作業を行うことになりそうだ。

この二人と一緒にいることを、初めて少し後悔した。

八. 重機(2/2)

C棟の二階の角部屋は、午後になると西日が差し込み、真昼よりも暑くなる。沈んでいく太陽が一面に広がる木々を赤く染める。陽の光が作り出す景色の神々しさは、山も海も変わらない。感嘆のため息が漏れる。こんなにも美しい景色の元にも、下らない諍いが澱んでいる。世に溢れる憂いは、重く息苦しいものようであり、どれも押し並べて単純だ。人の生活に沿って派生するもので、例外はない。そういえば、思い悩むという行動は無意味で且つ無生産だ。答えというのはあまりにも単純なものなのだから。

ドアが開く音がし、振り返る。谷口と真木が呆れたように笑っていた。

「やっぱりここか」

「一人だけさぼって。ずるいですよ、順平さん」

靴についた泥汚れを丁寧に落としてから、二人は順平が立つリビングまで入ってきた。

「いい眺めですね」

窓際に立った真木の顔が、夕日色に染まる。谷口がただ頷きながら、更にその隣に立つ。男三人に陽の入り方を塞がれ、室内は途端に暗くなった。三人とも、森の向こうに沈もうとする赤い太陽を、じっと見つめている。

「俺がこの部屋に出入りしているって、ばれていたんですね」

谷口が微かに頷いた。

「三週間ほど前の日曜日に、順ちゃんがC棟に入っていくところを見てな。簡単に崩れるような建物じゃないが、これだけのポロだ。危ないと思って、あとをつけた。悪かったな」

順平は首を振る。

「別に、隠していたってわけでもないですから。このとおり、何があるわけでもないですし」

がらんとした室内にもものの温かみは全くなく、寒いと感じるほどだ。ただ、黄ばんだ壁紙に残った落書きを消した跡だけが、人肌の余韻を残している。

「俺の母親は、生まれてから高校に進学するまでをこの宿舎で過ごしたんです」

順平は、突然話した。話そうと決めるときに話さないと、機を失うだけでなく話す気力も失われると気付いたからだ。二人とも、それを邪魔しようとは思わないらしく、じっと続く言葉を待ってくれた。

「俺の父親だと言われる人と最初に出会って、そしてその男を好きになった場所が、この鉱山でした」

二人は東京で再会した。スーパーマンのように女子の人気を集めていた父親は、大人になっても昔の期待を裏切らない、頭が切れて容姿が整った男に成長していた。

「俺が生まれて間もなく、父親はいなくなりました。失踪したそうです。母親は、少しも父親を責めませんでした。たぶん、俺がいたからだと思います」

幼い頃からの記憶をたどるのは、順平にとって苦痛でしかなかった。一瞬一瞬は素晴らしいものが多い。順平はいつでも優秀な子どもだったし、母親はそんな愛息子に惜しみなく愛情を注いでいた。その愛情が、自分に向けられているのだと信じていられれば、未だに幸せな人生しか存在していなかったに違いない。

「母親が言うには、俺は父親にそっくりだそうです。顔も、体型も、声や姿勢も。成長するに連れて、どんどん似ていったそうです」

だからこそ、母親は再婚相手と離婚した。はっきりと指摘したことはないけれど、心当たりがあった。十歳ほどのことだ。順平は周囲より成長が早く、背が高いばかりか声変わりに差し掛かっていた。

ちょっとした、ささやかな事件が起こった。家族で買い物に行った際に、順平がまだ乗っていない内に、車が発進してしまったのだ。家族はすぐにそのことに気づき、十メートルも進まずに順平を拾ったのだが、順平は少し怒ったふりをして、母親に文句を言った。

「俺のこと、忘れちゃったのかと思った」

寂しそうに、そう言った。

順平に意図は何もなかった。しかし、この言葉が原因となって、母親は消えた前夫の幻影を順平の中に見るようになった。

「母さんに褒められるの、最初は純粹に嬉しくて。褒められたくて、何でも頑張ったんです。でも、中学入ってすぐの中間テストで、数学が八十点くらいだったんです。今まで百点しか取ったことなかったから、怒られるかな、って思って落ち込んで帰ったんですけど…そうしたら、母親に言われたんです。『お父さんはこんなミスをするような人じゃなかったから、あなたが少し調子悪かっただけよ』って。

何か変だと、ようやく気づいたんです」

母親は昔から、順平のことは一つも褒めていなかった。何を頑張っても褒められるのは『父親にそっくりな子』だったのだ。

「それでも、俺は頑張ったんですよ。あいつの血を引く子どもじゃなくて、俺のことを褒めてくれる日が、いつか来るって信じたんです。だって俺は、母さんの子どもなんだから」

でも、未だにその日は迎えていない。学生時代に友人と興した会社が、三年前に年商二億円を超えたことを報告したときも、おめでとう、の後の一言は、『お父さんも商才のある人だったわ』という病的なものだった。

そう、順平の母親は、愛する夫に捨てられて以来、ずっと病んでいるのだ。病むことが、混沌と続く恨みや怒りから、順平と自分自身を逃す唯一の方法だったのだろう。そして、順平のあらゆる努力が母親の逃避を精一杯支持していたのだ。

太陽の頭の先が、最後に強烈な光を放ち、森の奥に沈んでいった。ぼんやりとした薄い闇が、室内に訪れている。順平は、改めて薄暗い室内を見回した。

「この部屋、本当になにもないですね」

人が住んでいた気配までもが、消えようとしている。まだあどけなさの残る二人の子どもが、それぞれお気に入りの本を夢中になって読んでいる。そんな幻覚が目の前に浮かび、よそ風に吹き飛ばされ、薄れていく。

「ああ。本当に、何も無いな」

谷口はちらりと周囲を見ることもなく、既に部屋の隅々まで把握しているようだった。

「で、一体ここに、何があるんだ？お袋さんの思い出の品とか、そんなものがあるのか？」

谷口の矛盾した台詞に、思わず苦笑する。そして、その言葉こそ現実を正しく捕らえていることに、気づいた。

本当にそうだ。この部屋には、何もない。

「俺、何やっているんだろうなあ」

呟かすにはいられなかった。二人の驚いた表情は目に入っていたが、それを気にしていられないくらい、自分が滑稽に思えてきた。笑い声まで出てくる。

「なんで、こんなこと、やっているんだろう」

「ちょ、ちょっと、順平さん、今になってそんなこと言われても…」

真木が言葉の途中で口をつぐんだのは、おかしそうに笑っている順平の両目から、大河の如き涙が滴っていたからだ。初めて見る順平の涙だった。

泣くのは何年ぶりだろうか。記憶の限り、泣いたことはない。母親がよく泣く人だった。だからこそ、順平は例え人目がなくても泣かないように堪えていた。泣いてしまったら、ふわふわと落ち着かない血の繋がったあの男に、負けたような気がするからだ。

涙は勝手に出てきた。自分の意に反して出てきたものだから、止めようと思っても止まらない。自らの馬鹿さ加減に大笑いしたいというのに、涙と嗚咽が止んでくれない。

「母さんがね、言ったんですよ。鉾山に住んでいた頃に、戻りたいって」

それは、母親が一度だけ漏らした独り言だった。何度も言い聞かされたように思っていたが、よくよく思い返せば、一度しか聞いていない。自らの歪んだ意識の中で、それを何度も反復させていたに過ぎない。

「冗談じゃ、ない。俺が、息子が、こんなに頑張っ、て、今を良くしようと、しているのに。昔に、戻りたい、なんて」

そう思っていた。母親がどんな気持ちで呟いたかも確かめず、勝手に嫉妬を募らせていた。戻れる場所は、今の家族の元以外にはないことを、分からせてやりたかった。

「だから、壊したかった」

闇に侵食され、順平の表情は分からなくなっていた。

九. 幼馴染(1/3)

翌朝の空気がやけに清々しく感じたのは、どの理由によるところが大きいのだろう。応接室のカーテンと窓を開け放ち、大きく息を吸い込みながら、真木はぼんやりとした頭に喝を入れた。

早起きにもすっかり慣れた。寝ぼけながらも朝からがつつりと食事を摂ることに体は順応した。今では空腹を抱えながら、三人分の食事を用意するまでになっている。まだ三日目だが、母親に対する感謝の気持ちは十分重く成長していた。家に戻ったら、週に一回、いや、一ヶ月に一回くらいは代わりに朝食を作ってあげようと思っている。

建物の中は、静まり返っていた。さほど早朝でもない。三十分後にはいつもの朝食の時間になる。

以前は一番の早起きだった谷口が、最近なかなか起きて来ない理由を、真木だけが知っている。ひよっとすると、本人も知らないかもしれない事情だ。

谷口は、自分の被害者を一人増やした日から、毎晩ひどくうなされている。突然謝ったり、呻いたり、叫んだり、静かかと思えば泣いていた。大人しく寝入るのがほぼ明け方であるため、すっきりと起きてこれないようだ。

最初の一晩は、泣きながら謝る谷口の声を聞きながら、真木も共に泣いていた。しかし、翌晩には臆げな意識の中で谷口の呻き声を聞いたものの、睡魔の方が強くなっていた。慣れというものの怖さを強く実感した。

順平も、昨日のことを思えば今朝は仕方がない。日がすっかり暮れ、順平がどんな表情をしているのかも分からないまま三人で管理棟に戻り、そして順平は夕食も摂らずに自室に籠ってしまった。今のところ、ドアの向こうから物音はしてこない。

二人が今どんな気持ちなのか、真木には想像できない。二人の事情を知ってから、自らの生い立ちが平凡であり平穏であったと自覚するようになった。そのため、二人の心境を探ろうとしても想像が追いつかないし、想像で決め付けていいほど簡単なことではないと分かっている。

順平がこの廃墟を壊したい気持ちは、伝わらないでもなかった。しかし、理解はできないし、正しいことをしているのかも判断付けられない。

谷口の気持ちには十分共感した。しかし、正しい方法ではないことは確かだ。かと言って、何が正しい方法なのか、谷口がこれからどうすることが正しいのか、真木には分からない。

だから、真木はただ見聞きしたことだけを真実として受け入れることにした。それ以上のことを考える必要はない。そういうことは、考えたい人だけが考えればいいことだ。そして、今の自分がすべきことは、三人分の朝食を用意することである。このことを把握していれば今は十分だ。

キャベツと人参の野菜炒めは、小学校の家庭科の時間に習った記憶がある。あれ以来キャベツの葉をむいたことはないし、人参を薄く切ったこともない。味付けは、塩を使った記憶はあるが、塩だけではなかった気もする。記憶を辿り、すぐに限界に到達した。取り敢えず、キャベツの芯を切り落とす。こういうことも、考えていても仕方がない。行動を起こすことが、正解への第一歩だ。

二人の事情を知ったことだけが、晴れ晴れとした心の源ではなかった。何と言っても、今日は待ちに待った重機の搬入日である。すっかり冷えた野菜炒めと目玉焼きを、熱々のご飯で誤魔化して食べながら、轟音が近付いてくるのを真木は心待ちにしていた。

岩になり損なったような地面を手作業で削り取るのは、拷問のようで気が狂いそうだった。丸一日、筋肉が悲鳴を上げるのも無視してスコップを振るい、その結果が目で見分かるかどうかという程度の深度の変化だ。やる気が失せるばかりか、虚しさまで感じる。

重機が届くと分かった昨日の時点で、もうスコップやツルハシとはお別れしたかった。たった一日人力で頑張ったところで、重機をもってすれば作業所要時間に影響はないだろう。

そんな本心を偽ってまでも、昨日一日手作業に取り組んだのは、谷口に氣遣ってのことだ。何か打ち込めることがあれば少しは氣が紛れるだろうと思ったのだ。夢の中ですら、あれほどまで追い詰められているならば、頭がよく動く日中の苦惱は、想像するに耐えられない。何もすることがないとなれば、恐らく自分を傷つけるようにしか動かないに違いない。

重機が来れば来たで、谷口の仕事は増える。オペレーターとしてフル稼働になる。そして、この現場の作業も一気に加速する。氣がかりなことが一気に解決されるのだ。他の一人がもそもそと食事を進める中、真木には希望の兆しが見えていた。

「そういえば、重機が九時には到着するそうさ」

真木の期待に応えたかのようなタイミングだった。

「九時っていったら、あと一時間もないじゃないか」

腕時計を見つめてから、谷口は茶碗の中身を口の中に掻き込んだ。

「何が来るって言ったっけな、順ちゃん。クレーンと、ショベルカーと…」

「ブルドーザーです。コンクリ片を集めるのに役立つかと思ひまして」

順平の様子はいつもと変わらない。昨日、幼稚園児のように泣いていた姿はひょっとして夢だったんじゃないかと思うほど、今は落ち着き払っている。

「それだけ来れば、ここの解体もあつという間に終わるな。運転出来るやつも一緒か？」

「一応、一人来ることになっています。重機が三台に対し、オペレーターは谷口さんともう一人ってことになって、一台遊びが出ますが、それは仕方ないかと」

「三台一気に使う必要もないだろうしな。クレーンとショベルを同時に使えば、それでどうにかなるんじゃないか」

言葉少なく打ち合わせを終えると、谷口はさっと立ち上がった。

「じゃあ、ちょっとA棟の足場をどかしてくる。二人とも、めしが済んでからでいいから来てくれ」

返事も待たずに、部屋から飛び出していく。谷口が管理棟の扉から飛び出した音を聞いてから、真木は氣になっていたことを順平に尋ねた。

「あの、赤木って人がいなくなっても、特に支障ないんですか。道具の手配とか」

谷口の前では怖くて口に出せない名前だった。順平も、恐らく氣を遣って触れないようにしているのだろう。三人でいるときは、まるで最初からそんな人物は存在していなかったかのような会話しかしない。

「そうだね、俺の事務作業がちょっと増えたくらいかな。でも、元々きちんとした会社じゃなかったようだし、役所に届け出すべき書類も出していないし、作業員として雇っている谷口さんの給与処理もしていないようだし、機材持って来いって言っても持ってきたことはないし、正直なところ、あの人がいようといまいとあまり関係ないね。いや…」

自分の台詞を噛み締めているのか、しばらく黙り込み、真面目な眼差しを真木に注ぎながら、

「あの人がいない今の方が、仕事はやりやすくなったかもしれないな」

悪気は全くないようだ。順平にしてみればただ、冷静に考え直して、事実を述べただけに過ぎないのだろう。順平らしい、感情を交えない正しい答えなのだろうが、その凍てつく冷たさに、真木は少し氣が引けた。

「あ、でも、順平さんはあの人にお金払っていたんですね？手付金として」

「ああ。五百万円ほどな。あれは諦めるしかないな」

悔しそうな顔をすると思いや、やはり順平は覚めていた。そして、驚くのは真木だった。

「諦めるって…五百万をですか？」

「本人死んじゃっているしな。一応、契約書は交わしているから取り戻せなくはないけれど、相続人を探して、その人相手に払い戻しの請求をして、っていう手間も面倒だ。なによりも、俺らとあの人の接点を、進んで周りに説明するのは危険だ。俺らが赤木の名前を他所で口にしなければ、あいつは行方不明となって、あやふやな

まま世間が忘れ去ってくれるかもしれない。でも、この先、万が一にでも谷底の遺体でも見つかったら、面倒、では済まされないことになる。亡くなる直前に俺らと接していたことは、調べれば簡単に分かるだろうし。

でも、五百万を諦めれば、誰も赤木の体を谷底で探そうとはしないだろうし、俺たちとの関係も知られずに済む」

真木は納得した。確かに、五百万を諦めることこそ得策なのだろう。しかし。

「リスクと比較しても、五百万円を簡単に諦められるって、順平さん、金持ちなんですね」

育ちが良さそうだとは思っていたが、それと財産とは必ずしも比例しない。

「谷口さんにも、この先の給料はきちんと払うんですよね？」

「ああ、もちろんだ。今まで赤木がピンハネしていた分も含めて、谷口さんにはきちんと払わないとな」

「五百万円損して、人件費もこれまで通り払って、重機も入れて、新しくオペレーターも入れて。まだまだ出費は出ますよね？産廃処分もどこか会社を見つけないといけなくなったし」

真木は、わざと疑い深い顔を作った。睨むように順平を見上げる。その目を避けるように、順平が目をそらす。

「順平さん、本当に強盗やっていないんですか？」

「やっていないよ」

まるで予想していたかのように、質問に対する答えが早かった。迷いも間髪もなく断言する様子が、かえって真木の疑心を深める。何もない壁を見つめたまま、順平は言い訳を始めた。

「もう知っていると思うが、俺は経営コンサルタント会社の代表のうちの一人だ。年商三億は軽く超えている、勢いのある会社だ。強盗の被害額は五億と聞いたけれど、それくらいの金額ならば、数年の役員収入で十分稼げる。犯罪に手を染めるほど、金には困っていないんだよ」

その説明は尤もだった。大金を目の前にすると人は変わるというけれど、果たして五億という金額が、順平の理性を奪うほどの大金と言えるのだろうか。

何よりも、順平がそんなことをしでかす人間とはやはり思えない。しかし、疑惑を拭いきれない強い証拠がある。

「赤木が、言っていましたよね。強盗事件の被害紙幣と同じシリアルナンバーのお札が、手付金に紛れていたって。そのお金は、どう説明するんですか」

どこでもないところにやっていた視線を、窓の外へと移動させ、今日の天候の良さを喜ぶように、目を細めた。そしてそのまま、季節の挨拶を交わすように呟く。

「金は、天下の回りものっていうからなあ」

そのあとに続く言葉を、真木はしばらく待った。時計の秒針が一刻みずつ進み、一周する音をじっと聞きながら、静かに待った。

「…それだけですか」

「他に言うべきことが、何かあるのか？」

おどけてもなく、怯えてもない。相変わらず、感情が掴めない。あからさまな溜め息を一つ付き、真木は食器を持って立ち上がる。

「まあ、別にいいんですけどね。どっちでも。何が変わるわけでもありませんし」

順平は、真木の言葉をなんとなく聞き流した。反応する必要はないと判断したようだ。真木に続いて、順平も食器を手にして体を起こす。

「あ、皿洗いはオレがやっておきますから、谷口さんの方を手伝ってあげてください」

順平の手から食器を取り上げ、仕草で急かす。

「分かった。頼んだ」

悠々と廊下を進んでいく順平の姿からは、少しの動揺も焦りも見つけられない。本当に、昨日の出来事は幻だ

ったかと自分の記憶を疑うほどだ。

順平さんには、敵わない。

本気で疑っているわけではなかった。ただ、少しだけ順平の人間らしいところを見たかったのだ。疑われることに対する怒りとか悲しみとか、覚えのない罪を責められる焦りとか、そう言った、昨日の涙のような隙を見せて欲しいだけだった。しかし、真木の完敗だった。

順平さんは、もう大丈夫だ。

洗剤を泡立てながら、平穏な生活の再来を密かに喜んだ。

九時を少し過ぎ、三人ともそわそわと落ち着かなくなったころ、遠くから近づいてくる空気の重低音を聞きつけ、揃って車道へと出た。

静かな山の中を、不穏な唸り声が響く。その源が、自然とは相反する存在であることは確かだ。息を飲んだまま道の彼方をじっと見つめる三人は、近くの木々から鳥が一斉に羽ばたくのに釣られ、空を見上げた。

すぐに視線を戻した時には、列をなす巨体が目に飛び込んできた。土埃を上げながら、三台のトラックが向かってくる。それぞれ荷台には黄色く目立つ重機が乗っている。その姿を見て、真木はなぜか馬に乗った武士を連想した。時代劇における正義のヒーローは、きっとこんな風に登場するのだろう。颯爽と風を切ってこちらへとやってくるその姿は、心強く頼もしい。

ぼんやりとした憧れを抱き、将来の夢をトラック運転手にしようとした真木だったが、三台のトラックから次々と降り立った面々を見て、硬直した。

二人は坊主頭、サングラス、作業着の袖からちらりと覗く彫り物。スーツを着ていないだけで、ヤクザにしか見えない。

もう一人は、金髪をオールバックにした若者で、こちらもサングラスをし、作業着の裾や襟元からは、やはり彫り物がちらりと見える。こちらもチンピラにしか見えない。

その金髪が片手を挙げ、声を張り上げる。

「よお、順ちゃん。遅れて悪かったな」

手を上げ返す順平と金髪男を交互に見ながら、真木は啞然としていた。

「順平さん、あの人と知り合いなんですか」

「ああ、幼馴染だ」

金髪男が無邪気な笑顔を見せながら駆け寄ってくる。それに合わせて真木は少し後ずさった。

九. 幼馴染(2/3)

龍一が作る満面の笑みを見ていると、裏も表も感じられず、安心する。そして、本当に同じ歳なのかと相手を疑ってしまう。

「久しぶりだな、龍」

「おいおい順ちゃん、三か月前に会ったばかりじゃないか。忘れちゃったの？」

いつもどおりの軽い口調も、聞いていると安心する。

「俺の感覚だと十分久しぶりなんだ。元気そうだな。よかった」

「おお、元気よ。俺はいつだって元気だ」

そう言って意味もなく大笑いする。

順平は、龍一の後ろにそびえ立つ三台のトラックを見上げた。近くでみると、首をそらせないと全てを見渡せない。自分がいきなり五歳児に戻ったような錯覚を覚える大きさだ。視線を龍一に戻しながら、途中目に入った二人の男、トラックを運転してきた二人が足を肩幅に開いて後ろに手を組み、微動だにしないまま佇んでいる姿は見えていない振りをすることに決めた。

「これ持ってくるの、たいへんだっつろ」

「…まさか順ちゃん、俺が土浦から運んできたと思っている？」

「違うのか？」

龍一の答えは予想外だった。目を丸くする順平を見て、龍一は嬉しそうに笑う。

「順ちゃんは相変わらず素直だよなあ。さすがの俺も、常磐道から東北道までこの重さのを三台引き連れて走ったりしないって」

そうは言うが、龍一ならやりかねないと思っているから聞いたのだ。黙って視線を送り続けると、龍一は笑いを一段落させた。

「普通に、この麓にあるちょっと大きめの建設会社で借りたいよ」

「本当か」

驚きだった。余所者に過敏な住民だ。しかも順平が取り組んでいるのは、地元が愛する歴史的建造物の解体工事、しかも無認可だ。正攻法で行って説得できる状況ではない。

「どうやって」

順平の問いに、意味ありげな笑みを見せ、

「まあ、色々と言得の仕方があるってことだ」

ただ笑うだけで、それ以上を語ろうとはしない。当然、順平は納得できない。

「龍、この現場での仕事は許可がおりていないんだ。役所で断られた。地元住民の思い入れが強い場所らしい」

それなのに、なぜ建設会社が協力したのか。そう問おうとしたところ、何かを思い出したように、あ、と龍が声を上げた。

「そうそう、忘れるところだった。今の順ちゃんの話で思い出した」

作業着の胸ポケットを探り、四つに折りたたまれたA4サイズの紙を一枚取り出した。

「これ、お土産」

順平は戸惑いながら渡された紙に目を落とし、その目を見開いた。

表題に『解体工事許可証』と記されてあるそれは、間違いなく、この現場における解体工事を許可した書類だった。町長の印鑑が押されてある。発行日は今日付け。できたてを龍一は持ってきたことになる。

「ちょっと遅れてここに着いたのは、実はこれを取りに役場に寄っていたからなんだ」

得意げに話す龍一を、順平はただただ見つめる以外できずにいる。やっと出てきた言葉も、驚きのあまり情け

ない声になってしまった。

「どうやって…？」

さっき、同じ問いに答えたときよりもすました顔になって、

「だから、説得の仕方は色々なんだよ」

そう答えるだけだ。

奇妙な未確認生物に出会った時のように、順平の目は書類に釘付けになった。なかなか、目の前の事実を受け入れることができない。それでも、少し残っていた冷静な部分を使って、順平は龍一を見つめる。

「龍、ありがとう」

まっすぐな謝辞を照れくさそうに受け流し、龍一は明快に笑ってみせた。

「俺はともかく、順ちゃんにはルールを外して欲しくないんだ。俺は道からズレまくっているからさ、順ちゃんにはきちんと正しい道を歩いてもらって、それで、俺が道の上に戻りたいって思ったときの指針でいてもらいたいんだ」

昔みたいにね、と龍一は小さく付け足す。

「だから、こうやって無理しないといけないときは、早く俺に相談してよ。やれることは、やるからさ」

龍一の強い思いが伝わってくる。同調して、順平の胸にも熱く、強い思いと記憶が蘇ってきた。それを抑え込み、落ち着いた声を意識する。

「ありがとう、龍」

無理したせいか、それしか言葉にならなかった。

龍一という新入りを招いて、その夜は賑やかなものになった。こんなに騒ぐのは、真木が到着して間もない頃以来だ。作業内容もそれほどきつくなく、そして、まだ互いの胸の内をちらりとも覗けなかったころのことだ。今では互いを必要以上に知ってしまっている。そのため、交わす言葉にも何か含まれているようで、変に気を回してしまうようになっていた。それにも関わらず馬鹿みたいに騒げたのも、始終軽い態度を崩さない龍一がいたからだろう。

龍一の外見を、特に真面目な谷口は、怪訝そうに見つめていたが、裏表のないさっぱりした人柄を知ると、谷口も真木も砕けて馬鹿な話に興じるようになった。

「それにしても、重機はやっぱりすごいですね！」

ビール一缶も飲まずに真っ赤になった真木は、龍一の太い腕が憧れらしく、ずっとしなだれている。

「人力だけだと一週間かけた範囲を、たった三十分ですよ！オレは人間の非力さを実感しましたね。いや、重機はすごい！」

過酷な肉体労働から解放された喜びのせいか、さっきからずっと重機を褒めてばかりいる。

「いくらお忍びの工事とはいえ、全部人力で済まそうとしていたとはね。さすが順ちゃん、ストイックだなあ」

順平の真顔をにやにやと見つめながら、龍一は五杯目の焼酎ロックを飲み下した。真木にずっと貼り付かされているのを気にしている様子はない。空になったグラスに、真木がすかさず追加を注ぐ。

「それにしても、こんなに色々とできる友達がいたんなら、最初からこっちに頼めばよかったじゃないか」

不機嫌そうな口調の谷口だが、頭の上まですっかり赤く染まっており、上機嫌に杯を進めている。怒っているように見えるのは、酔って眠くなったのを我慢しているからだろう。

「こいつの会社は茨城にありますからね。距離もあるし、やはり地元の工事には地元の会社を使わないと、心証が悪いかと思ひまして」

「そうやって気を遣った結果、面倒なことにならなかつただろう。最初から身近なところを頼ってればよかったんだよ」

「谷口さん…ひょっとしてこの現場に来たこと、後悔しています？」

なにやら引っかかってくる谷口の態度が気になった。が、さっきから同じことしか言わない様子からして、やはりただ酔っ払っているだけのようだ。順平は聞き流すことにした。

「いやー重機、やっぱり重機、すごいですねー」

「宏太くん、未成年なんだから、ほどほどにしなね」

順平の忠告は、真木の耳に届く前に霧に溶け込むように消え失せているようだ。全く反応がない。惚けた目で天井を追いかけている。

「この重機があれば、電柱もすぐ、ですね」

その時、順平と谷口は、あ、と口が揃った。あまりにも順調に作業が進んだため、意識がすっかり本筋である宿舎の解体に集中していた。

「そうだった、電柱を忘れていた。あれ、途中でですかね」

「そうなんだよなあ。あそこまで掘ったんだから、途中で投げ出す訳にもいかないだろうし」

「電柱？」

二人の会話に、龍一が興味を示した。

「ひょっとして、あれか？三つの建物の真ん中辺りにあった、コンクリの電柱のことか？」

「そうです。オレたち、あれを引き抜こうとしていたんです」

龍一の言葉に、すかさず真木が反応する。

「そう言われると、少し根元が掘られていたような気がするな…順ちゃん、あれも撤去するものなのか？あればあったで使える日が来るかもしれないが…」

「まあ、ちょっと経緯があつてね」

電柱を人力で抜くことになるまでの概要を、順平は説明した。もちろん、谷口と真木が交わした男同士の約束についても、更には、真木の自殺の動機についても話した。

「つまり、あの電柱を人力で引き抜ければ、この宏太くんの自殺を止められる、ということだ」

一通り話を聞いてから、自分の腕にしがみついている真木を睨みつけ、

「そんな下らないことで命を捨てられるなんて、平穩に育った証拠だぜ」

と、呆れ返った。冷たい言葉をかけられても、真木は上機嫌に龍一に寄り添っている。

「しかし、そんなお話は置いたとしても、途中まで掘っているんなら、あの電柱どかしたいよな」

「別に、重機を使ってさっさと撤去してくれるっていうなら、俺はそれで構わないんだけど」

言いながら順平は、そっと谷口と真木を盗み見る。順平にしてみれば人力での撤去など何の意味もなさない。ただ、二人の間で取り決められた男同士の約束、賭けがあるから、それに付き合っているまでの話だ。

案の定、順平の言葉に谷口は眉をひそめた。

「確かにクレーンを使えばものの五分くらいでどかせるだろうが…それじゃあ、約束を守ったことにならないだろう」

「そうですよ。あの電柱が抜けたとしても、それが重機に引っ張られてあっさり抜けたってことなら、オレは死にますからね！」

「じゃあ…またスコップで頑張るか？」

途端に、抗議を上げていた二人が黙り込む。順平には分かっていた。二人とも、口では威勢のいい事を言っているが、無限とも言える歯の立たない力仕事に、うんざりしているのだ。いい加減、あのアスファルトのように硬い地面と向き合うのは終わらせたい、そう思っているのは分かっている。

もう真っ平ごめんだと思いながらも虚勢を張って手作業にこだわろうとするのは、男同士の約束、という言葉のためだろう。

一部始終、様子を見ていて、龍一は大体の事情を汲み取ったようだ。

「じゃあさ、こういうのはどうだ？」

他の面々は、一斉に龍一に注目した。

「電柱を抜くのは人力でやりたいんだろう？だから、土を掘るまではショベルを使って、いざ抜くときには四人で力を合わせればいいんじゃないか？」

順平が眉をひそめる。

「それじゃあ結局重機が主に動いているから、人力で抜いたってことにはならないんじゃないか…」

「その手でいきましょう！」

順平の言葉を遮り、真木が立ち上がる。

「その方法ならば、人の手で抜いた、と言えると思います。オレは」

「宏太に同感だ」

順平が口を開こうとするのを更に遮って、谷口が大きく頷く。順平は呆気にとられた。そして、その隙をついて龍一が勢い良く杯をかざし、

「よし、決まりだ！じゃあ、明日から早速取り掛かろう。明日中にはあの電柱、抜くぞ！」

谷口と真木が掛け声で調子を合わせる。その様子を呆れて見つめるしかなかったが、当事者二人がそれでいいと思っているならば、口出すことは何もない。

これで結果オーライとしよう。順平は、グラスに残っていたウイスキーを飲み干した。

九. 幼馴染(3/3)

少しぼうっとする頭を振るいながら自室に入ろうとしたとき、ふと気配を感じて振り向くと、龍一がいた。こちらも少し、目が虚ろである。

「どうした？」

他の二人は、お開きと同時に寝入っていた。ソファで崩れ落ちている二人に毛布をかぶせ、龍一が自分の布団に入ったところまでを見届けたはずだった。トイレを済ませ、寝ようとした時の龍一の訪問だ。

龍一は眠そうに頭をかき、大きな欠伸をする。

「いやね、谷口さんの寝言に起こされてね」

眠気のせいかな、あまり機嫌がいいとは言えないようだ。すっきりしない顔をしている。

「谷口さん、そんなに寝言が激しいのか？」

いつも順平だけは一人で寝ていた。それほどしっかりとした壁の作りではないが、ドアをきちんと締めれば外の音は大体防げる。今まで、何か物音や人の声で起こされたことはなく、谷口の寝言がうるさいというのも全く未知の情報だった。

順平の問い掛けには有耶無耶に答え、龍一はイライラした様子で、

「悪いけど、順ちゃんのところで寝させてくれないか」

断る選択肢を与えない口調で頼む。当然、順平は断れない。鍵を開け、快く龍一を招き入れるしかなかった。

順平の部屋は、書類で溢れかえっていた。ただ、元々几帳面な性格だからか、ベッドの上は何も散らからず布団が揃えられており、更に、机の上に重なる大量の紙は全て角を揃えられていた。床には分厚いチューブファイルが積み重なっており、それらの背表紙には個人名や会社名が記されている。そして、それらは五十音順に並べられていた。

「順ちゃん、ここまで来て仕事していたのか？」

「俺は代表取締役兼従業員なんだ」

ベンチャー企業であるため、どんなに偉い肩書きがついていても、自分自身が労働に勤まないと、仕事は動かない。どちらかという、ただでさえ息つく間もないほどの多忙だというのに、一時的にオフィス外勤務を許容してくれたビジネスパートナーに対し、順平は深く感謝している。彼女には一通りの事情を伝えた際に、準備金のある程度を会社から貸してくれることにもなった。せめてもの感謝の意を示すため、順平自身が担当している顧客の仕事だけでも滞らせることのないようにしないと、申し訳が立たない。

チューブファイルには、顧客ごとの情報が全て綴られている。どれも、外部に漏らす訳にはいかない機密情報だ。この山奥で万が一にもありえないとは思っているが、紛失防止のために順平は部屋に鍵をかけることにした。恐らく、そのせいで谷口と真木には無用な想像をさせていたに違いない。順平が自室に隠し持っているものが、色気のない紙の束だと知ったら、二人はきつとがっかりするに違いない。そんな期待を大切にするために、順平はいつまでも室内の秘密を守り通そうと思っている。

「ベッドに俺と二人で添い寝するのは嫌だろうから、今寝袋を出す。ちょっと待っててな」

ここに来たばかりの時にはそれほど長居する気はなかったため、寝袋で済ませていたのだ。今ではパイプの組立とはいえ、スプリングマットが着いたベッドを構えるまでに発展した。肉体労働が続くこの生活にも、だいぶ慣れてきた。こちらが本業かと錯覚してしまうほどだ。東京のオフィス街の一角にあるビルに通勤する毎日に、戻っていけるか不安になる。

順平が寝袋を掘り出している間、龍一は所在無く、椅子に座っていた。室内の様子をぼんやりした目つきで眺め、時折あくびをしている。

「けっこう、いいところだな」

順平は手を止めて、振り返った。気だるそうな顔をしているが、龍一の口調はしっかりしていた。

「お袋さんが住んでいたの、五十年近く前なんだよな。その頃の建物にしてはしっかりした作りだよ。使っている鉄骨もいいやつだ。豊かな場所だったんだな、ここは」

返事はせず、順平はまた寝袋を探し出す。ここに入る際に持ち込んだ荷物は、今では大半が不要となり、段ボール三箱に収められている。一つ一つ開けて、底の方まで掘り起こさないと見つけれられない。よりによって、一番最後の箱に入れていたそうだ。三箱目の蓋を開け、寝袋が入った袋を引っ張り出す。

「そうはいつでも、この程度の規模の建物なら、あと二週間もあれば更地にできる」

「早いな」

二ヶ月かけて、やっと、一棟目の四階フロアの半分程度までしか崩せていなかった。下調べに時間を要したこともあるが、やはり重機の存在は大きい。予定よりもだいぶ早く復帰できそうだと、早々に、明日にでもビジネスパートナーに連絡しなければ、と心に刻んだ。

「ここ、どうするつもりだ？」

寝袋を床に敷くと、順平はベッドに腰掛け、龍一と同じ目線になった。

「畑にしようと思っている」

思いつきではない。最初からその予定だった。広大な畑にして、息抜きを兼ねて菜園でも趣味にしようと思っていた。

そして、もし母親が望むならば、ここに家を作り、移り住まわせてやりたいとも思っていた。

「畑か。それはいいな」

おぎなりの相槌を打つと、特に深い興味があったわけでもないようで、龍一は黙り込んだ。

「俺からも、質問していいか？」

「ああ」

「三ヶ月前に会ったとき、金を貸してくれただろう。現金で五百万」

「ああ」

順平が今回の計画を話した際、龍一は自ら出資を名乗り出てくれた。順平はそのとき既に、十分な費用を用意していたため、必要ないと一度は断った。しかし、龍一が引き下がってくれなかった。どうしても、出資したいという。

そのため、ちょうど赤木に手渡す手付金の五百万円を現金で用意しないといけなかったこともあったので、あくまで借りる、という形でならと、龍一から現金を受け取ったのだ。

「話は少し逸れるが」

「ああ」

「ちょっと前に、川崎で強盗があったらしい。被害額は五億円」

「立派なもんだな」

「金額的にはな。そのとき盗まれた五億円と同じシリアルナンバーの札が、龍一、お前から借りた金に紛れ込んでいたそうだ」

「金は天下の回りものっていうからな」

少しの隙も見せずに、龍一が答える。その様子を、順平はじっと観察した。少しの動揺も見られない。そもそも、本心を隠すという技については、順平よりも龍一の方が数段うまい。昔から、龍一はいつでも笑っていた。周囲に不安を感じさせない強さを持っているのだ。

順平は諦めた。龍一が隠すと決めればそれを暴くことは無理だし、打ち明ける決心をすればすぐに話してくれるはずだ。

「そうだな、金は天下の回りものだよな」

「ああ」

「龍一」

眠そうな目を、順平に向ける。もう一息で閉じそうなくらい、極限まで塞がれている。

「お前みたいに普段からへらへらしているやつが、実は鉛みたいに重いものを抱えていたりするんだ。一人で支えられなくなったら、きちんと俺に言えよ」

「ああ」

「お前はいいやつだし強いけれど、少し馬鹿なところがある。馬鹿みたいに真っ直ぐ過ぎるところがある。たまにはずる賢くてもいいんだ。お前にずる賢さがないなら、俺を頼れ。分かったな」

素直に龍一は頷く。聞いているのかいないのか、はっきりせずもどかしい。しかし、これ以上言っても。ずっと同じ反応しか得られないと分かり、順平はベッドに横になった。

「ありがとな、順ちゃん」

寝付く直前の夢現の中、そんな言葉を聞いた気がした。

十. 終章

活気のある掛け声が響く。

「よし、じゃあ引っ張れ！」

龍一の支持が下り、谷口と真木が手にしたロープを思いっきり引く。二人が持つロープは、電柱の上部にくくられている。

「傾き始めたら倒れるまで早いぞ！間違っても下敷きになるなよ！」

二人が掛け声で答える。

順平と龍一は、電柱の下に括られたロープを手にしている。それを、綱引きのように体を傾けながら引いている。

電柱の頭が、微かに傾いた。と、同時に、四人の腕にかかっていた力が、急に抜ける。

「離れろ！」

龍一の支持の前に、谷口と真木は転がるようにして左右に駆け出す。

ゆっくりとしたモーションで、電柱は頭をもたげ、やがて地響きと砂埃を巻き上げて、倒れ込む。二、三回小さくバウンドし、電柱は静かに横たわった。

四人は地面にへたりこみ、呆然と倒れた電柱を眺めている。

「龍一」

返事はない。二人とも、視線が電柱から離れない。この地に澱んでいた黒く重たい空気が、あらゆるものを巻き込んで昇天していったようだった。心身から力が抜けている。

突然、真木が雄叫びを上げた。弾かれたように、他の三人が注目する。真木は右腕を高く掲げ、宣言した。

「オレ、死にません！」

「当たり前だ、バカヤロウ！」

すかさず谷口が怒号を上げる。真木はまだ気が収まらないようで、意味もなく叫び続けている。

平穏な日々の到来だ。微かに訪れるそよ風が心地よい。龍一は真木を見ながら声を上げて笑っている。順平は、再び龍一の名前を呼んだ。

「ここを畑にしたらさ、落花生を植えようと思うんだ。一面に、落花生を」

順平の視線は、同じように真木に注がれていて、龍一がどんな顔をしているかは分からない。

「それは、いい計画だ」

思ったとおりの返事に安堵する。順平はその場に大の字に倒れ込んだ。そして、真木の雄叫びに負けない声で、大いに笑った。

ちぎれた草が風に舞い上がり、青空に消えていった。